

阪大 一地域に生き世界に伸びる一

NOW



6

OSAKA UNIVERSITY 2011/No.125

トピックス

大阪大学会館完成式 総長候補者に平野俊夫教授を選出

クローズアップ

大阪大学の過去から未来へ、歴史をつなぐ
大阪大学適塾記念センター



大阪大学会館完成式



5月2日（月）、豊中キャンパスに在る大阪大学会館において『大阪大学会館完成式』を挙行了しました。

完成式が行われた建物は、長い間「イ号館」の名称で親しまれてきた建物で、昭和3年（1928年）に旧制浪速高等学校の校舎として、大阪府営繕部の設計、大林組の施工により建設され、学制改革により大阪大学に移管されました。以降、旧教養部の建物として、また、近年は、共通教育本館として利用されました。建物内外のいたるところに独創的なアールデコ調の意匠が展開されています。

平成16年（2004年）には、国の登録有形文化財建造物に指定されています。

平成23年（2011年）、大阪大学が創立80周年の節目となる年を迎えるにあたって、「本学関係者の共通の思いを寄せる施設」、さらには、「大阪における学術の伝統を受け継ぐシンボル」として、社学連携、産学連携、国際連携に関する様々な活動拠点として活用されるよう、多数の企業からの寄附をもとに整備を進め、このたび新たに「大阪大学会館」として完成しました。

完成式当日は天候にも恵まれ、寄附をいただいた企業等の代表者、本学教職員など約420名が出席し、工藤眞由美大学教育実践センター長の司会により式が進められました。

式の冒頭、このたびの東日本大震災で犠牲となられた方へ弔意を表し、黙祷が捧げられました。

2011 6月号
No. 125

目次

トピックス	2
クローズアップ	6
役員室だより	10
80周年	26
ナウススペシャル	30
キャンパスニュース	32
記念講義	55
表彰等	56
人事	66
インフォメーション	68
職員インタビュー	71
海外拠点だより	72
交流協定大学・編集後記	74
クラブ&サークル	75
トピックス	76



表紙写真：大阪大学会館

このほど改修が完了した大阪大学会館です。今回はトピックスとして完成式の様子をお伝えするとともに、「80周年特集」では内部の紹介とエコ改修について説明しています。26ページをご参照下さい。

表紙デザイン：株式会社ココティエ



ピアノ演奏 有馬みどり氏



熊谷信昭元総長



西川善文三井住友銀行名誉顧問



続いて、当会館講堂に設置したピアノを披露するため、ピアニストの有馬みどりさんによる演奏が行われました。

このピアノは1920年に製造されたオーストリアベーゼンドルファー社製のグランドピアノで、大阪大学会館の意匠を踏まえ、歴史的意義のあるピアノが相応しいとのことで、設置されたものです。90年を超える時を経ているピアノですが、今後100年の命を与えるという思いで修復師による修復が行われました。

鷺田総長から、大阪大学会館が、社会から厚い信頼を寄せられる優れた人材を育てるという本学の精神の灯となるとともに、本学を支援くださる方々のための開かれた場所となることを切に願う旨の挨拶があり、続いて、大阪大学会館の整備にあたり、多大な支援をいただいた企業等の方々を代表し、中村邦夫パナソニック株式会社代表取締役会長（代理受領 津賀一宏同社専務役員）に対して、鷺田総長から感謝状の贈呈が行われました。

モニュメント構築実行委員会委員の藤田治彦文学研究科教授による大阪大学会館の概要説明の後、来賓を代表して、大阪大学後援会理事長の西川善文株式会社三井住友銀行名誉顧

問、大阪大学同窓会連合会会長の熊谷信昭元総長から挨拶を頂戴しました。

お二人は共に本学の卒業生であり、在学中の思い出話を披露されるとともに、大阪大学の更なる発展に関する思いなどを語っていただきました。

その後、鷺田総長から、奨学団体等の学生生活支援団体の代表5団体に対する感謝状の贈呈があり、続いて、大阪大学会館に絵画を寄贈いただいた本学卒業生でもある中村真夫画伯の紹介がありました。

最後に、創立80周年という大いなる節目の大阪大学の姿を編集した『創立80周年記念映像』を上映しました。

また、当日、出席者の方々には、新しくなった会館内を自由に見学いただくとともに、本学の80年の歴史の中で、産学官連携の成果として、我々の社会生活に貢献した技術・製品・サービス等の実用化事例等80件をパネル展示した「産業界との連携のあゆみ」を併せてご覧いただきました。

大阪大学会館
(総務企画部総務課)
関連記事は29ページをご覧ください。

総長候補者に平野俊夫生命機能研究科教授を選出

6月10日(金)にコンベンションセンターにおいて、総長選考第2次意向投票及び総長選考会議が行われ、鷺田清一総長の後任となる総長候補者に平野俊夫生命機能研究科教授が選出されました。

任期は、平成23年8月26日から平成27年8月25日までの4年間です。

平野 俊夫 (ひらの・としお)

昭和22年4月17日生(64歳)

昭和47年大阪大学医学部卒業。大阪府立羽曳野病院内科を経て、熊本大学助教授、大阪大学助教授、同教授、生命機能研究科長等を歴任。平成20年から、平成23年3月まで同大学院医学系研究科長・医学部長。持田記念学術賞、サンド免疫学賞、藤原賞、クラフォード賞、日本国際賞などを受賞。紫綬褒章受章。

この度、大阪大学次期総長候補者に選ばれましたこと、身に余る光栄であるとともに、その責任の重大さに身が引き締まる思いでございます。

現在わが国は戦後最大の危機に直面しています。大学もまたきわめて厳しい状況にあります。このような時代において、魔法のような素晴らしい解決法はございません。困難な時ほど、基本に立ち戻る必要があります。では、大学の基本とは何でしょうか？それは大学は「学問と教育の府である」と言うごく当たり前の事だと思えます。

「国家100年の計は教育にあり」と言われておりますように、我が国の将来は、ひとえに人材育成にあります。また我が国が存続して行くためには、学術や技術開発の振興が不可欠であります。大学は、将来各方面で指導的立場に立ち、人類の福祉と繁栄に寄与できる次代の優秀な人材を育て、世に送り出すという使命を担っています。

また、学術の振興なくして革新的な技術開発や、心豊かで平和な社会の発展はありません。社会が大学に求めているところは、知的創造活動としての基礎的学術研究の推進であります。大学がどれほど基礎的学術研究に力を注いでいるかは、その大学の底力に反映されると思えます。流行に流されることなく、永続性を有し、かつ卓越した“学問の府”であり続ける基盤を確立する努力をして行く所存でございます。

さらに、日本における教育・研究のあり方を、ただ受け身に処するのではなく、これまで以上に大学としての立場から、国や社会に対して積極的に提言・実践していくことこそが大学に課せられた責務であると思えます。大学は「学問と教育の府である」という立場から、我が国はもとより、世界の人類の発展と福祉に貢献して行きたいと思えます。

「天の時、地の利、人の和」という言葉がございます。今、この時、この大阪で、「世界をリードする学問と教育の世界的拠点となる」という高い志をもって、21世紀はもちろんのこと、22世紀においても輝き続ける大阪大学の基盤を、大学構成員全員の皆様の英知と力をあわせて築いて行く覚悟でございます。

皆様のご理解とご声援、そしてご鞭撻を心からお願い申し上げます。

OSAKA
UNIVERSITY



記者会見の様子
左：鷺田清一総長
中：城野正弘総長選考会議議長
右：平野俊夫生命機能研究科教授



投票会場の様子

大阪大学の過去から未来へ、歴史をつなぐ 大阪大学適塾記念センター

■大阪大学適塾記念センターが発足しました

本年4月1日、大阪大学適塾記念センターが、新しい全学の部局のひとつとして誕生しました。大阪大学創立80周年の記念すべき年にあたって、本学の「精神的源流」のひとつで、国の史蹟・重要文化財である適塾の維持管理、および緒方洪庵をはじめとする適塾関係者の業績の顕彰につとめるとともに、適塾・大阪・オランダの学術・文化に関する研究の発展に寄与することを目的として、大阪大学会館内（4階）に発足しました。



適塾記念センター



大阪大学会館

■適塾の歴史と緒方洪庵の事跡

・適塾とその教育・学問

適塾（適適齋塾）は、緒方洪庵（1810～1863）によって1838（天保9）年に開設された蘭学塾です。塾生の出身地は青森県をのぞく全国の都道府県に及んでおり、その名を「姓名録」に残している塾生だけでも636名のぼります。門下生の中から福澤諭吉、長与専斎、大村益次郎、橋本左内、佐野常民らをはじめ、幕末から明治にかけて日本の近代化に著しい貢献を果たした人物が数多く輩出されました。

適塾の門人らの活躍の背景には、近世大坂の町人社会において蘭学（オランダを通じて移入されたヨーロッパの学



緒方洪庵肖像
五姓田義松画（1901年）

術・文化）が幅広く受容されていたことがあげられます。

・緒方洪庵の功績

洪庵は塾生教育のかたわら、当代随一の蘭医学者として研究と実践の二方面に尽力しました。研究面では、病理学の総論書『病学通論』やドイツの内科医書の翻訳『扶氏経験遺訓』の刊行が挙げられます。医療の実践面では、除痘館を設立し天然痘予防事業に尽力し、コレラ流行時には『虎狼痢治準』を刊行して医学知識の普及につとめました。



『虎狼痢治準』
（1858年）

『種痘医免許証』
（1866年）



『扶氏経験遺訓』
（1857年）

・文化財としての適塾

適塾の建物は江戸時代後期の町屋の遺構としても貴重なものであり、1940年に大阪府の史蹟、翌41年には国の史蹟に指定され、1964年に重要文化財に指定されました。1942年緒方家から国（大阪大学）に建物が寄贈され、改修を経て広く一般に公開されています。また、これまでに適塾に関する多くの資料の寄贈を受けており、その一部が適塾で公開されています。

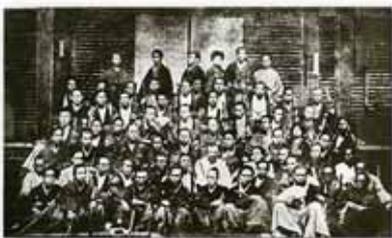


適塾 大阪市中央区北浜3丁目3番8号
 (京阪・地下鉄淀屋橋または北浜駅にて下車)
 開館時間：午前10時～午後4時(月曜日・国民の祝日の翌日と
 年末年始は休館)、入場料一般250円、学生130円

■適塾から大阪大学へ

江戸幕府は1862(文久2)年、洪庵を江戸に召し出し奥医師とすると同時に西洋学問所の頭取としました。洪庵は翌年江戸で病死します。洪庵不在の時期も家人と門下生たちは塾を守りましたが、明治新政府の教育制度の整備と共に適塾は発展解消してゆきました。

洪庵の息子惟準を院長とした大阪仮病院、オランダ人医師ボードウィンを迎えて惟準はじめ適塾門下生らを中心として創立された大阪医学校、さらに府立医科大学、大阪帝国大学医学部、そして大阪大学医学部へと発展し今日にいたっています。このような経緯から、大阪大学では適塾をその「精神的源流」として位置づけてきました。



大福寺の大阪仮病院
(1869年)



大阪帝国大学医学部
(中之島)

■センター発足までの経緯

・適塾記念会による活動

大阪大学では、このような適塾の歴史的遺産を引き継ぐと同時に、大阪大学に所属する研究者によって、適塾に関する研究・顕彰活動がさかんにおこなわれてきました。その中心となったのが「適塾記念会」です。適塾記念会は、1952年に緒方洪庵と適塾門下生の顕彰と我が国近代学術の発展を明らかにし、文化の向上に資することを主目的に設立され、現在にいたるまで活発に活動を行い、会誌『適塾』を刊行しています。

・緒方洪庵生誕200年と創立80周年

昨年2010年は、緒方洪庵の生誕200年にあたっており、総合学術博物館では第11回企画展・適塾特別展示「緒方洪庵生誕200年記念・大阪大学創立80周年イベント えがかれた適塾」展が開催され、また医学部では緒方洪庵生誕200周年事業として市民公開講座や学術国際シンポジウムが開かれるなど、適塾と緒方洪庵顕彰の機運が高まった1年でした。

大阪大学では2008年以降、公益法人制度の改革をうけて、適塾管理運営委員会と適塾記念会が従来おこなってきた適塾の運営、資料保存、顕彰事業の継続と発展の方向性を検討してきました。その結果、本年、創立80周年を迎えるにあたり、適塾の運営・顕彰事業のさらなる発展を期し、新たに大阪学とオランダ学の研究部門を加え、適塾記念センターを発足させることになりました。

・大阪学とオランダ学

適塾は近世大坂の文化的土壌の上に成立し、そこで生まれ、世界に羽ばたく人材を輩出しました。近世大坂から近代大阪へといたる文化を広く対象とする学術研究は、未来に向けての大阪文化の発展に寄与するものであり、適塾に関する研究を深めることにもつながるものと考えられます。また、適塾で講じられた蘭学は、オランダを通じて我が国にもたらされたものです。現在大阪大学はグローニンゲン大学と連携関係を築いています。その関係にもとづいて、センターではオランダからの招聘教員を受け入れ、オランダに関する日本国内の研究教育拠点となることを目指すこととなりました。

・センター設置準備ワーキング

センターの設置については、広報・社学連携室から設置申請を行い、2011年2月15日の教育研究評議会、同21日の役員会にて了承されました。これを受けて本センターの教員人事や関係規定の制定などの準備を進めるために「適塾記念センター設置準備ワーキング」を置き、4月1日に発足したものです。

■適塾記念センターの部門構成と業務内容

ここまで述べてきた目的のために、センターでは主に次のような業務を行います。

・部門の業務内容

部門	業務内容
適塾運営部門	<ul style="list-style-type: none"> 適塾の維持管理、運営に関すること 適塾の広報活動に関すること 適塾が保有する蘭学関係等の資料の公開を目指した、整理・目録作成等に関すること 講演会等の開催に関すること 適塾研究関連の書籍の刊行に関すること 機関誌「適塾」の発行に関すること 適塾記念会に関すること
大阪学研究部門	<ul style="list-style-type: none"> 適塾に関連する資料の収集 適塾に関連する学術的研究 大阪学に関する学術的研究
オランダ学研究部門	<ul style="list-style-type: none"> オランダ学（オランダの歴史、医学史、文化、言語、経済、日蘭交流史など。適塾保有の資料に基づく研究も含む。）等に関する学術的研究 適塾・日蘭学術交流に関する国際シンポジウム等の企画・開催 オランダからの研究者の受け入れ、担当授業、セミナー、共同研究プロジェクト等のコーディネート

・部門の構成

部門	教授	准教授	助教	特任研究員
適塾運営部門	10（兼任）	3（兼任）		1（非常勤）
大阪学研究部門	（注1） 1（兼任）	（注2） 1（専任）		
オランダ学研究部門	（注3） 3（招へい1・兼任2）	2（兼任）		

注1 大阪学研究部門の兼任教授1名は、総合学術博物館より兼任
 注2 大阪学研究部門の准教授は、大学留保ポストの措置を別途要求
 注3 オランダ学研究部門の招へい教員1名は、オランダより来学予定
 ※適塾記念センターに係る事務は、広報・社学連携事務局が所掌する。

・その他

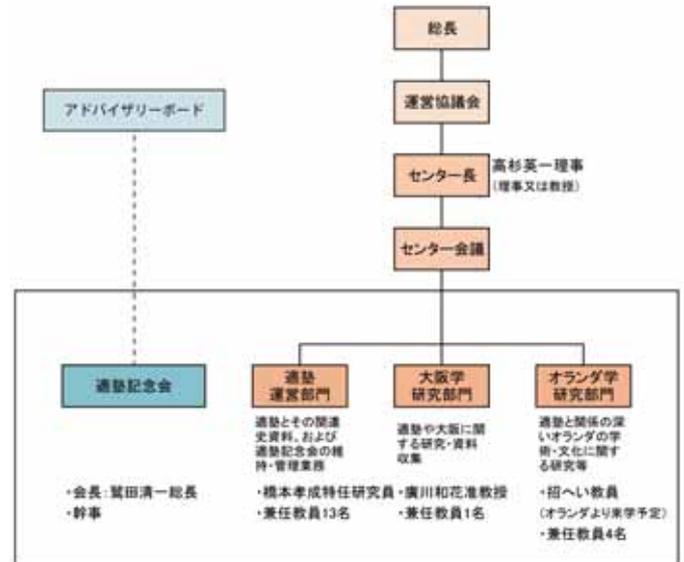
大阪大学会館内に、適塾に関する文献資料等を備えた資料室を設置し、適塾・大阪・オランダと関連諸分野の研究・普及活動を推進します。なお資料室は目下整備中であり、今後、随時資料の充実をはかってゆきます。

洪庵忌（6月10日）の前後には、適塾記念会と協力し、適塾にて毎年2週間程度の特展を行います。



センター資料室

■適塾記念センター 組織図



■適塾記念センター 構成員

センター長 高杉英一（理事・副学長）
 副センター長 木下タロウ 適塾運営部門 教授（兼）

【適塾運営部門】

- 教授（兼）村田 路人（文学研究科）
- 教授（兼）中尾 敏 充（法学研究科）
- 教授（兼）森 藤 一 史（法学研究科）
- 教授（兼）澤 井 実（経済学研究科）
- 教授（兼）的 場 梁 次（医学系研究科）
- 教授（兼）竹 田 潔（医学系研究科）
- 教授（兼）中 直 一（言語文化研究科）
- 教授（兼）米 田 悦 啓（生命機能研究科）
- 教授（兼）江 口 太 郎（総合学術博物館）
- 教授（兼）木 下 タロウ（免疫学フロンティア研究センター）
- 准教授（兼）和 佐 勝 史（医学系研究科）
- 准教授（兼）高 橋 京 子（総合学術博物館）
- 講師（兼）合 山 林太郎（文学研究科）
- 特任研究員 橋 本 孝 成

【大阪学研究部門】

- 教授（兼）橋 爪 節 也（総合学術博物館）
- 准教授 廣 川 和 花

【オランダ学研究部門】

- 招へい教授 オランダより来学予定
- 教授（兼）武 田 佐知子（文学研究科）
- 教授（兼）松 野 明 久（国際公共政策研究科）

准教授(兼) 大谷 順子(人間科学研究科)
准教授(兼) 宮原 暁(グローバルコラボレーションセンター)

【事務】

広報・社学連携オフィス広報・社学連携事務室

■2011年度適塾関係行事

◆適塾特別展示「継承する適塾の精神」

—大阪大学創立80周年にあたって— (済)

日時 5月31日(火)～6月12日(日) 10:00～16:00
場所 適塾

◆適塾見学会

日時 第1回:6月12日(日)(済)
第2回:10月30日(日) 13:30～16:00

- ・第1回:適塾にて特別展示の解説を行うとともに、ふだん見ることのできない古文書の解説も行います。

講師 村田路人文科学研究科教授

- ・第2回:洪庵墓所龍海寺他(予定) 大坂の蘭学者の墓地を巡り、解説します。

講師 橋本孝成適塾記念センター特任研究員

対象 適塾記念会会員(参加費無料)

定員 各日25名(申込み先着順)

◆適塾講座

「大阪の産業発展と大阪高等工業学校・大阪帝国大学」

講師 澤井 実経済学研究科教授

日時 第1回:9月6日(火)、第2回:10月4日(火)、
第3回:11月1日(火) いずれも18:00～19:30

場所 大阪大学中之島センター

◆公開講座フェスタ2011

記念会が参画する阪神奈大学・研究機関生涯学習ネット(HSNネット)で行うリレー講座です。

講師 村田路人文科学研究科教授

日時 11月18日(金) 19:00～20:30

場所 さいかくホール(大阪府新別館北館1階)(予定)

◆適塾記念講演会

講師をお招きし、大阪における新しい学術、文化の成果等についてお話いただく講演会です。

日時 11月(予定)

場所 未定

適塾記念会

本センターにおかれている適塾記念会は、緒方洪庵をはじめ適塾門下生の顕彰と、大阪における学術の伝統を明らかにし、その上にたつ新しい学術・文化の成果を広く伝えることを主目的とし、1952年に設立されました。現在にいたるまで活発に研究・普及活動を行い、会誌『適塾』を刊行しているほか、図録『緒方洪庵と適塾』、『門下生調査資料』などを刊行してきました。また、特別展示や適塾講座や講演会を開催し、一般に向けてその研究成果を公開しています。ぜひご入会ください。



会誌『適塾』

入会案内

- ・普通会員(年間1口2000円)、賛助会員(年間1口10000円)があります
- ・郵便振替 00910-0-327996 適塾記念会

会員特典

- ・「会員証」(適塾の参観無料)と機関誌「適塾」(年刊)の送付
- ・講演会、特別展示、適塾講座等の行事案内
- ・図録・絵はがき等の1割引での購入

問い合わせ先

〒560-0043 豊中市待兼山町1-13 大阪大学会館
大阪大学適塾記念センター内 適塾記念会事務局
電話:06-6850-5016
email: kinenkai@tekijuku.osaka-u.ac.jp

■大阪大学構成員の皆様へ センターよりお願い

大阪大学および適塾記念会では、半世紀以上にわたって緒方家や塾生の子孫の方々をはじめ、多くの方から洪庵や適塾ゆかりの資料の寄贈を受けてきました。適塾記念センターでは、これらの貴重な資料をより充実した体制で継承し、保存と活用につとめてまいります。適塾と大阪大学を愛する多くの方々に、これらの資料への理解を深めていただけるよう、適塾と大阪・オランダに関する研究を推進してゆきますので、一層のご支援をたまわりたく、お願いいたします。

お近くに適塾に関する資料や情報があれば、ぜひセンターにご一報ください。また、学内からの適塾に関するお問い合わせやご相談もお受けします。(大阪学研究部門 廣川和花)

大阪大学適塾記念センター
06-6850-5016(内線豊中5016)

役員室だより

2011.6 Vol.42

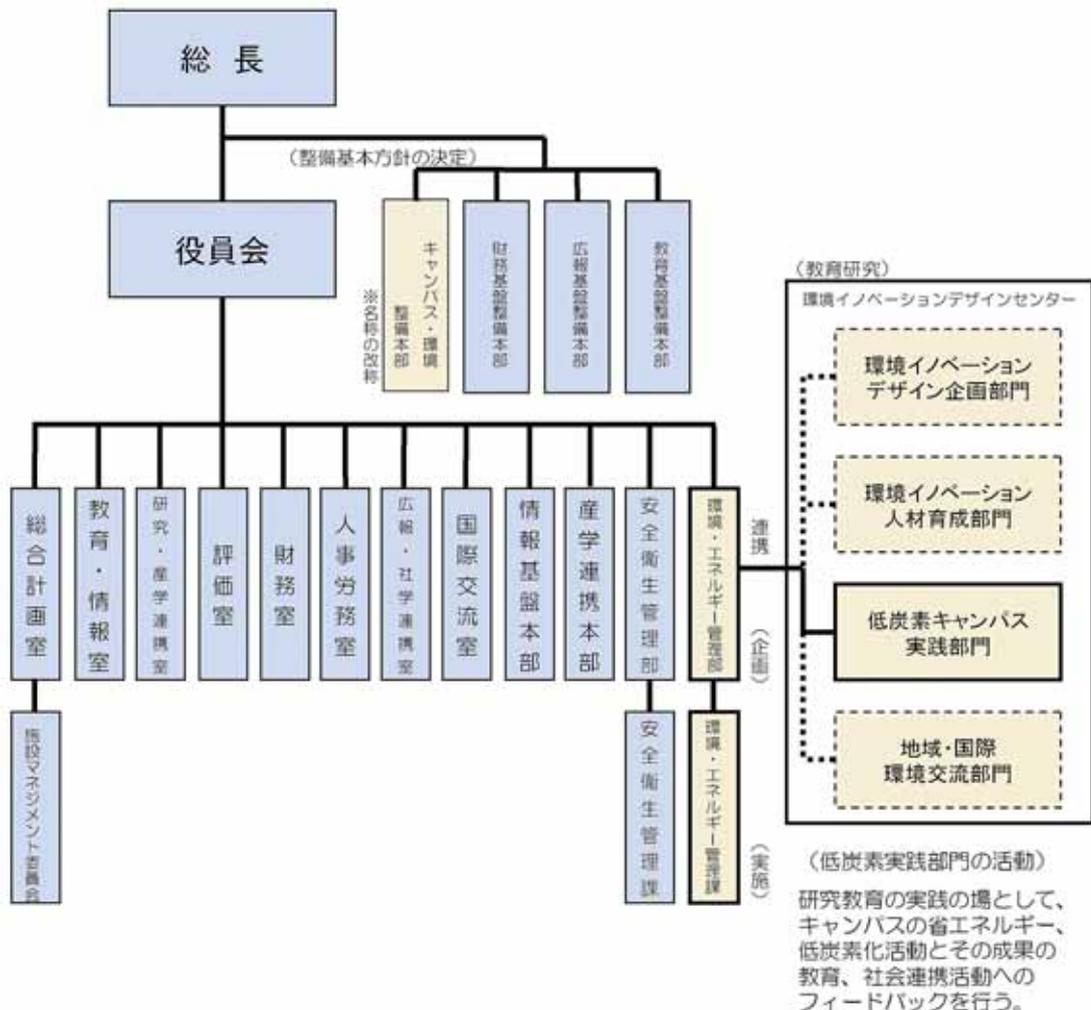
大学の動き

環境・エネルギー管理部の設置

6月1日から環境・エネルギー管理部が新しく設置されました。深刻化する地球温暖化に対し、エネルギー使用の合理化及び温室効果ガスの排出抑制により低炭素キャンパスを実現するため、環境・エネルギー管理部を設置し、エネルギーの統括管理により、

実行性と継続性のある低炭素化対策に向けて取り組みを進めることとなりました。また、環境・エネルギー管理部では、環境イノベーションデザインセンターと連携を行い、教育・研究においても活動の場を広げることとしています。

体制



各室の検討状況

総合計画室

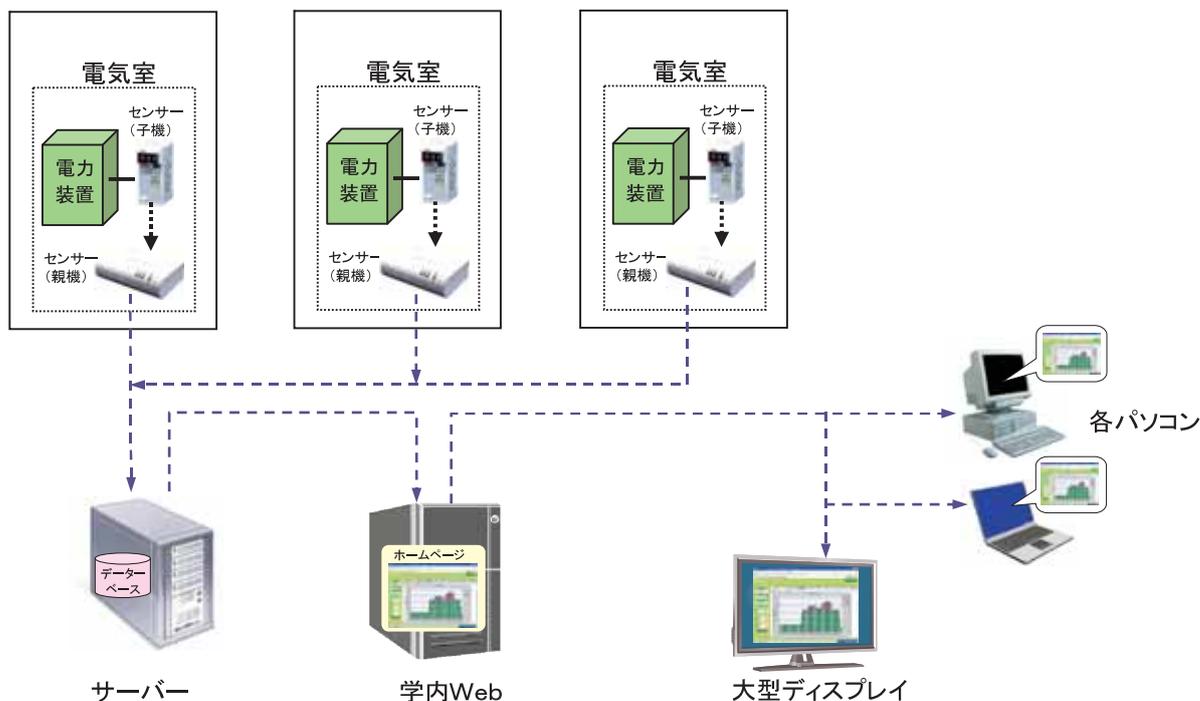
電力の可視化

「いつ」「どこで」「なにが」「どれだけ」エネルギーが使用されているか把握することができる電力の可視化システムを導入いたしました。本システムは、各団地の電気室単位（主な建物単位）で電力使用量を計測し、そのデータを学内ネットワークを利用して集め、学内向けポータルサイトに電力の使用状況を公表することができます。

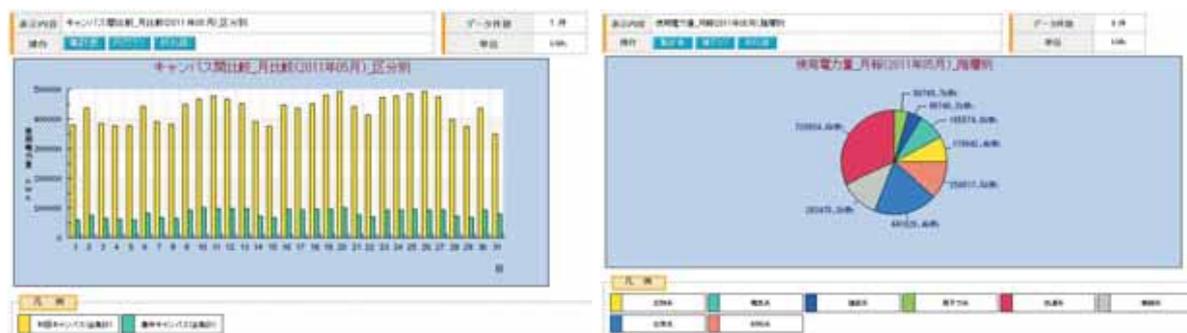
今後、本システムにより得られたデータを公表・分析し、エネルギー使用の効率化・合理化を推進するとともに、大学構成員のさらなる省エネ意識の向上を図ります。

(アクセス方法) 学内向けポータルサイト 環境・エネルギー関連 学内使用電力情報

可視化システムイメージ図



電力使用状況の表示画面



施設整備とキャンパス環境の改善

以下の施設整備とキャンパス環境の改善工事が完了しました。

中山池周辺環境整備



エントランスゾーン



散策路

中山池周辺の環境整備を国及び大阪府の補助金等並びに本学の負担により、大阪府の発注で整備を実施しました。本整備では、水辺観賞ゾーンや中山池を周回できる散策路等を設け、構成員や地域住民にとって魅力あるキャンパス環境の形成を目指しました。

吹田キャンパス東門周辺道路整備



整備前



整備後

吹田キャンパス東門は入構のための車道が1車線しかなく、構内へ入る車両と医学部附属病院の駐車場に向かう車両の動線の重複によって、渋滞が発生していました。この渋滞解消を図るため、医学部附属病院の駐車場に向かう専用車道を新設しました。また、病院前には送迎車乗降場を設け、利便性に配慮しました。

外灯の新設・更新



柴原口



保健センター
吹田分室前

外灯 新設・更新数

	新設	更新
豊中	12基	380基
吹田	52基	129基
箕面	12基	106基
合計	76基	615基

「安全・安心」なキャンパス環境形成を目指し、キャンパス内の夜間の防犯性の向上を図るため、豊中・吹田・箕面キャンパスに合計76基の外灯を新たに設置しました。また、外灯の新設とあわせ、環境負荷の低減を図るため、既存の外灯を省エネタイプに更新しました。これにより昨年度と比べ、今後の年間消費電力量を約29万kwh、年間CO2排出量を約100t削減できる見込みです。

教育・情報室

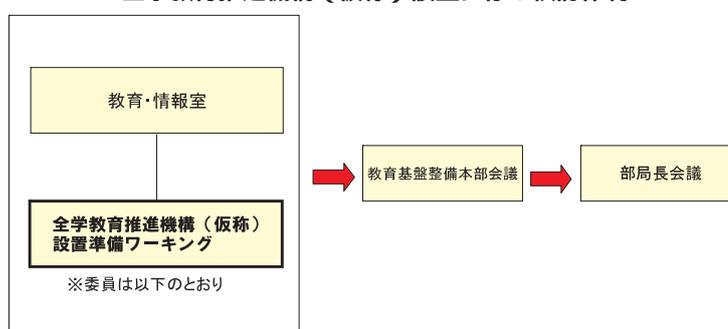
全学教育推進機構（仮称）設置準備ワーキングの設置

『阪大NOW』4月号（2011/No.124 p.18）で、本学の言語教育と全学教育の抜本的な改革を進めていること、及び、全学教育推進機構（仮称）を新設予定であることをお知らせしていましたが、具体的な設置準備を開始するため、教育基盤整備本部会議、役員連絡会、部局長会議の承認を経て、5月17日より、教育・情報室の下に「全学教育推進機構（仮称）設

置準備ワーキング」が置かれました。

ワーキングの主査は教育・情報室長が務め、全学教育に関係する教育・情報室員のほか、関連の全部局長、及び教育改革担当の総長補佐が委員となっています（下表）。今後、同機構創設のため具体的な検討を進めていく予定です。

全学教育推進機構（仮称）設置に係る検討体制



※具体的な検討が進んだ段階で、全学教育推進機構（仮称）設置準備委員会を設置する。

全学教育推進機構（仮称）設置準備ワーキング委員

所 属	役 職	氏 名	備 考
理事・副学長		小 泉 潤 二	教育・情報室長 主査
教育・情報室	教 授	小 林 傳 司	教育・情報室員
教育・情報室	教 授	藤 田 喜久雄	教育・情報室員
教育・情報室	教 授	三 原 健 一	教育・情報室員
大学教育実践センター	センター長	工 藤 眞由美	（教育・情報室員）
言語文化研究科	研究科長	木 村 茂 雄	
サイバーメディアセンター	センター長	竹 村 治 雄	（教育・情報室員）
コミュニケーションデザイン・センター	センター長	三 成 賢 次	
グローバルコラボレーションセンター	センター長	栗 本 英 世	
学際融合教育研究センター	センター長	久 保 司 郎	
国際教育交流センター	センター長	菊 野 亨	（教育・情報室員）
世界言語研究センター	センター長	高 橋 明	
外国語学部	学部長	杉 本 孝 司	総長補佐
理学研究科	研究科長	東 島 清	総長補佐

教育関係共同利用拠点の認定

平成23年4月1日付けで、本学の日本語日本文化教育センターが、文部科学省の教育関係共同利用拠点に認定されました。期間は平成28年3月までの5年間です。本拠点のために「共同利用拠点運営委員会」が設置されます。

これまで同センターが国費留学生への日本語教育に関して果たしてきた中心的な役割を踏まえ、今後は公私立大学や国費留学生以外への日本語教育についても中心となって活動していくこととなります。

平成23年度大阪大学ファカルティ・ディベロップメント(FD)研修

以下の日程表の通り、9月13日(火)に豊中キャンパスで、9月16日(金)に吹田キャンパスで、平成23年度の全学FD研修を行います。本年の全体講話は、『大学の教育力 何を教え、学ぶか』などで高等教育研究の第一人者として知られる金子元久教授(国立大学財務・経営センター、元東京大学教育学研究科長)と、平成21年度に実施された本学の「大学機関別認証評価」において中心的な役割を担っておられた荻上統一教授(大学評価・学位授与機構、元東京都立大学総長)です。ともに中央教育審議会で重要な役割を果たしておられます。

本研修は、特任教員を含むすべての教授、准教授、講師、助教が対象で、研究員も受講可能です。本学に平成22年度に設置された「ファカルティ・ディベ

ロップメント検討ワーキング」と教育・情報室によって慎重に企画されており、連続して受講しても同一の内容が繰り返されることはありません。豊中と吹田の両方の研修を受講することも可能です。

本研修に参加することは、ファカルティ・ディベロップメントと呼ばれる教育力の開発の第一歩、あるいは契機にすぎません。FDとは、個々の教員が自己の教育の能力を高め開発する不断のプロセスであり、それによって大阪大学の人材育成機能が強化され、大学の社会的責任が果たされることを意味します。教員は本研修に、少なくとも3年に1度参加することが要請されていますが、全教員がFDに積極的に取り組むことを希望します。

平成23年度大阪大学ファカルティ・ディベロップメント(FD)研修日程(案)

豊中地区 平成23年9月13日(火)文系総合研究棟

13:00~13:20 (20)	13:20~13:50 (30)	13:50~15:00 (70)	15:00~15:10 (10)	15:10~15:20 (10)	15:20~16:50 (90)	16:50~17:00 (10)
受付・資料配付	開会式 挨拶	講話 国立大学財務・経営センター 研究部長 教授 金子元久氏	研修	個人情報保護 休憩・移動	分科会A	閉会・アンケート 記入
	《TA・RAの活用方法》 講師:工学研究科 教授 藤田喜久雄				《短期・超短期留学 プログラムの推進》 講師:国際教育交流センター 教授 近藤佐知彦	
	分科会B				《共通教育賞受賞者による 模擬授業「魅力的な授業づく りのポイント」》 講師:理学研究科 教授 升方久夫	
			講師		分科会C	
			評価室		《防災とまちづくり》 講師:国際公共政策研究科 教授 山内直人	

研修A~Cの内1つを選択

吹田地区 平成23年9月16日(金)コンベンションセンター

13:00~13:20 (20)	13:20~13:50 (30)	13:50~15:00 (70)	15:00~15:10 (10)	15:10~15:20 (10)	15:20~16:50 (90)	16:50~17:00 (10)
受付・資料配付	開会式 挨拶	講話 大学評価・学位授与機構 評価研究部 教授 荻上統一氏	研修	個人情報保護 休憩・移動	分科会A	閉会・アンケート 記入
	《TA・RAの活用方法》 講師:工学研究科 教授 藤田喜久雄				《英語による授業の質保証》 講師:人間科学研究科 准教授 山本ベバリー・アン	
	分科会B				《共通教育賞受賞者による 模擬授業「魅力的な授業づく りのポイント」》 講師:工学研究科 准教授 松科浩由	
			講師		分科会C	
			評価室		《題目未定》 講師:コミュニケーションデザイン・センター(未定)	

研修A~Cの内1つを選択

アドミッション・ポリシーの検討

『阪大NOW』2月号(2011/No.123 p.13)でお知らせしたように、アドミッション・ポリシー(学生の受け入れについての方針)の検討を開始しています。それぞれの学部・研究科において、人材育成の理念・方針・方策そして入試について根本から考えていただき、以下のような論理によってそれぞれのアドミッション・ポリシーを作成していただく予定です。

- (1) 教育理念、あるいは学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)
「部局の人材育成の目的は何か、どのような人材を育てて送り出そうとするのか」
- (2) 教育プログラム、あるいは教育課程編成・実施

の方針(カリキュラム・ポリシー)

「そのような人材をどのような教育プログラムによって育成しようとするのか」

- (3) 求める学生像、あるいは入学者の受け入れ方針(アドミッション・ポリシー)

「その教育プログラムにどのような学生を受け入れるのか」

- (4) 入試選抜の基本方針

「そのような学生をどのようにして見出し選抜しようとするのか」

6月の入試委員会で、各部局に検討を依頼します。

大学院等高度副プログラム等の受講状況

平成20年度に始まった大学院等高度副プログラムは、年々その提供数が増え、平成23年度には35のプログラムが開設されています。また、社会人等を対象に7つの科目等履修生高度プログラムが開かれています。今年度は上記に加えて、3つの大学院副専攻プログラムが新たに開始しました。

それぞれのプログラムの第1学期の受講申請者数は、大学院等高度副プログラム514名(B1名、M452名、D61名)、科目等履修生高度プログラム87名、大学院副専攻プログラム156名(M150名、D6名)です。

これらのプログラムの修了者には、専門とする課程の学位記に加えて、総長名による修了認定証が与えられます。今後も全学の学生等に広く周知し、受講者が拡大するようご協力をお願いします。



高度教養プログラム「知のジムナスティックス」の受講状況

今年度から始まった高度教養プログラム「知のジムナスティックス」では、学部高年次のために46科目、大学院生のために175科目が提供されています。

同プログラムの第1学期の履修登録数は、学部科目255件、大学院科目740件となっています。全学の学生のために開設された高度教養プログラムは、上記の「大学院等高度副プログラム」と並んで、大阪大学独自の特徴的な教育プログラムです。これらの科目の受講者が増えるよう、全学のご協力をお願いします。



研究・産学連携室

産学連携本部がテクノアライアンス棟へ移転しました

テクノアライアンス棟は、大阪大学における先進的産学連携活動の拠点をめざし、「Industry on Campus」を推進する研究者の交流スペースを備えたラボ施設として吹田キャンパス中心部に建設され、6月より供用を開始しました。

それに先立ち、産学連携本部（ベンチャービジネスラボラトリー、共同研究部門を除く）及び研究推進部産学連携課が、5月19日（木）に同棟へ移転しました。

同棟では、大阪大学が全国に先駆けて構築した共同研究講座をはじめとし、同講座をさらに進化させた新たな試みである協働研究所が設置されます。

これにより、本学は企業との人材交流による若手育成、「Internship on Campus」による大学院生育成が可能となり、企業は高度な教育・研究環境を利用した戦略的研究の継続・人材育成が可能となるなど文字通り「Industry on Campus」の推進拠点となります。

ます。

なお、同棟には創立80周年記念事業で製作した「産業界との連携のあゆみ」パネル（80年間の産学連携の成果）を常時展示していますので、是非ともご見学にお立ち寄りください。

関連記事については29ページをご覧ください。



脳情報通信融合研究センターの設立について

今後の新たな研究領域として重要となる脳情報通信の分野について、独立行政法人情報通信研究機構（NICT）等関係機関との連携・協力の一層の強化を図りつつ、世界トップクラスの叡智を結集し融合的に研究を推進するため、6月1日に脳情報通信融合研究センター（センター長：柳田敏雄 大学院生命機能研究科・特任教授）が設置されました。

センターの実験棟は、大学院生命機能研究科ナノバイオロジー棟南側の土地を本学が提供し、NICTが施設を建設中（竣工予定：平成25年1月）です。本学の土地に他の独立行政法人が施設を建設し、共同で運用するというのは本学にとって初めての事例です。

チャレンジ支援プログラムで48名が採択

科学研究費補助金の基盤研究（C）又は若手研究（B）の交付を最終年度として受けている中堅・若手研究者が、次年度の科学研究費補助金の応募の際、より大型の上位研究種目へ応募しやすいよう、不採択であった場合には研究費を補償する制度であるチャレンジ支援プログラムを平成22年度から実施しています。

平成23年度科学研究費補助金の応募にあたり、チャレンジ支援プログラムを活用して応募した研究者79名のうち、48名が若手研究（A）、基盤研究（B）または挑戦的萌芽研究に採択されました。なお、惜しくも不採択となった研究者には研究費（各80万円）を配分することとなりました。

大型教育研究プロジェクト支援室に統括マネージャー補佐の配置

大型教育研究プロジェクト支援室では、全学的に推進する大型プロジェクト獲得のための企画・調査及び申請に係る支援並びに本学の重点プロジェクトの継続的な支援のために、プロジェクト運営や競争的資金の業務等に長けた研究支援者（特任教授）を統括マネージャーとして1名配置していますが、このたび5月1日付けで、統括マネージャーを補佐する講師を配置しました。

プロジェクトの運営、競争的資金の性格に応じた取り扱い、配分機関との調整等に習熟した講師を統括マネージャー補佐として配置することにより、大型プロジェクト事業の着実な進捗管理と運営支援を円滑に進めることができるほか、大型プロジェクト獲得に関してもさらに充実した支援が可能となることが期待されます。

また、研究・産学連携室の指示のもと、さまざまな視点から本学の研究力の分析を行い、研究力強化に努めてまいります。

（抱負）

これまで大阪大学において部局横断的な研究活動を行ってきました。その経験から学んだ異なるアイデアや人を一つにまとめること、様々なデータを集め問題解決を図っていくこと等を仕事に活かしていきたいと思っています。さらに今後の取り組みにおいて、大阪大学を構成する全ての人々が共通に持つことのできるビジョン、「一体感」を創ることができたらと考えています。



平井 啓 講師

評価室

第1期中期目標期間に係る業務の実績に関する評価結果の公表

第1期中期目標期間（平成16～21年度）に係る業務の実績に関する評価結果が国立大学法人評価委員会より公表されました。

今回の評価（確定評価）は、第1期中期目標期間における教育研究や業務運営・財務内容に関する事項等について、総合的に評価が実施されたものであり、特に、平成20、21年度の実績・活動により、暫定評価（平成16～19年度）の評価結果を変更する必要があるか否かに重点が置かれて実施されました。

【教育研究等の質の向上の状況】

「教育に関する目標」・「研究に関する目標」に関しては、暫定評価のときと同様に“おおむね良好である”との評価を受けましたが、「社会との連携、国際交流等に関する目標」については、国際交流の積極的な推進が高く評価されたことにより、暫定評

価時の“おおむね良好である”から“良好である”のより高い評価になりました。

【業務運営・財務内容等の状況】

暫定評価のときと同様に、「業務運営の改善及び効率化に関する目標」・「財務内容の改善に関する目標」・「自己点検・評価及び当該状況に係る情報の提供に関する目標」に関しては“良好である”、「その他業務運営に関する重要目標」に関しては“おおむね良好である”との評価を受けました。

なお、評価結果全文については、本学ホームページに掲載していますので、ご覧ください（HPアドレス http://www.osaka-u.ac.jp/ja/guide/information/joho/chukikekka_16-21）。

【評価結果抜粋】

1 全体評価

大阪大学は、創学以来の「研究第一主義」をモットーとし、第一線の研究成果と実証精神をもって教育を行うなど、教育・研究・社会貢献を通して国民と社会の信託に応えることにより、「地域に生き世界に伸びる」という理念の実現に向けての取組を積み重ね、業務運営、教育研究等のさらなる推進に取り組んでいる。

中期目標期間の業務実績の状況は、平成16～19年度までの評価では、すべての項目で中期目標の達成状況が「良好」又は「おおむね良好」であり、さらに平成20、21年度の状況を踏まえた結果、すべての項目で中期目標の達成状況が「良好」又は「おおむね良好」である。業務実績のうち、主な特記事項は以下のとおりである。

教育については、高度職業人講座及び社会連携講座等の実施や各種教育改革プログラムを実施し、それぞれコースワークの体系化やプロジェクト・ベースド・ラーニング（PBL）方式による実践的科目の導入を進めている。また、大阪外国語大学との統合に対応したキャンパスネットワーク等の整備のほか、「ラーニング・コモンズ」等の学習支援スペースの整備によって、利用者が増加し学生支援環境が幅広く進展している。

研究については、世界トップレベル研究拠点としての研究体制を充実し、トップジャーナルに多くの業績が発表されるなど研究拠点としての期待に応えている。この他、部局間連携研究・教育体制が強化され全学的見地からの活動が推進されている。

社会連携・国際交流等については、スーパー産学官連携機構を設置し、窓口及び知的財産取扱を一元化等することで、共同研究や受託研究の獲得へつなげる取組を行っている。また、第2期エラスムス・ムンドゥス（修士課程）への参加等、欧州大学・学術機関との交流基盤を構築している。

業務運営については、大阪外国語大学との統合を平成19年10月に実現し、大阪大学の3つの教育方針「教養」、「デザイン力」及び「国際性」の一翼として、25言語という多様な言語教育や多文化共生等のグローバルな教育研究の進展を可能にし、地球規模の諸課題に主体的に取り組むことのできる人材育成に取り組んでいる。

財務内容については、外部資金獲得に向けた取組の成果が現れているほか、「大阪大学未来基金（大学）」により平成21年度から募金活動を開始するなど、自己収入の増加に向けた取組に努めている。

自己点検・評価及び情報提供については、評価の基盤資料となる大阪大学基礎データ収集システム（教員基礎データと全学基礎データ）を整備し、システムの構築・更改を行うことで、大学全体の評価業務に必要なデータの管理・運営の一元化を図り、効率化に取り組んでいる。

その他業務運営については、施設設備の整備において緑地空間の管理・改善の方向を示したガイドライン「緑のフレームワークプラン」を実行し、周辺環境に配慮し、既存の景観を活かした植栽整備等により財団法人都市緑化基金から第19回「緑のデザイン賞」緑化大賞を授与されている。

一方、平成19年度の研究費不正使用防止に係る取組以降も、研究費の不正使用が行われていたことから、再発防止のための着実な取組が求められる。

2 項目別評価

教育研究等の質の向上の状況	
() 教育に関する目標	3
() 研究に関する目標	3
() その他の目標	4
(1) 社会との連携、国際交流等に関する目標	4
業務運営・財務内容等の状況	
(1) 業務運営の改善及び効率化に関する目標	4
(2) 財務内容の改善に関する目標	4
(3) 自己点検・評価及び当該状況に係る情報の提供に関する目標	4
(4) その他業務運営に関する重要目標	3

中期目標の
 5：達成状況が非常に優れている
 4：達成状況が良好である
 3：達成状況がおおむね良好である
 2：達成状況が不十分である
 1：達成のためには重大な改善事項がある

平成22年度業務実績報告書の提出

第2期中期目標期間の初年度である平成22年度の業務実績報告書については、各部局、各室等の実績を踏まえて、現在、作成作業を進めているところであり、とりまとめの上、6月末に文部科学省へ提出します。

各部局、各室等におかれましては、本報告書の作成

をはじめ、第1期中期目標期間を通じての評価作業にご尽力いただきましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

引き続き、第2期中期目標期間におきましても、着実な自己点検・評価の実施に向けて、ご協力よろしく申し上げます。

財務室

平成23年度教育研究等重点推進経費及び全学強化経費の執行計画について

財務室では、平成23年度教育研究等重点推進経費及び全学強化経費の学内公募を行い、申請のあった事業に対して、書類審査、ヒアリング審査等の結果を踏まえ、執行計画案を策定し、3月22日開催の役員会にて承認されました。

採択事業の詳細は以下のとおりです。
ただし、国の平成23年度予算に係る予算関連法案の成立が不透明なことから、承認された事項のうち、喫緊の事項以外についてはその予算配分を留保しています。

教育研究等重点推進経費（継続事業）

部局等名	事項名
附属図書館	閉館サービス延長による主体的な「学び」環境の整備
附属図書館	学生用図書の体系的・継続的な整備経費
環境イノベーションデザインセンター	大阪大学環境イノベーション教育研究推進事業
大学教育実践センター	高学年次教養教育を指向した新規科目の開設経費
教育・情報室	入試広報の充実による志願者確保策と教育環境の向上
核物理研究センター	E949 検出器輸送据付経費
環境安全研究管理センター 安全衛生管理部	大阪大学化学物質管理支援システム（OCCS、OGCS）に係る管理運営経費
研究・産学連携室	研究企画ワーキング・グループ事業費
研究・産学連携室	最先端ときめき研究推進事業
広報・社会学連携室	対話プログラム「ラボカフェ」（アートエリアB1）の実施
安全衛生管理部・工学研究科 理学研究科	核燃料物質の円滑管理のための核燃料物質取扱施設と放射線測定装置等の整備
安全衛生管理部	衛生管理者免許等取得支援経費
産学連携本部	知的財産の裁判に必要な弁護士費用等
研究推進部	競争的資金獲得等支援経費
大型教育研究プロジェクト支援室	教育研究高度化のための支援体制整備事業
本部事務機構 （研究推進部、国際交流オフィス等）	研究支援等に係る人件費
執行計画額	合計 461,953千円

教育研究等重点推進経費（新規事業）

部局等名	事項名
附属図書館	閉館サービス延長による主体的な「学び」環境の整備（更なる延長）
附属図書館	外国学図書館ラーニング・commons新営による学習環境の改善整備
文学研究科	研究科所蔵貴重資料の画像データ化と教育研究活用事業と公開
文学研究科	教育・研究講義室の環境整備 - 文学研究科唯一の200人規模講義室の整備 -
工学研究科	大阪大学サステナビリティ・カフェの実施
工学研究科	社会人高度人材育成事業の経費補助
総合学術博物館	博物館学実習の推進事業
金融・保険教育研究センター	金融・保険に関する文理融合型学際教育プログラムの推進・改善
人間科学研究科	人間科学研究科『本館耐震改修工事』に伴うバリアフリー対策工事等整備費
医学系研究科（医学科）	車いす用曲線型階段昇降機シンフォニー EA6
生命機能研究科	経時計測仕様、高性能汎用型レーザー顕微鏡システムの設置
微生物病研究所	マクロズーム in vivo 蛍光イメージングシステム
産業科学研究科	強力薄膜X線回折装置
社会経済研究所	モバイル経済実験システム
核物理研究センター	中性子電気双極子モーメント測定に向けた中性子偏極
核物理研究センター	ヒートポンプ式冷却水循環装置

部局等名	事項名
超高压電子顕微鏡センター	走査透過電子顕微鏡用電子エネルギー分光画像処理装置の整備
免疫学フロンティア研究センター	免疫情報統合のための科学技術計算用計算機システム一式
歯学部附属病院	幹細胞品質評価システム (FACSCaliburHG フローサイトメーター)
評価室	基礎データ収集システムの改修
執行計画額	合計 330,964 千円

全学強化経費（継続事業）

部局等名	事項名
附属図書館	電子的情報基盤資料経費
サイバーメディアセンター	総合情報通信システム (ODINS) 推進費
情報基盤本部	全学 IT 認証基盤システム維持経費
情報基盤本部	事務基幹系システム維持経費
教育・情報室	大阪大学ファカルティ・ディベロップメント推進事業
教育・情報室	学務情報システムの整備
教育・情報室	全学規模 e-Learning 環境基盤整備事業 III
国際交流室	3 キャンパスにおける外国人留学生・外国人研究者対象支援サービスシステムの改善
リスク管理推進本部	リスク管理推進本部運営費
施設マネジメント委員会	キャンパスマスタープランに基づくリーディングプロジェクト
安全保障輸出管理委員会	安全保障輸出管理体制整備・運営経費
海外拠点本部	海外拠点本部運営経費
多様な人材活用推進本部	男女共同参画推進オフィス運営経費
研究倫理審査委員会	研究倫理審査委員会実施経費
総務企画部・ハラスメント対策事務局	ハラスメント防止関係
広報・社学連携オフィス ウェブデザインユニット	「ウェブデザインユニット」による広報の強化充実
執行計画額	合計 1,063,525 千円

全学強化経費（新規事業）

部局等名	事項名
総合計画室	テニュアトラック制度の支援について
研究・産学連携室	研究力強化のための研究戦略推進経費
国際交流室	学生交流助成（受入・派遣）経費
国際交流室	新規文系短期受入プログラムの実施
施設マネジメント委員会	耐震診断
執行計画額	合計 83,549 千円

資金運用について

平成 22 年度は、国債・地方債による長期運用と効率的な余剰資金の活用を図るための短期運用により、運用総額 1,724.9 億円、平均運用額 211.06 億円、平均利率 0.354% で資金運用を行い、その結果、長期・短期合わせて約 7,466 万円の運用益を獲得しました。

また、今年度の資金運用については、前年度に引

き続き、資金需要を考慮した適切な運用金額、運用期間及び運用形態を検討し、長期・短期の資金運用の組み合わせによる効率的な資金の運用を行うこととしており、まず、短期資金運用計画を策定し、運用を始めました。

ペーパーレス会議の実施について

本部棟のペーパーレス会議システム的环境が整ったことから、4月開催の会議よりペーパーレス会議を実施しています。第1回目は、室員、陪席者とも戸惑いながらのシステム利用になりましたが、回を重ねるごとに慣れてきております。

担当事務においては、紙の使用量の減による経費

削減や、紙資料の印刷、配布などの事務処理の省力化を実感しているようです。また、ペーパーレス会議システムの利用が進めば、会議資料が机の周りに山積みになっている「よくある光景」も少なくなり、執務環境の改善にも繋がると期待しています。



財務基盤整備本部（基金室）大阪大学未来基金

大阪大学未来基金は本年5月に創設から2年を迎えました。この間、多くの教職員、卒業生、保護者の皆様からご寄付を頂いたほか、大阪大学後援会からの寄付受入などにより、未来基金の受入総額は15.5億円となりました。

未来基金を活用した事業の展開も本格化し、平成23年度から成績優秀な学部新入生を対象とした「大阪大学未来基金奨学金」の給付（40名の奨学生に一人あたり25万円を支援）を開始したほか、「学生撰書」や「マイボトル」の事業をサポートしています。また、大阪大学後援会の事業も受け継ぎ、海外研修や課外研究に対する援助なども実施していきます。

基金室は、未来基金をさらに大きく成長させ、大阪大学の教育研究環境の充実に貢献できるよう引き続き取り組んでいきます。

関連記事は47ページをご覧ください。



「マイボトル」事業：新入生へのボトル配付の様様

人事労務室

新たな職員採用試験（大阪大学職員採用試験）の実施について

法人化後、職員には、従来からの組織の一構成員としての役割に加え、大学運営に関する事務のマネジメントや情報発信・広報などの一翼を担うことが新たに求められています。

また、社会のグローバル化の進展を受け、本学においても、国内外から広く優秀な学生、教員・研究者を集め、教育・研究機能を国際的なレベルに高めるべく、これらの動きに柔軟に対応できる国際感覚を備えた事務職員も求められています。

これらのことから、より広い人材ベースの中から、多様な個性や能力を有する人材の雇用を更に押し進めるため、国立大学法人等統一採用試験等とは異なる選考方法による新たな職員採用試験を実施することとしました。

今年度は、書類選考（第1次選考）の上、6月11日（土）に面接試験等（第2次選考）を実施し、合格者を平成24年4月1日付けで採用する予定にしています。

障害者職業生活相談員の交代について

既にお知らせしている（2009年6月号参照）とおり、本学では、「障害者の雇用の促進等に関する法律」に基づき、障害者職業生活相談員を選任し、障害者の職業生活全般にわたる相談・指導を行っています。

このたび、所要の資格認定講習等の受講を終え、総務企画部多様な人材活用推進支援室 村尾（むらお）

室長補佐が新たな障害者職業生活相談員に選任されました。

大学としましては、相談員の業務を通すことによっても、障害者が安心して働ける環境づくりに寄与していく所存ですので、引き続きよろしくお願ひします。

新障害者職業生活相談員から一言

こんにちは！多様な人材活用推進支援室の村尾です。

まだまだ勉強の毎日ですが、障害のある方々が、働きやすい職場環境になるように少しでもお役に立てればと思っています。悩みがあれば、一人で抱え込まないで、一緒に解決していきましょう。

吹田キャンパス本部福利棟2階の男女共同参画推進オフィス内にいます。

お気軽にお越しください。[内線 9628]



多様な人材活用推進支援室案内図



広報・社学連携室

OWL (Osaka University Web Library) について

現在、ウェブデザインユニットにおいて、大阪大学ポータルに掲載の「セミナー/シンポジウム情報登録」、「学内専用ページ」のリニューアルと、Osaka university Web Library (OWL: オウル) の開設の準備を進めています。

OWLとは、大阪大学の構成員が利用可能な大阪大学の写真、ロゴ、学章、大学ロゴ入りテンプレートなどを集めたサイトです。これまで、学内を各自が写真撮影したり、個別にロゴの使用方法を探したりと不便が多かったこともあり、利用者が利用しやすい環境を求める声が寄せられていました。このたび、写真については、ウェブデザインユニットが厳選し「阪大百景」としてまとめ、大阪大学デザインマニュアルに則った大阪大学ロゴ、大阪大学のロゴが入



ったパワーポイントのテンプレートなどをご提供していく予定です。

これにより、手軽に大阪大学に関するコンテンツを活用していただけるようになり、また、大阪大学の教職員・学生が共通の素材を使用することで、大阪大学としての一体感、統一感がより育まれることが期待されます。

これらのサービスは7月中に一般公開・運用開始を予定していますので、詳細については別途お知らせいたします。

広報担当者勉強会について

広報業務は、大学のブランド力強化に向けて重要な位置づけを担っており、昨年からの広報ネットワークを活性化させ、学内の広報体制の強化を目指しているところです。この度、広報の企画立案および実務に携わる者が、より具体的かつ明確に意識の共有を図ることを目的として、6月7日(火)に広報勉強会を開催しました。

勉強会には、広報・社学連携室のうち、高杉室長をはじめ、広報担当室員および担当の事務員が参加しました。当日は、業界新聞の科学技術担当記者を講師としてお招きし、大阪大学の広報活動における問題点や、法人化後の大学広報の流れ等について、記者の視点からお話をいただき、その後、活発な意見交換をおこないました。

ここ数年、大学および研究機関からの情報提供は増加傾向にあり、そのような傾向のなかでは、事前のアナウンスをなるべく早くすること、リリース文の内容をしっかりとしたものにする、また、発表担当者との連絡を取りやすくすることなどが重要で



あることを共有しました。さまざまな取材経験を有する記者のお話は、大学内にいるだけでは決して知ることのできない内容もあり、参加者にとっていくつもの大きな発見がありました。このような勉強会を通じて、本学の広報活動がより積極的かつ機動的に進められるような施策を考えてまいりますので、今後とも広報業務へのご協力をお願いいたします。

国際交流室

海外における大学設立への国際協力

ここ数年の間に、エジプト、インド、マレーシアにおいて、日本の協力のもとで新しい大学の設置が進められており、大阪大学の諸先生方も協力しています。本年2月には「国際協力に関する学内検討委員会」を新たに設置し、大学としてバックアップすることとなりました。

マレーシアではマレーシア - 日本国際工学院 (Malaysia-Japan International Institute of Technology) の設置が進められています。マレーシアにおける新たな大学の建設のプロジェクトは、すでに約10年前から始まっていましたが、諸事情により中断されるなど進捗がはかばかしくありませんでしたが、昨年6月に両国首脳の会議において、円借款により資金提供を進めることとなり、現在、2011年9月の開校に向けてほぼ順調に設置準備が進められています。分野は、電子・コンピュータ工学、精密工学、グリーンテクノロジー、およびMOT (Management of Technology) の4つです。前駐マレーシア特命全権大使堀江正彦氏 (大阪大学卒業生) が奔走されたこともあり、九州大学、大阪大学、東海大学、芝浦工業大学、明治大学など23大学がコンソーシアム (国内支援委員会) を形成し、協力体制が整えられるまでになっています。本学は工学研究科電気電子情報工学専攻の小牧教授、機械工学専攻の竹内教授が参画されることとなり、とくに電子・コンピュータ工学については本学が副幹事校 (幹事校は東海大学) として協力することとなりました。

エジプト 日本科学技術大学 (Egypt-Japan University of Science and Technology: E-JUST) は、3年前から本格的に準備が進められており、九州大学、早稲田大学、京都大学、東京工業大学、立命館大学、大阪大学などが国内協力大学となり、支援体制を取っています。本学からは工学研究科電気電子情報工

学専攻の河崎教授が、電気電子情報学類長のアドバイザー (長期派遣専門家) として、現地アレキサンドリアに赴き、カリキュラム編成などに積極的な協力を行っています。平成22年2月に初めての学生を受け入れ、同年6月に開校式が挙行されています。

インド工科大学ハイデラバード校 (Indian Institute of Technology, Hyderabad: IITH) は、2007年に当時の安倍総理大臣とマンモハン・シン・インド首相との間で作業部会の設置が合意され、2008年10月のシン首相訪日の際に日印両国が協力していくことが首脳間で合意されました。2009年8月に国内支援コンソーシアムが立ち上げられ委員会が形成されており、東京大学、慶應大学、早稲田大学、大阪大学がIITH-Japan Collaboration Advisory Committeeを形成して協力しています。本学からはやはり工学研究科電気電子情報工学専攻の伊瀬教授がEnvironment and Energy分野でグループリーダーを務め、カリキュラム編成などの協力を行っています。

上記3つの大学とも、日本型の工学教育を行うという点で共通点があります。とくにMJITの場合は、「Kohza System」という名称を用い、講座制をほとんどそのまま取り入れるという方向を取っています。またいずれの大学も、世界的水準の研究・教育を行うという高い目標を掲げており、実際、その目標が達成できるよう日本側も本格的に協力することで、将来、互恵関係に発展することが強く望まれています。研究がグローバルなスケールの共同研究で行われるようになりつつある現在、本学もこのような機会を積極的に活用すべきであると考えています。今後、短期的な講師派遣 (集中講義) などで構成員の皆様にご協力をお願いすることがあると思いますので、その際はよろしくお願ひします。

G30 副学長会議と留学フェア

5月14日から17日にかけての3日間、G30 推進事務局（東京大学）のお世話により、インドネシア（ジャカルタ、ジョグジャカルタ、バンドン）で留学フェアが開催されました。G30 採択13大学のほか、静岡大学、豊橋技術科学大学、千葉大学、金沢大学、広島大学も参加しました。16日には、通常は東京で開催されているG30 副学長クラス会議が、ジャカルタで開催されました。この会議には、インドネシア側からも25大学の副学長クラスの方々に参加し、インドネシアの文部大臣が挨拶に訪れるなど、同国政府も良い機会ととらえたようで、短時間でしたが活発な意見交換がなされました。とくに日本からインドネシアへの留学生は百数十名にとどまっておらず、日本への留学生数が2,000名以上であるのに対して大変少ないので、どうすれば良いか頭を悩ませているようでした。今回のイベントには留学生フェアの

開催も含めて、日本大使館の方々の多大な協力がありました。とくに留学フェアに関しては、G30 学部英語コースへの学生勧誘のこともあり、地元の高校へも大使館から声をかけた結果、かなりの数の高校生も参加したようです。インドネシアは日本に対して好意的な国ということですが、今回は我が国を代表する大学が揃ってフェアを行ったということで、会場は活気に満ちあふれていました。

G30 がスタートして以来、留学フェアが種々行われるようになりました。余りばらばらにリクルート活動を行うのは、相手に迷惑をかけるなど好ましくない点もありますので、今回のような合同のフェアが有効であると思います。本学においても、G30 のチームの力も借りて、大学としてのリクルート戦略を立てることを目指しています。

大学の世界展開力強化事業

震災の影響で実施が心配されていましたが、標記の事業の公募が行われることとなりました。説明会が5月31日に大阪大学中之島センターにおいて開催され、200名を超える方々が各地から参加し、関心の高さが示されました。大きく分けて日中韓の学生交流を行うことを中心とするもの（タイプA：キャンパス・アジア中核拠点形成支援）、米国の大学等との学生交流を行うことを中心とするもの（タイプB：米国の大学等との協働教育の創成支援）の2種類で、本学も是非応募したいと考えています。A、Bいず

れのタイプについても、予め交流を行う大学との協働体制をとることなどが要請されていますので、適切な準備が必要です。現在各部局に申請に関する照会をしていますが、申請希望の多い場合は、国際交流室において取りまとめるなど、調整を行う予定です。部局においてアイデアはあるが単独では具体化し難いなどの問題を持たれているところは、国際交流オフィスまでできるだけ早くお申し出下さるようお願いいたします。国際交流室などで検討をさせていただきます。

日独 6 大学学長会議について

昨年7月下旬にハイデルベルグ大学において日独6大学学長会議（日本側：大阪大学、京都大学、東北大学、ドイツ側：ハイデルベルグ大学、ゲッチンゲン大学、カールスルーエ工科大学）が開催されましたが、第2回目の学長会議が平成24年3月に京都大学において開催される予定となっています。大きな狙いの一つは、この6大学が幾つかの分野で共同研究を行い、できれば日独両国の研究資金を獲得し、

さらに研究を推進することです。本学からは現在少なくとも3つの分野への参加が決定あるいは検討中となっています。また、将来的にはこのネットワークを学生交流の推進にも活用できるものと期待しているところです。これらの大学のいずれかとの研究交流を進めている先生方がおられましたら、是非、国際交流オフィスまでご連絡下さい。



創立 80 周年記念事業



原点へ 未来へ

大阪大学は 2011 年に創立 80 周年を迎えます



大阪大学会館の内部紹介

大阪大学会館の各施設

大阪大学会館は、「阪大人の共通の思いを寄せる施設」、さらには、「大阪における学術の伝統を受け継ぐシンボル」として、社会学連携、産学連携、国際連携に関するさまざまな活動が行われるように、整備されました。

大阪大学会館の施設は、レンタルスペースとその他の施設に分かれます。

レンタルスペースとして、アセンブリー・ホール、講堂、会議室、セミナー室 1・2、国際ラウンジ、来賓室があります。

1 階のアセンブリー・ホールは、フレキシブルな空間として、様々な会議やブース形式のセミナーをはじめ、200 人程度の立食形式のレセプションなどに利用できます。

2 階の講堂（3 階はバルコニー席）は、シンポジウムや講演会、演奏会、大規模な会議などに利用できます。

2 階の会議室、セミナー室 1・2、国際ラウンジは、種々の会議や打合せ、セミナー等に利用でき、会議室、セミナー室 2 はテレビ会議にも対応しています。また、国際ラウンジには、大阪大学と海外の協定校などを紹介しており、国際会議を開催する場合、ビジネスセンター的に利用することもできます。

5 階の来賓室は、会議等に参加される VIP 等のゲストルームとして利用できます。

これらのレンタルスペースは、大阪大学の HP から使用申請ができます。

<http://www.osaka-u.ac.jp/ja/academics/facilities/OUHall>

その他の施設として、21 世紀懐徳堂、イノベーション展示室、IPrism ルーム、総合学術博物館、適塾記念センターがあります。

1 階には、21 世紀懐徳堂があり、大阪大学の社会学連携活動を集約し、講座やシンポジウム等様々な事業を通じ、社会への情報発信に取り組んでいます。大学と社会、大学の教職員、学生と広く一般市民の方々とが集い、活動を行うことができるギャラリー



大阪大学会館

やスタジオを備えています。

2 階には、イノベーション展示室、IPrism ルームがあります。イノベーション展示室は、イノベーションに関連する展示を行っており、来学の際に気軽に待合室としても利用できるスペースです。IPrism ルームは、知的財産センターにおける教育研究や研修等に活用するスペースです。

3 階、4 階には、総合学術博物館があり、学術標本資料のデータベース化を進めるためのデジタル資料室、図書資料室などとともに、学芸員養成のための博物館実習が行える機能も備えた展示・実習室などを整備し、また、大阪大学の歴史に関する資料を展示する歴史展示室（3 階）もあります。

4 階には、適塾記念センターがあり、大阪大学が所有する国の史跡・重要文化財「適塾」や大阪に関する研究・資料収集を行う大阪学研究部門、日蘭交流史を含むオランダの学術・文化に関する研究等を行うオランダ学研究部門、適塾とその関連史資料、及び「適塾記念会」の維持・管理業務を行う適塾運営部門を設置しています。適塾に関する文献資料等を備えた資料室も設置し、適塾研究と関連諸分野の研究・普及に関する活動を行っています。

大阪大学会館フロア図

5F 来賓室



5F 来賓室

4F 総合学術博物館/適塾記念センター



2F, 3F 講堂



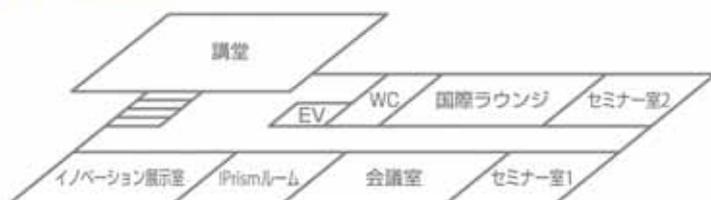
国際ラウンジ

3F 講堂/総合学術博物館



会議室

2F 講堂/会議室など

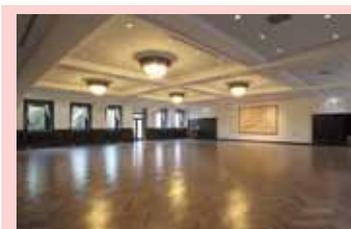


セミナー室 2



2F セミナー室 1

1F アセンブリー・ホール/21世紀懐徳堂



1F アセンブリー・ホール

大阪大学会館の改修の紹介

大阪大学創立80周年記念事業の一環として、本学のシンボル及びエコ改修モデルの施設として、大阪大学会館の改修を実施しました。改修にあたっては、登録有形文化財としての外観に配慮しつつ、建物の断熱化、LED照明をはじめとする省エネ機器への更新、太陽光発電パネルの設置など、省エネルギー化・低炭素化に取り組みました。数値シミュレーションによる予測結果では省エネルギーの対策で3割のエネルギー需要が削減されるとともに、太陽光発電で

およそ5割のエネルギーが自給され、空調を使用しない中間期の日中においては、全ての電力を補えるノーカーボンの施設となり、無対策ケースと比べて約7割のCO2排出削減となっています。

また、大阪大学会館の改修と合わせ、豊中キャンパスのシンボル空間の形成を図るため、学生交流棟北側に各種イベントを開催することのできる広場や中山池に面する木製のデッキを整備しました。

建物概要

構造：鉄筋コンクリート造
規模：地上5階
延べ面積：4,257㎡
建築年：昭和3年
登録有形文化財（建築物）

エコ改修事項

太陽光発電設備
シーリングファン
置換換気
建物断熱強化
複層（ペア）ガラス
気密サッシ
全熱交換器
高効率照明
照明器具制御
CO₂濃度による換気制御
高効率マルチエアコン
エネルギーの可視化

大学会館屋上及び実践センター屋上に分散設置
天井が高く、室内温度分布均一効果の見込める部屋について採用
講堂で採用
建物全般で採用（廊下等共用部等を除く居室部分で採用）
建物全般で採用
新規にサッシを設置する場合に採用
建物全般で採用
建物全般で採用（LED、高効率&長寿命蛍光灯器具）
昼光センサー及び人感センサーによる照明制御
在室人数に応じた外気取入れ量制御（講堂で採用）
建物全般で採用
太陽光発電及び各管理区分のエネルギー消費管理を表示

居住域に清浄な空気を供給し、室内に温度成層を作る換気効率の高い換気方式



外観



広場



木製デッキ

「産業界との連携のあゆみ」パネル展示

創立80周年記念事業委員会産学官連携イベント実行委員会は、「産業界との連携のあゆみ」と題して、本学の研究成果をもとにした産学官連携の成果展示を企画し、5月2日(月)開催の大阪大学会館完成式にあわせ、同会館1階アセンブリホール、2階イノベーション展示室において80件の制作パネルの展示を行いました。

本学は、産学官連携が盛んに行われていると評価されており、実際に我々の社会生活を豊かにすることに貢献した技術・手法・製品・サービス・社会制度等を、産業界を始め一般市民の方々に向けて、本学の研究活動が社会に活かされていることを分かり易く解説し理解していただけるよう、各部局研究者



の協力を得ながら創立時から現在に至るまでの時代を背景にしたパネルを制作いたしました。

当日は、大阪大学会館完成式の招待者である企業や本学関係者に公開され、多くの方々にご覧いただきました。岸本元総長、宮原前総長にあっては、在職当時、ご自身の研究成果が企業との連携に活かされ、連携企業において製品化された医薬品、製品がパネルに載せられているものをご覧いただきました。

今後、制作したパネル80件は、豊中キャンパス関係部局分は同会館の2階イノベーション展示室で、それ以外は吹田キャンパステクノアライアンス棟1,2階で順次公開しております。



(創立80周年記念事業委員会
産学官連携イベント実行委員会)

ロボカップジャパンオープン開催報告

ロボカップジャパンオープンは、世界大会に向けた国内予選的位置づけで、世界大会が国内で開催されない年を除いて毎年開催されています。本年は大阪大学創立80周年記念事業として、大阪大学が開催委員会の一組織として参画し、主催団体の役割を果たしました。

5月3日から5日までの三日間、インテックス大阪2号館で開催され、海外チーム3チーム(台湾2チーム、タイ1チーム)を含む内外234チーム846名(シニア75チーム462名、ジュニア:159チーム384名)が競技に参加しました。一般入場者数は、初日7,620人、二日目9,885人、最終日7,905人の合計25,410人となりました。開会式では、西尾章治郎



理事・副学長、浅田工学研究科教授(前ロボカップ国際委員会プレジデント)の挨拶に続き、東北大学の田所論教授による震災復興に向けた特別講演があり、多くの聴衆の関心を集めました。また、展示ブースには、大阪大学創立80周年記念ブースが設置され、多くの来場者が訪れました。

競技では、ロボカップサッカーのヒューマノイドリーグに本学のチームが参加し、身長60cm以下のキッズリーグでは7チーム中の3位、80cm以上のティーンサイズでは、大阪工業大学と本学の合同チームの1チームのみの参加で、スローインなどのテクニカルチャレンジをこなしていました。



(創立80周年記念事業委員会
産学官連携イベント実行委員会)

教職協働への挑戦

工学研究科における取り組み

工学研究科環境・エネルギー工学専攻准教授 黒 崎 健

大学における教職協働活動

大学は主に、教員、事務系職員、学生により構成されています。この三者のうち、教員と学生の間には、講義や研究活動などを通じて密接なつながりがあります。ところが、教員と事務系職員に関しては、つながりがあるはずの大学の運営においても、それぞれの立場で、個別に組織運営に携わる場面が多く、教員と事務系職員が協力して何かに取り組むという「教職協働」活動は、これまでほとんど、なされてきていませんでした。

工学研究科における教職協働活動： プロジェクト“C”とは？

このような背景のもと、2004年度から2009年度までの6年間、工学研究科において、Project“C”(以下、プロジェクトC)^(注)と呼ばれる教職協働活動が、工学研究科フロンティア研究センターにおける「人間力アッププロジェクト」の一環として実施されました。プロジェクトCでは、若手教員と事務部の職員が自主的に協力し、相互理解のもと、継続的に、教職員の意識改革と組織運営改革を推進してきました。具体的には、毎年20名から30名の教職員(内、六割強が事務系職員、一部、学生も含む)が集まり、主に年数度の会議とメールによる意見交換をもとに、工学研究科の組織運営の高度化・効率化のためのさまざまな課題に取り組んできました。六年間の活動で、延べ75名(教員：23名、事務系職員：46名、学生：6名)が、プロジェクトCメンバーとしてプロジェクトに携わりました。

教職協働活動により得られた成果

- プロジェクトCとして行われた教職協働活動では、数多くの成果が生み出されましたが、とりわけ、
- ・工学研究科における事務作業の効率化を実現する業務マニュアルの作成
 - ・工学研究科省エネプロジェクトの発案
 - ・工学研究科職員証の作成
 - ・工学研究科キャンパスのプチ緑化推進及び駐輪場整備
 - ・工学部学生のための学生目線マニュアル(工学ぶっく)の発行
 - ・工学研究科事務部の職員総覧の作成

などが代表的なものとしてあげられます。このような活動成果は、必要に応じて工学研究科役員会に提言し、承認が得られたものについては、工学研究科の正式な業務として具体化され、運用されています。業務マニュアルや職員総覧はWeb上にアップされ、教職員が日々利用しています。プロジェクトCでなされた教職協働活動は、6年間続いてきたという継続性に加え、ありがちなバーチャル組織ではなく、実体のともなう活動と成果があるという点において、全国の大学の中でも前例の無い稀有なものであるといえます。

教職協働活動がもたらしたもの

プロジェクトCにおける教職協働活動を通じて、教員と事務系職員の間にあった垣根が取り払われ、それぞれが持つ仕事に対する考え方などについて、相互理解が深まりました。加えて、他の部局にはない工学研究科独自の改革の気風が生まれ、教職員個々の人間力がアップしました。プロジェクトCの立ち上げメンバーであった、現薬学研究科事務部の杉山真一事務長をはじめとして、プロジェクトCの活動で培った人間力を発揮し、工学研究科以外の部局で活躍している教職員も数多くいます。プロジェクトCのような教職協働活動が、工学研究科だけではなく、大学全体に広がっていくことを期待しています。

書籍の紹介

最後に、プロジェクトCの活動をまとめた書籍の紹介をしたいと思います。2011年3月、『大学を変えた人間力PROJECT“C”教職協働への挑戦』(四六判、フルカラー、132頁、1,575円)が、大阪大学出版会より出版されました。この書籍では、プロジェクトCの活動と成果を読み物風にまとめています。工学研究科の教職員が、さまざまな問題に直面しつつ課題を解決していく様子を伺うことが出来る貴重な一冊となっています。また、この書籍は、大阪大学工学部/工学研究科の事務部によって作られたものです。大学の一部局の事務部がこのような書籍を出版することは過去に例がなく、その意味でも貴重な一冊となっています。大阪大学生協書籍部やAmazon.co.jp等の書店、大阪大学出版会にてご購入いただけます。ぜひ一読いただければと思います。

謝辞

豊田政男先生、馬場章夫先生、池田雅夫先生、山中伸介先生及び歴代事務部長をはじめとする工学研究科執行部の方々のご理解があったからこそ、プロジェクトCによる教職協働活動を続けていくことができました。この場をお借りして感謝申し上げます。

歴代プロジェクトリーダーからのメッセージ

2004年度、2005年度リーダー

工学研究科 応用化学専攻 田村 真治

プロジェクトCは、2004年当時の工学研究科事務部の経理係長、庶務係長、2006年度、2007年度のリーダーである小久保先生と小職が、とある会の休憩時間中にしていた雑談から生まれました。恐れを知らない4人の『工学研究科を変えることができれば楽しいね』という発想から開始した活動であるにも関わらず、延べ75名もの方々に参

加して頂けたことを嬉しく思っています。今後、同様の活動が阪大全体、ひいては全国の大学に広まり、今よりもっと魅力のある大学になることを願っています。

2006年度、2007年度リーダー

工学研究科 応用化学専攻 小久保 研

大学を変えていくのは人と人のつながりから。このプロジェクトを通じ、その大きさ大切さを実感しました。「うちの大学・研究科・部署を良くしたい」という愛校心、慣習や身分に囚われない柔軟な発想、そして個々の力が発揮される「仕組み」がうまく噛み合い、小さな種を原動力に、大きな実をもたらしたと思っています。この種で日本中にさらに多くの花が咲くことを楽しみにしています。

(注) 教職協働活動の理念にかなう単語を考えたとき、Collaboration, Commitment, Contact, Control, Convention, Challenge, Communication, Concert など、Cではじまる単語が多いことから、プロジェクトCと名づけられた。



工学研究科における教職協働活動をまとめた書籍『大学を変えた人間力 PROJECT “C” 教職協働への挑戦』



プロジェクトC主要メンバー 左から、小久保 研（応用化学専攻・講師）比嘉 勝（医学系研究科・契約係・係長）黒崎 健（環境・エネルギー工学専攻・准教授）兼田 貴史（工学研究科・経理係・主任）栗原 佐智子（大阪大学出版会）田村 真治（応用化学専攻・助教）

くるさき・けん

工学研究科 環境・エネルギー工学専攻 准教授

プロジェクトCには、2005年度から参画。2008年度、2009年度の二年間は、リーダーとしてプロジェクトCを運営。専門は、原子力工学、エネルギー材料工学

プロフィール

日本語日本文化教育センター教育講演会開催

日本語日本文化教育センターでは、3月17日(木)に本センター多目的ホールにおいて、FD研修の一環として「ヨーロッパ言語共通参照枠(CEFR)と日本語教育」と題する教育講演会を開催しました。

「ヨーロッパ言語共通参照枠」とはCommon European Framework of Reference for Languages(CEFR)の訳語で、「ヨーロッパで共通の外国語学習の到達度を記述するのに使用するガイドライン」のことです。近年EU諸国でのCEFR普及は目覚ましいものがあり、わが国の日本語教育の現場でも、その存在は無視できないものとなっています。同講演会では、本センター学務委員長、加藤均教授の開会挨拶の後、CEFRの日本語適用に造詣の深い真嶋潤子教授(世界言語研究センター)から、その理念・理論並びに使用実態について、ヨーロッパでの最新の状況を踏まえた講演をしていただきました。



真嶋教授による講演

会場に50名を超える日本語教育関係者が集まり、活発な質疑応答が行われ、講演会は盛況のもとに終了しました。

(日本語日本文化教育センター)

平成24年度採用分日本学術振興会特別研究員募集に関する説明会を開催

日本学術振興会特別研究員制度について周知し、本学における応募件数の拡大と採用率の向上を図るため、平成24年度採用分日本学術振興会特別研究員募集に関する説明会を、応募予定者と将来的に応募予定の大学院生、学部生を主な対象者として、去る3月17日(木)に吹田キャン



パスにおいて開催し、約350名の参加がありました。

説明会は、日本学術振興会学術システム研究センター研究員 米田悦啓医学系研究科教授による特別研究員制度の概要と審査方法についての講演、特別研究員の採用経験者である森雅樹医学系研究科助教及び波江彰彦文学研究科助教による具体的な内容をまじえた申請に係るアドバイス等についての講演がありました。また、池田雅夫大型教育研究プロジェクト支援室統括マネージャーから研究指導者が作成する評価書の記入等について、研究推進部研究推進課からは応募手続きの流れや、電子申請方法について説明がありました。

昨年からスタートして2回目の説明会でしたが、参加者からは「審査の方法や特別研究員制度を詳しく知ることができ意欲が湧いた」、「採用経験者の経験談、具体的なアドバイスが大変参考になった」、「研究業績やDC申請における自己評価の重要性についてよく理解できた」と好評であり、今後も継続して説明会を開催する予定です。

(研究推進部研究推進課)

文学研究科 大学院生・若手研究者向け科研等申請書作成セミナー開催

文学研究科研究推進室では、科研費や学振特別研究員への応募のためのセミナーを毎年複数回開催しています。今回は大学院生や若手研究者を対象としたセミナーを開催しました。

3月17日(木)、文学部大会議室にて「平成23年度科研研究活動スタート支援・平成24年度学振特別研究員申請書作成セミナー」と題して開催したセミナーには、大学院生、若手研究者合わせて50余名の参加者があり、研究費獲得への意欲、関心の高さをうかがわせました。当日のプログラムとしてはまず、日本学術振興会学術システム研究センター専門研究員を務めている浜渦辰二文学研究科教授より「科研費および学振特別研究員制度の概要と今年度の変更点」の説明があり、次いで湯浅邦弘文学研究科教授から科研費審査の経験に基づく「書面審査の観点」、堤一昭



湯浅教授とその話に関心する参加者たち



学振特別研究員模擬面接

文学研究科准教授から文学研究科内での応募書類チェックの経験に基づく申請書作成上の留意点について説明がなされました。

プログラムの最後には、先輩の体験談として、DC1、DC2、PD、研究活動スタート支援に採択された方々に、実際の申請書類を配付して工夫した点などを話していただくとともに、今回は新たに学振特別研究員の模擬面接を実施しました。面接時に応募者が行うポスターを用いたプレゼンテーションおよび面接担当者との質疑応答の様子を参加者に見てもらったことは大いに刺激になり参考になったものと思います。

文学研究科研究推進室では次回以後もさらに工夫を重ね、いっそう充実したセミナーにしたいと考えています。

(文学研究科・文学部)

平成22年度国際教育交流センター 「監督的立場の教員対象ハラスメント研修会及び教職員対象セクハラ研修会の実施」

国際教育交流センターでは、毎年教職員を対象にセクシュアル・ハラスメント研修会を実施しています。平成22年4月からの本学各種ハラスメントの相談体制、対策会議、調査委員会などの学内組織再編と諸規程改訂にともない、今年度は平成23年3月18日(金)に、ハラスメント相談室長の大和谷厚医学系研究科教授から、監督的立場にある教授会構成員の教員を対象に「ハラスメントのない大学を目指して～大阪大学の新たなハラスメント予防・相談体制」と題して講演いただき、ハラスメント対策研修会を実施しました。多数の出席のもと活発な質疑応答があり、各種ハラスメントの防止のための意識喚起を行いました。

同日午後には国際教育交流センター教職員を対象としたセクシュアル・ハラスメント研修会を実施し、13名の参加のもと、セクシュアル・ハラスメント相談室専門相談員の中野冬美先生をお招きして「セクシュアル・ハラスメントを防止するために～大阪大学の現状と対策」と題し、講



演を頂きました。ご講演後には活発な質問や意見交換が行われ、セクハラ防止のための意識の強化を行いました。

(国際教育交流センター)

日本語日本文化教育センター国際フォーラムを開催

日本語日本文化教育センターでは、毎年、大学院言語文化研究科言語社会専攻海外連携コースとの共催で、諸外国の日本語・日本文化研究の関係教員や日本研究者を招いて日本語・日本文化研究に関する国際シンポジウムを開催してきましたが、今年度は、かつて国費日本語・日本文化研修留学生として本センターで学び、現在、国内外で第一線の日本研究者として活躍中のセンター修了生OBの方々3名を招き、国際フォーラムを開催しました。



フォーラムは、3月19日(土)、本センター多目的ホールにおいて、「日本研究の最前線 日本語・日本文化研究を志す人のために - 」と題して開催され、100名を超える参加を得ました。

奥西峻介センター長の開会挨拶の後、最初にチューリヒ大学日文学科専任講師のタン・ダニエラ氏から「現代日本文学における男性像」、次にケンブリッジ大学・ニーダム研究所研究員のゴダール・ジェラルド・クリントン氏から「日本思想史における進化論」、そして最後に本学外国語学部特任講師のベルテッリ・ジュリオ・アントニオ氏から「田島弥平の『養蚕新論』と明治初期に来日したイタリア人蚕種商人について」と題した発表があり、各人の最新の研究の一端をうかがうことができました。その後、「日本語・日本文化研究を志す人のために」というテーマで座談会が開かれ、現在、日本語・日本文化研修留学生や交換留学生として本センターで勉強中の学生からも具体的な質問や相談等が寄せられました。箕面福利会館で開催された懇親会でも、招聘者とセンター在学中の留学生との親睦が図られ、フォーラムは成功裏に終了しました。

(日本語日本文化教育センター)

附属図書館で研修会「図書館員のための漢籍の第一歩」を開催

大阪大学附属図書館では、3月24日(木)に近畿地区国公立大学図書館職員を主な対象として、研修会「図書館員のための漢籍の第一歩」を開催しました。

この研修会は、漢籍を取り扱える職員が徐々に減少している現状を危惧して、定期的実施している「図書関係業務研修会」の一環として企画されました。

研修会には、学内の職員29名のほか、近畿地区の大学図書館の職員ら計58名が参加しました。

堤一昭文学研究科准教授による簡潔かつ具体的な「漢籍をめぐる基礎知識」講演に始まり、附属図書館で所蔵している「懐徳堂文庫」・「石濱文庫」資料に関連する講演が学内の担当職員によって行われました。

参加者からは、図書館員として今後の業務の足がかりとなる漢籍の基礎知識を習得することができたとの声が聞かれました。



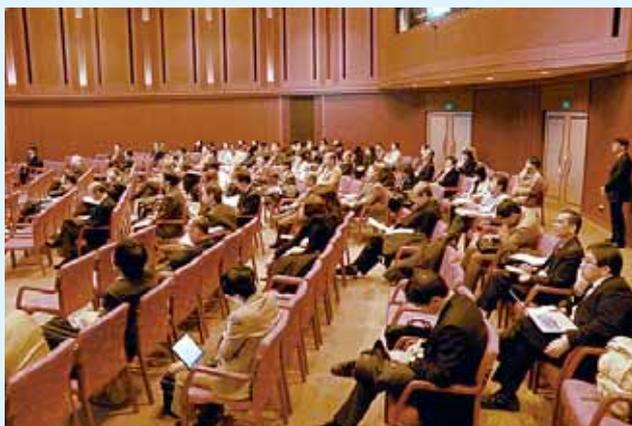
資料を手にして受講者に説明する堤准教授

(附属図書館)

第13回 フィジカルヘルス・フォーラム報告

3月17日(木)、18日(金)の両日、大阪大学銀杏会館において第13回フィジカルヘルス・フォーラムが開催されました。本フォーラムは全国国立大学保健管理施設協議会の常置委員会であるフィジカルヘルス委員会のもと年に一回開催されるもので、大学の保健管理に携わる医師・専門職が全国より集い本邦大学学生・職員の健康上の諸問題を自由に討議することを目的としています。今回は大阪大学保健センター長 守山がコーディネーターとして全体を企画し、準備・運営の実務を大阪大学保健センターが担当しました。

この度は、直前3月11日(金)に発生した東日本大震災により開催が危ぶまれましたが、関係者間で協議し、予定のプログラムに加えて、大規模災害に対する大学の備え、発生時の対応、支援などの討論する場を設定することとなりました。



1日目には、大学の安全衛生管理に関わる法令に関するシンポジウムが行われ、本学の山本 仁安全衛生管理部教授より「国立七大学安全衛生担当者会議の対応と今後の法改正への動き」と題して国立七大学安全衛生担当者会議より国立七大学副学長会議へ提出された中間報告の概要が報告されました。続いて今回の大震災を受けた緊急企画が行われ、山本教授より大阪大学の震災支援への取り組みと国立大学間の連携状況について紹介があり、活発な討議がされました。



2日目は、学生支援・保護者支援に関するシンポジウムと特別講演及び学生・教職員の自殺についてのシンポジウムが行われました。学生支援シンポジウムでは本学から太刀掛俊之学生支援ステーション学生生活相談ユニット准教授より「学生支援におけるリスク管理 キャンパスカルトの予防からー」について、また松原 崇障害学生支援ユニット助教より「障害や慢性疾患のある学生への修学支援 合理的配慮 (reasonable accommodation) の観点からー」の講演があり、活発に議論されました。



本フォーラムの参加者の多くは、主にフィジカルヘルスを担当しているものの、それぞれ大学の産業医や医療スタッフとして学生支援や学生・教職員のメンタルヘルスにも関与する場面も多く、大変勉強になる有意義な内容であるとの評価をいただきました。当初110名の参加予定でしたが、東北、関東地方からの参加が震災のため困難となり84人の会員・オブザーバーの参加となりました。震災のため不参加となった会員にも後日報告書を送付し、今後の参考としていただく予定です。

(保健センター)

平成22年度 基礎工学研究科賞授与式

優秀な成績を修め博士前期課程を修了する学生の榮譽を称えるため、今年度から基礎工学研究科賞が創設されました。その記念すべき第一回目の授与式が、3月25日(金)、

関係者23名が出席し、執り行われました。佐藤宏介副研究科長の司会のもと戸部義人研究科長から祝辞があり、各領域1名ずつ合計11名に賞状が授与されました。



(大学院基礎工学研究科・基礎工学部)

第6回 共通教育新任教員研修実施

3月29日(火)、豊中キャンパスのステューデント・コモンズ(教育研究棟)において、第6回新任教員研修を開催しました。この新任教員研修は、2011年度に初めて共通教育の授業・実験を担当する常勤あるいは非常勤教員を対象として実施しました。今回の対象者は74名で、その内32名(専任教員28名、非常勤講師4名)が出席し、センター教員は7名が参加しました。

研修の第1部では、高杉理事・副学長から「大阪大学の歴史」と題し、大阪大学は適塾、懐徳堂の精神を受け継ぎ、本学は全国的にも誇れる歴史を有しているとの講演がありました。続いて、工藤眞由美大学教育実践センター長が、「大阪大学における共通教育の理念」について当センターが全国的にも特色のある全学出動方式をとり、新設されたステューデント・コモンズ棟を利用した基礎セミナーや対話型教育の促進を目指していることなどと説明がありました。最後に、山成数明教育実践研究部長から「共通教育の仕組みと留意点」と題して、共通教育のカリキュラム構成、様々な場合における学生への対処の仕方、新学務情報システムなど、「授業担当教員マニュアル」に関する実践的な情報について説明が行われました。

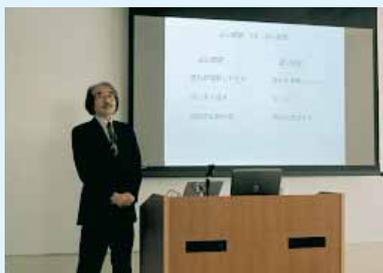
また、今回から、新しい内容として、共通教育賞受賞者

のスピーチを取り入れ、2名の受賞者にスピーチいただきました。升方久夫理学研究科教授からは、良い授業をするために、論理的な流れをフォローしやすくすること、伝えるための工夫(視覚的補助、話し方など)をすること心がけているという内容のお話をいただきました。吉川徹人間科学研究科准教授からは、授業とリンクして教科書を執筆し、さらにそれを活用した授業を展開したこと、必ずしも興味を持って受講しているわけではない学生を引き込むには、最低限一生懸命に語ろうとすることが重要であるとお話いただきました。

第2部では、平田オリザコミュニケーションデザイン・センター教授に、「対話型授業とは何か」をテーマにして、2時間のワークショップを実践していただきました。この第2部は、関西地区FD連絡協議会の「FD共同実施WG初任者研修」にも位置づけされた企画で、5名の他大学参加者を含めた21名が参加しました。授業への導入ゲームや企画に全員が参加し、それがコミュニケーションとどのように関係しているかを体験しました。平田先生から、演劇を含めたコミュニケーションやコミュニケーション・デザインについての洞察を聞き、参加した各自が応用できる多様なヒントを得ることができる内容でした。

参加者のアンケート結果から、「参加して自分の授業改善の参考になった」という肯定的な回答が多くの方からあり、有用な情報を伝達できたと考えています。

(大学教育実践センター)



大阪大学 - 産総研連携シンポジウム 「ライフサイエンスとロボティクス融合技術による新産業創成」

本学と産業技術総合研究所（以下、産総研と略記）との連携協定の締結を受けて、3月30日（水）に梅田のブリーゼブラザにおいて標記シンポジウムを開催しました。本シンポジウムは、本学と産総研が得意とするライフサイエンスとロボティクスの研究を融合し、新しい産業の創成を目指す産官学連携プロジェクトのキックオフとして企画されました。



西尾理事・副学長による開会の挨拶



浅田教授による講演

シンポジウムでは、西尾章治郎理事・副学長の開会挨拶に続き、寺崎智宏氏（文部科学省研究振興局）、国吉浩氏（経済産業省近畿経済産業局）、灘本正博氏（大阪商工会議所専務理事）から来賓の挨拶があり、本プロジェクトへの期待が寄せられました。その後、浅田稔工学研究科教授、野村泰伸基礎工学研究科教授、長谷川良平氏（産総研ヒューマンライフテクノロジー研究部門）、松井俊浩氏（産総

研情報通信エレクトロニクス分野）、川出雅人氏（オムロン株式会社）による講演をがあり、ライフサイエンスとロボティクスの融合技術の発展性と将来性について議論しました。シンポジウムには産業界を中心に183名の参加があり、本テーマに対する関心の高さを知ることができました。今後の連携プロジェクトの推進が大いに期待されます。

（基礎工学研究科・基礎工学部）

「ナノ高度学際教育研究訓練プログラム」社会人教育プログラムの平成22年度第7期生修了認定証授与式、および平成23年度第8期生開講式、ならびに特別講義、交流会開催

ナノサイエンスデザイン教育研究センターは、標記の修了認定証授与式、開講式並びに特別講義を、97名（サテライト教室にて43名を含む）の受講生の出席のもと、4月1日（金）に中之島センターにおいて開催しました。

本プログラムは、平成21年度より授業料の有料化と大阪大学ナノ理工学人材育成産学コンソーシアムの支援を得た新制度の下で実施中であり、実社会で活躍中の研究者・技術者を対象とした4コースからなる研究科横断型の高度社会人教育プログラム（1年間）です。また、サテライト教室は近畿、中部、関東圏10ヶ所に拡大し、企業28社のご協力を得ています。

開式に先立って東日本大震災で亡くなられた方々に対する黙祷を捧げた後、修了証書授与式（7期生74名中修了者69名）では、赤井久純センター長（理学研究科）より、科目等履修生高度プログラム修了認定証および大阪大学エクステンション修了証書が授与されました。引き続き、開講式（8期生73名）も兼ねて、赤井センター長の挨拶、太和田善久コンソーシアム理事、四日市教室より齋藤彰一コンソーシアム理事の式辞があり、その後伊藤正副センター長による新入生履修指導がありました。特別講義「グリーンイノベーションにおけるナノサイエンス・ナノテクノロジー」（伊藤正特任教授）では、社会的価値観までも変えるグリーンテクノロジーにおけるナノ理工学の役割と光科学技術のホットな話題が提供され、受講生が質問を交えて熱心に聞き入っていました。引き続いての受講生・教員間の交流会には、来賓14名、阪大教員20名を含めて131名



修了式・開講式における特別講義

が参加し、受講生、大学関係者相互の交流を深める絶好の機会となりました。また、7期生までの総修了者数は500名を超え、これを機会に産学連携相互人材育成の一層の発展が期待されます。

今年度の大学院生向けのプログラムもスタートし、ナノテク技術の企業における活用を説くナノテクキャリアアップ特論の5大学への配信によるプログラム共有化の増強、大学院・社会人両プログラムの相互乗り入れによる討論重視の土曜集中講義「ナノテクノロジー社会受容特論」とロードマップを活用した「ナノテクノロジーデザイン特論」の増強、大学院博士前期課程の大学院副専攻プログラムの新設、後期課程の高度副プログラム化などによって人材育成プログラム内容の一層の充実が図られています。

（ナノサイエンスデザイン教育研究センター）

平成23年度工学研究科 「アジア人財資金構想」高度アジア人材育成プログラム・博士前期課程 入学式挙行

平成20年度より経済産業省・文部科学省による「アジア人財資金構想」高度専門留學生育成事業に採択されている上記プログラムの4期生の入学式が、4月5日(火)11時より理工学図書館3階ホールにおいて挙行されました。

式は、小泉潤二理事・副学長(プロジェクトリーダー)、馬場章夫研究科長、馬場口 登教授(各サブリーダー)を始め、留學生所属指導教員並びに上記プログラム3期生の出席の下、来賓として内海美保経済産業省近畿経済産業局産業人材政策課長及びコンソーシアム企業の方々にご列席いただき、座古勝特任教授(サブリーダー)の司会により進められました。最初に、小泉理事・副学長および馬場研究科長から祝辞が、また、内海課長からアジア地域と我が国の産業発展を支える人材として今後の活躍への期待がそ

れぞれ述べられました。その後、馬場口サブリーダーよりプログラム入学者6名(中国5名、タイ国1名)の紹介があり、在校生を代表して、3期生のヴィバピーさんより「母国を含めたアジア諸国と日本の懸け橋となり、東北大震災の復興に向けて、共に頑張りましょう」と歓迎の辞がありました。続いて新入留學生を代表して、苗偉君より入学の喜びと「アジア諸国発展に尽力出来る人材になれるように精進したい」との表明があり、厳肅の内に執り行われた入学式を閉会しました。

閉会后、ラ・シェーナにおいて入學生歓迎会が伊藤厚示特任教授の司会で執り行われ、コンソーシアム企業からの御来賓と共に今後の抱負、期待などが語られ、終了しました。



(工学研究科・工学部)

平成23年度 新入生健康診断実施状況

平成23年度新入生健康診断は、4月5日(火)・7日(木)の両日、桜の咲き始めた中、共通教育講義棟C棟で実施されました。健康診断では、尿検査、内科診察、心電図・血圧、身長・体重、胸部レントゲンの諸検査と歯科検診が行われ、今年度の新入生3,423名が受検しました。



新入生健康診断の目的は、健康上の問題を早期に発見するとともに、自らの健康状態を把握することにあります。何らかの異常や問題が見つかった場合には、保健センターで再度診察や検査を実施し、健康指導をしています。心身とも健康な状態で充実した大学生活をスタートしましょう。



(保健センター)

平成23年度 共通教育ティーチング・アシスタント研修実施

平成23年度の共通教育授業科目を担当するティーチング・アシスタント（以下、TAと表記）を対象とした研修が、4月7日（木）に実践センター大講義室で行われました。TAの制度は、共通教育においてきめ細かい指導を実現するとともに、当該学生には教育者としてのトレーニングの機会を提供するという二つの目的を有しています。今回は、円滑にTAの業務に従事してもらうために必要な内容に加え、TAを真の教育の機会とするため、その意義を理解してもらうようTA経験者によるミニシンポジウムを企画しました。今年度も昨年とほぼ同じ243名が参加しました。また、教育・情報室長から各部局に参観の案内が通知され、他部局からも10名の教員が参加しました。

司会の山成数明教育実践研究部長による趣旨説明を受け、最初に工藤真由美大学教育実践センター長から本学の教育理念、教養教育の概要が説明されたのち、ステューデント・コモンズ、ガイダンス室、教育実践集「魅力ある授業のために」などの取組が紹介されました。

次に、森岡裕一教授（前TA活用専門委員会委員長）から、TA制度の基本的な趣旨、職務内容や従事時間、責任権限等を中心に、TAの位置づけと業務等についての説明が



なされました。

さらに、齊藤貴浩准教授（TA活用専門委員会委員）から、参加者に配布された「TAハンドブック」を参照しつつ、業務を遂行するにあたって留意すべき点が網羅的に紹介されました。

最後に、TA体験談として、山本一晴さん（人間科学研究科D3）、瀧野裕輔さん（理学研究科D3）、小菅雅行さん（文学研究科D3）が壇上に立ち、TAの実務について、そしてTAとして留意すべき点や、学んだことなどについて語ってもらい、コメンテーターの服部憲児准教授とともに、パネルで討論を行いました。授業の準備やコミュニケーションが重要であることなどが再確認されました。

TA研修は、教育の質保証とともに大学院生のキャリア形成の機会としてもますます重要となるでしょう。今回の共通教育のTA研修の様子はwebCTで学内に公開されるとのことであり、より多くの人の閲覧と、全学的な発展が期待されます。

（大学教育実践センター）

平成23年度入学 学部1年次外国人留学生ガイダンス・懇親会

4月8日（金）、大学教育実践センター管理・講義A棟A102講義室、生協3階食堂（懇親会）にて、本年度は、国費外国人留学生12名、私費外国人留学生45名の計57名を迎え、ガイダンス、懇親会を開催しました。

ガイダンスでは、大学教育実践センターから、日本あるいは大学での生活に必要な事務手続きについて説明の後、国際教育交流センターより、所属教職員の自己紹介、日本語授業等の履修説明や催し物のお知らせ等が行われました。また、OUISAや生協留学生委員会のメンバーの方から、留学生相互、留学生と日本人学生の交流のコミュニティが紹介されました。

その後、ステューデント・スタッフを案内役に、豊中キャンパス・キャンパスツアーを行い、そのまま懇親会会場まで場所を移し、大学教育実践センターの教職員も交えて、教職員と外国人留学生、外国人留学生相互の親睦を深めるため懇親会が開催されました。

工藤真由美大学教育実践センター長の開会の挨拶により始められ、初めて会う教職員や留学生同士も多かったですが、料理を囲み、親睦を深めることができました。



入学当初で毎日あわただしく生活している留学生が、笑顔いっぱいリラックスした気分で本会を楽しんでいました。

最後に、大島巧大学教育実践センター留学生専門委員会委員長（工学研究科・教授）より閉会の挨拶があり、盛会のうちに終了しました。

（大学教育実践センター）

平成23年度(第1回) 大阪大学新入職員研修実施

平成23年度(第1回)新入職員研修が、4月12日(火)から14日(木)までの3日間にわたりコンベンションセンター及び中之島センター等において行われました。

この研修は、新入職員47名を対象として、「職員としての自覚と意識の確立を図り、新入職員として必要な基礎的知識・技能を身につけ、職場への適応力を養い、もって、職員資質向上を図る」ことを目的として実施されたものです。

開講式では、鷲田清一総長から、法人化後の大阪大学に求められることについての話を交えながら、本学職員としての職務を認識するとともにスキルアップに努めていただきたい旨、激励の言葉がありました。その後、高杉英一理事・副学長から「大阪大学の歴史について」の講義が、小泉潤二理事・副学長から「大阪大学の教育について」の講義が行われ、午後からは、西尾章治郎理事・副学長から「大阪大学の研究推進について」の講義が、尾山眞之助理事・副学長から「大阪大学職員に求められること」の講義が、



開校式(鷲田総長挨拶) コンベンションセンターにて



専門講師による演習 コンベンションセンターにて

綿谷茂一総務企画部人事課長から「服務規律について」の講義が行われました。その後、大学院工学研究科の研究室の施設見学を行いました。

2日目は、大阪大学の精神的源流とされる懐徳堂由来碑と適塾を見学し、その後、中之島センターに会場を移動して、中之島センターの概要の説明を受けました。その後、専門講師により「社会人の常識」について講義・演習が行われました。

3日目は、専門講師により「ビジネスマナー」「仕事の基本」等について講義・演習が行われた後、閉講式では、尾山眞之助理事・副学長から修了証書が授与され、この研修で学んだことを実際の業務で活用し、大阪大学職員としてご活躍いただきたい旨、お話しがありました。

この研修を通じて受講者は、大阪大学職員としての役割を認識するとともに、お互いに親睦を深め合うなど有意義な時間を共有でき、3日間の研修を全員、無事修了しました。

(総務企画部人事課)

基礎工学国際棟完成式



研究科長からの挨拶

昭和56年に建てられた基礎工学国際棟(旧シグマホール)は、施設の老朽化が顕著になったことや、本年、基礎工学部が創立50周年を迎えることにより改修工事を進めておりましたが、このたび改修工事が終了したことを記念して、4月14日(木)に基礎工学国際棟完成式を開催しました。

当日は、戸部義人研究科長による挨拶の後、佐藤宏介副研究科長によるAV機器等のデモンストレーションが行われました。また、完成式後は設備の見学が行われました。

基礎工学国際棟は、車椅子4席を含む238名を収容し、天吊プロジェクター3面、アレイスピーカー、ICT対応AV演題、電子黒板2面、無線LAN、映像配信カメラ2台を設置したシグマホール(旧ディスプレイ室)69名を収容し、天吊プロジェクター1面、ICT対応を設置したセミ

ナー室、およびポスターセッション・休憩室等に使用可能な多目的スペースを配し、国際会議をはじめとする多様な会議、セミナー等に利用できる施設としてリニューアルしました。

なお、施設は他部局にも開放し、一般使用は6月中旬以降に開始される予定です。



天吊プロジェクター3面

(基礎工学研究科・基礎工学部)

学生企画による創立80周年記念広報事業 ラッピングバス運行開始

本学の創立80周年を学内外へ広報するために、「学生企画による創立80周年記念広報事業」として、キャンパス間を運行するスクールバスに学生がラッピングのデザインを企画しました。

デザインは本学の美術部が、創立80周年記念の『原点へ 未来へ』のテーマをもとに、お馴染みの「マチカネワニ」と「いちょうマーク」を学生らしい自由な発想でリ



イクしています。

スクールバスは7台で運行されており、そのなかの1台にこのデザインが施されています。運行期間は、平成23年8月8日までとなっていますので、ぜひ見つけてください。

美術部からのコメント

「原点へ・未来へ」をテーマにデザインしました。みなさんご存知のマチカネワニと阪大のいちょうマークですが、これまでとは一味違った姿になっています。夏までの短いお付き合いですが、可愛がってくださいね。
(学生部学務課)

第15回 APRU年次学長会議開催

本学が加盟するAPRU (Association of Pacific Rim Universities) 第15回年次学長会議がGlobal Summit of University Presidents 2011 (GSUP) と題する、ホスト校の清華大学(中国) 創立100周年記念式典とともに4月22日(金)から24日(日)にかけて同時開催され、本学から辻毅一郎国際交流室長、山内国際公共政策研究科教授、向井国際交流オフィス国際交流課長が出席しました。

GSUPにおいては、世界134大学/295名が出席し、参加大学の銘板入り記念植樹やUniversity Governance, Interdisciplinary Research Development, Social Responsibilities of Leading Universities, Trends in International Collaborationを各テーマとする分科会が行われ、全体会議で4つのC (Cooperation (大学間の連携), Cultivation (将来のリーダー育成), Contribution (地球規模課題に対する解決への貢献), Creation (大学の経営戦

略によって創成される相乗効果))が重要なキーワードとする声明が宣言されました。

APRU年次学長会議では、昨年度の活動報告及び会計報告、Steering Committeeのメンバー選出方法等について審議されました。

APRUは、環太平洋地域に所在する主要な大学(現時点42大学が参画)により構成され、経済発展、技術移転、大気汚染等の諸課題に関して、教育・研究の側面から協力・貢献することを目的とし1997年に設立されました。今回の会議は、清華大学創立100周年記念式典との同時開催により参加者が多数に及んだこともあって例年に比べて活発な意見交換ができる絶好の機会となりました。

なお、来年度の第16回APRU年次学長会議は、オレゴン大学(米国)がホスト校となり6月26日から29日にかけて開催される予定です。



(国際交流オフィス国際交流課)

平成23年度 学生定期健康診断実施状況

全学生を対象とした平成23年度学生一般定期健康診断は、4月11日(月)～4月28日(木)に保健センター豊中本室ならびに保健センター吹田分室で実施されました。

今年度の定期健康診断期間中は、雨天が続き、受検する学生が少なくなるのではないかと心配されましたが、学生の健康への意識の高まりもあり、今年度の受検者は18,454

名、受検率は74.9%で、前年度より0.2%上昇しました。健康診断は、健康の保持・増進のため、また疾病の有無とその早期発見に役立ちます。次年度は、言語文化研究科、国際公共政策研究科、文学研究科・文学部の学生さんも積極的に受検してください。

受検状況は、下表のとおりです。

部 局	学生数	受検者数	受検率
文学研究科・文学部	1,321	772	58.4%
人間科学研究科・人間科学部	1,133	801	70.7%
法学研究科・法学部	1,267	898	70.9%
経済学研究科・経済学部	1,385	973	70.3%
理学研究科・理学部	2,049	1,684	82.2%
医学研究科・医学部	1,530	1,148	75.0%
医学部保健学科	955	832	87.1%
歯学研究科・歯学部	607	494	81.4%
薬学研究科・薬学部	671	565	84.2%
工学研究科・工学部	6,101	4,668	76.5%
基礎工学研究科・基礎工学部	2,752	2,397	87.1%
外国語学部	3,094	2,087	67.5%
言語文化研究科	394	204	51.8%
国際公共政策研究科	206	111	53.9%
情報科学研究科	397	313	78.8%
生命機能研究科	236	194	82.2%
高等司法研究科	289	219	75.8%
連合小児発達学研究科	37	8	21.6%
研究所他(研究生・科目等履修生)	185	45	24.3%
学 部 合 計	24,609	18,413	74.8%
		41	
歯科技工士学校	43	18,454人	95.3%
総 合 計	24,652人		74.9%

学生数：平成23年4月1日現在

(保健センター)

マレーシアのマラヤ大学理学部物理学教室から訪問団が来日

理学研究科および理学部は、東アジアだけでなく東南アジア諸国とも積極的な交流を推進していますが、4月にマレーシアのマラヤ大学から5名の物理学の教授が理学研究科を訪問されました。このマラヤ大学は、シンガポールが独立してマレーシアという国ができる以前から存在する、マレーシアで最古でかつ最も優秀な学生と教員を擁する大学であります。

平成21年に、マラヤ大学理学部と本学の理学研究科および理学部は、学术交流協定および学生交換覚書を調印いたしました。その調印以降、平成22年9月には、本学の理学研究科物理学専攻の5名の教授がマラヤ大学に出向いて、第1回物理交流ワークショップを開催しました。それに引き続き、今回のマラヤ大学からの訪問となり、第2回物理交流ワークショップを開催し、理学研究科長を表敬訪



マラヤ大学訪問団

問されました(写真)。

これまでに、共同研究の発足や、本学の1名の学生委託などの具体的な交流が進められてきています。今回の訪問を機に、より熱い交流が進展すると期待されます。

(理学研究科・理学部)

豊中キャンパスで里山散策。 「第5回植物探検隊@春の待兼山を訪ねて」

21世紀懐徳堂主催「第5回 植物探検隊@春の待兼山を訪ねて」を4月17日(日)、24日(日)に豊中キャンパスで開催しました。講師は『キャンパスに咲く花』(大阪大学出版会)の編者の一人、栗原佐智子先生。

豊中キャンパスの待兼山は里山の自然がそのままの状態に残されており、その貴重な自然スポットで植物の観察会を行うこの企画は、大変好評で、年2回、春と秋に開催しています。今回は、両日で約63名の参加がありました。探検隊一行は大阪大学会館に集合後、阪大坂の階段から待兼山へ。順次目に入る植物について、講師の解説を聞きながら待兼山の植物観察を行いました。舗装された散策路を

外れ、草をかき分けて進むルートでは、今回は貴重な在来種や珍しいキノコ「アミガサタケ」を発見しました。

後半は21世紀懐徳堂スタジオにてトークセッション。各キャンパスに見られる豊富な植物等がスライドで紹介されました。その後、質疑応答ではキャンパス内の植物や新種についての意見が交換されました。参加者からは、「身近にある植物について、実際に見ながら説明をしていただき、大変興味深く楽しむことができた」、「待兼山の自然を身近に体験できた」、「豊かな植物に驚いた」等の声をいただきました。



(21世紀懐徳堂)

大阪大学室内楽アンサンブル第12回演奏会

OUCE (大阪大学室内楽アンサンブル Osaka University Chamber Ensemble) の第12回演奏会が4月30日(土)に、コンベンションセンター MO ホールにて開催されました。

いちょう祭、吹田祭関連行事として、年2回、春と秋に演奏会を開いており、大学関係者、近隣にお住まいの方などを中心に125名の方に来ていただくことができました。アンケートからも、回を重ねる毎に、ご好評の声が強まっていることに、メンバー一同喜び、励みとさせていただいております。

今回は、ピアノ連弾やチェロソナタなど今まで演奏する機会がなかった楽器編成にも取り組みました。特にピアノ連弾は1つのピアノを4手で演奏するという力強さで、ご好評をいただきました。

毎回、趣向をこらしたプログラムを考えておりますので、どうぞ今後もご支援いただき、演奏会へ足をお運びくださいますよう、よろしくお願いいたします。

第13回演奏会は11月3日(木・祝)を予定しております。大阪大学で、日常的に音楽を楽しむ時間を持ち文化の種を育てることが、OUCEの目標でありますので、ぜひ皆様お誘い合わせの上、お越しください。



第12回演奏会

OUCEの活動は、ホームページ (http://orchestra.musicinfo.co.jp/_ouce/) *をご覧ください。

(*当ホームページは、クラシック音楽情報センター (<http://www.musicinfo.com>) より、サーバーの無償提供を受けています。)

ただいまメンバー募集中 特にチェロ奏者の方のご参加をお待ちしております。

(OUCE)

いちよう祭開催

5月2日(月)及び5月3日(火)の両日に、全学をあげて新入生を歓迎するとともに、教職員・学生の親睦及び地域との連携を図ることを目的とした「いちよう祭」が、今年度も吹田キャンパス、豊中キャンパスの2つのキャンパスで開催されました。

当日は、例年と同様、各部局等による施設開放、展示会、



講演会、園遊会等のほか、東日本大震災からの復興に寄与するため学生自らが企画したチャリティーバザー、義援金の募集が行われました。

新入生のほか、大阪府下の各高等学校など学外の方々へ広く参加を呼びかけ、多数の参加者が訪れました。



(総務企画部総務課)

人権問題に関する映画会開催

人権問題に関する映画会が、憲法週間中の5月2日(月)に大学教育実践センター 共通教育講義棟C-206で開催されました。

この映画会は、人権問題啓発行事の一環として毎年行っているもので、今年度は人権問題全般について認識を深めてもらうため、次の作品「ジョゼと虎と魚たち」(障害者問題)を上映しました。

午後3時からの上映で、教職員・学生等約50名の参加者があり、参加者は最後まで熱心に映画を鑑賞しました。

人権問題に対する正しい理解と認識を深めるため、引き続き各種行事を予定していますので、みなさまの積極的な参加をお願いします。



(人権問題委員会)

体育会六賞及び課外活動総長賞の表彰式開催

5月2日(月)のいちょう祭において、平成22年度体育会六賞及び第12回課外活動総長賞の表彰式が、豊中キャンパスのメインステージで行われました。爽やかな晴天の下、受賞団体部員の他一般学生も多数集まって賑やかな雰囲気の中、表彰式は行われました。

「体育会六賞」は、大阪大学体育会所属運動部及び各運動部員の部活動に対する励みの目標とし、あわせて学生の健全な課外活動を助成する主旨のもとに設置されたもので、以下の基準に基づき、体育会において選考されました。

「赤堀賞」...年間最優秀クラブ

「会長賞」...年間最優秀選手

「釜洞賞」...年間で最も特色のある活動を行ったクラブ

「熊谷賞」...年間最優秀女子クラブもしくは選手

「山村賞」...七大戦において顕著に活躍したクラブ、とりわけ前年度より著しく順位が上昇したクラブ

「宮原賞」...七大戦において優勝を収めた全てのクラブ

また、「課外活動総長賞」は、学生の課外活動の充実と更なる活発化を図ることを目的として、前年度において特

に優れた活動を行った学生団体等を表彰するもので、体育系、文化系の大学公認及び学部公認団体から、非公認のサークル団体等まで、学内の全ての課外活動団体等を対象に公募をした結果、今回は20件の応募があり、これら応募のあった団体等の様々な活動報告に基づき、学生生活委員会において選考されました。



今回、表彰を受けた団体及び個人は次のとおりです。

体育会六賞	受賞団体・個人	表彰の対象となった主な成績等
赤堀賞	硬式野球部	2010年度春季リーグで1部昇格
会長賞	フェンシング部 石井 崇高	全日本個人選手権大会 エペ部門6位入賞
熊谷賞	少林寺拳法部 深谷 望	関西学生大会自由組演武男子2段の部など、男子の部で好成績
釜洞賞	該当なし	
山村賞	剣道部	2年連続の最下位から2位へ順位を上げ、七大戦優勝に大きく貢献
宮原賞	硬式野球部、自動車部、少林寺拳法部、水泳部女子、男子ソフトテニス部、体操部 陸上競技部男子、陸上競技部女子	七大戦で優勝

課外活動総長賞	受賞団体・個人	表彰の対象となった主な成績等
最優秀賞	該当なし	
優秀賞	金沢 朋幸(ラクロス部)	選考会を経てU-22日本代表に選出
	落語研究部	「策伝大賞」で、最優秀賞にあたる「策伝大賞」受賞
	アカペラサークルinspiritual voices	テレビ番組「ハモネプ」全国優勝
	競技かるた会	A級9大会優勝、最多勝・ポイントランク全国1位獲得
特別賞	フェンシング部	全日本個人フェンシング選手権 エペ部門6位入賞
	少林寺拳法部	関西学生新人大会 六連覇、全日本学生大会男子式部 二位
	間島 恭子	四万十川ウルトラマラソン女子29歳以下の部 優勝
	大阪大学フォーミュラレーシングクラブ	全日本学生フォーミュラ大会 総合優勝

(学生部学生・キャリア支援課)

基礎工学部・基礎工学研究科初任教員研修会実施

基礎工学研究科では、5月6日(金)に「平成23年度基礎工学部・基礎工学研究科初任教員研修会(初任者FD)」を同研究科A棟会議室において実施しました。

この研修会は、新たに赴任し、基礎工学部・基礎工学研究科の教育研究を担当することになった教員を主な対象に、大阪大学、基礎工学部、基礎工学研究科の現状についての認識を深めるとともに、大学教育を担当する教員として、教育に関する力を高めることを目的として平成15年度から実施しているものであり、今年度の研修会には、基礎工学研究科、並びに極限量子科学研究センターから27名の教員の参加がありました。

当日は、戸部義人研究科長による「基礎工学部・基礎工学研究科の沿革と現在」の講演に始まり、和田成生教授による「競争的研究資金獲得の重要性と研究者倫理」の後、佐藤宏介教授による「基礎工学部・基礎工学研究科の教育」、飯國洋二教授による「ハラスメント防止の重要性」と続き、最後に森相正則事務長による「大阪大学と基礎工学研究科



戸部研究科長による講演

の事務処理」についての講演が行われました。参加した27名の教員は、受講生という立場でメモを取りながら熱心に聞き入っていました。

(基礎工学部・基礎工学研究科)

安全保障輸出管理に関する説明会の開催について

5月12日(木)コンベンションセンター会議室において、安全保障輸出管理に関する説明会を開催しました。長谷俊治総長補佐(安全保障輸出管理統括責任者)の挨拶に続き、研究推進課石田英之特任教授による一次スクリーニング調査のフォローと貨物・技術の該非判定等についての講演、研究推進課橋善輝特任准教授(輸出管理マネージャー)による安全保障輸出管理の概要についての講演、研究推進課専門職員による学内手続についての説明を行いました。参加者は各部局の教員や安全保障輸出管理実務に携る事務職員等約70名でした。本学においては平成22年4月より安全保障輸出管理についての取り組みが始まったばかりで、学内においては業務に対する戸惑いが多く見られます。終了後の参加者からのアンケートでは「疑問が解消され、参加してとてもよかった」等の感想とともに、「専門用語が難しい」等の感想も寄せられました。研究推進課では、全



学的な説明会や部局ごとの説明会等を今後も積極的に開催し、安全保障輸出管理に関する周知活動を進めていきます。

(研究推進部研究推進課)

マイボトル・キャンペーン

大阪大学未来基金は、今年も新入生を対象として「マイボトル・キャンペーン」を実施しています。このキャンペーンは、新入生に大阪大学のロゴ入りのステンレスボトルを配布し、日々の生活に役立ててもらいながら、身近な“エコ”について考えてもらう企画で、昨年に続き環境省、大阪大学生協の協力を得て実施します。

5月16日(月)のキャンペーン初日には、在阪のテレビ局が取材に訪れ、ボトルを受け取りにきた学生や、阪大生協



ボトル受取後に取材を受ける学生

が設置しているミネラル水給水機を利用する学生を取材する姿などが見られ、学生からは、「節約になりうれしい」「環境にもやさしい企

画と思う」などの声が聞かれました。

新入生が、このキャンペーンに参加するためには、携帯電話を使って簡単なアンケートに回答することが条件となっており、キャンペーンへの



ボトル受取の様子

応募動機や、ペットボトルや缶飲料の購入量などについて約10問の質問に回答してもらいました。アンケート調査は、年間4回実施する予定で、マイボトルの使用頻度や、ペットボトルや缶飲料の購入回数などを調査し、学生の環境に対する意識や行動にどのような変化が見られるか継続的に調査していく予定です。

(基金事務局)

総長室に「勿嘗糟粕」の書

この度、東島清理学研究科長のお計らいで、理学研究科に保管されていた長岡半太郎初代総長直筆の扁額「勿嘗糟粕」が本部に移管され、現在、総長室に掲げられています。長岡先生は、1865年に現在の長崎県大村市に生まれ、東京大学理学部物理学科で学ばれました。その研究は原子物理学、応用物理学、地球物理学など物理学の広範囲にわたり、独創的で斬新な着想に基づく数多くの研究業績は、当時最も進んでいたヨーロッパの科学を超えるものと評価されていました。中でも有名な「長岡の原子模型」は、ボーアの模型よりも10年も前に発表された画期的な研究成果でした。

大阪大学が第6番目の帝国大学として開学する1931年5月当時は、理化学研究所主任研究員として物理学の研究に

没頭していた時機で、大阪帝国大学初代総長の就任に当たっては「柄にもない、御免蒙る」と再三固辞されましたが、時の文部大臣が三顧の礼で迎えたと言われています。

「勿嘗糟粕」の書は、1934年6月に3年務めた阪大総長を辞す際に、「阪大を去るに当たっての辞」として、「阪大を日本一の大学にするため、教授陣には私の力の限り新鋭をすぐって集まり頂いたつもりだ。そして研究第一、殊に産業科学の研究に力を入れる気運を作った。長岡は今大阪を去るが、どうか教授・学生共々に、この阪大の学燈を守って頂きたい」と切々な気持ちを吐露し、これを「糟粕を嘗むる勿れ」糟粕すなわち酒をしばったあとの残りかすを舐めるようなこと(研究)はするな、常に独創的であれという戒めのことばとして揮毫されたと伝えられています。

この書は、阪大創設時の理学部と医学部に託され、今日まで大事に保管されてきました。もう一つの扁額は附属図書館生命科学図書館に掲げられています。

注)この記事を書くにあたっては、長岡半太郎著「隨筆」及び大阪大学歴代総長餘芳(大阪大学出版会)を参考にしました。

(総務企画部)



長岡半太郎初代総長



「勿嘗糟粕」とともに(東島理学研究科長(左)と鷲田総長(右))

大阪大学における東日本大震災復興支援

3月11日に発生した東日本大震災により甚大な被害を受けられたすべての方々に、心からお見舞い申し上げます。

大阪大学では、この激甚な災害に対し、東日本大震災復興支援対策会議（議長：鷲田清一総長）を設置し、本学の被災学生への支援をはじめ、関係各所からの要請への迅速な対応や地震で被災された皆様への支援など、本学としてできる限りのあらゆる復興支援を行っています。

今回、その活動の一部として、本学において開催したシンポジウムの紹介と、学生のボランティア活動に関する取組を紹介致します。今後も引き続き、教員、職員、学生が協力し、大学として、個人として、いま考えられるあらゆる支援活動の取組を進め、行動に移したいと思います。

1. シンポジウム開催

本学では、学内の各分野の専門家からの緊急提言として、それぞれの専門分野を活かした様々なシンポジウムを開催しました。一例としていくつかのシンポジウムを紹介させて頂きます。今後も、大阪大学に属する「大学人」としてできることを市民の方々と一緒に考え、発信を続けていきたいと思っています。

「震災のいまとこれから」 - 私たちに何ができるのか -

4月29日(金)、大阪大学中之島センターにおいて大阪大学【緊急】シンポジウムとして、標記のシンポジウムを開催しました。

本シンポジウムでは、東日本大震災に対し、私たちは、かつての被災体験をどのように活かし、いま、一人の市民として何ができるのかを、そして、大学人としてどのような「英知」を差し出せるのか市民の方々と一緒に考え、発信することを目指しました。



当日は約300名の方に参加頂き、大変に意義深いシンポジウムとなりました。当日の内容は本号の背表紙にも詳細を記載しております。そちらも参考にご覧ください。

いちょう祭緊急講演会 - 今だから知ろう放射線と放射能のこと - (核物理研究センター・安全衛生管理部主催)

東日本大震災発生を受け、核物理研究センターと安全衛生管理部では、5月3日(火)に本学大学教育実践センターにおいて、いちょう祭の緊急企画として標記講演会を共同で開催しました。講師の核物理研究センター・藤原守准教授(演題：放射線とは？放射能とは？その影響は？ - みんなにわかる放射線入門 -)と医学系研究科・中島裕夫助教(演題：放射線を正当に怖がるための基礎的な放射線生物学 - 線量と人体影響と法律 -)からは、一般の方にも分かりやすく放射線とその人体への影響、関係する法律の内容等について説明があり、地域住民の方を含め参加者は熱心に耳を傾けていました。



核物理研究センター・藤原守准教授



医学系研究科・中島裕夫助教

「阪大病院フォーラム：東日本大震災に対する阪大病院の対応」(医学部附属病院主催)

5月11日(水)、医学部講義棟において、「東日本大震災に対する阪大病院の対応」と題して「阪大病院フォーラム」を開催しました。他部局からの来聴者も含めて約250名が参加する中、阪大DMAT(災害派遣医療チーム)および



阪大病院フォーラムの様子

ドクターヘリチームの参加者から現地での活動状況等について具体的に報告され、また病院のバックアップ体制等についても活発な意見交換がなされました。



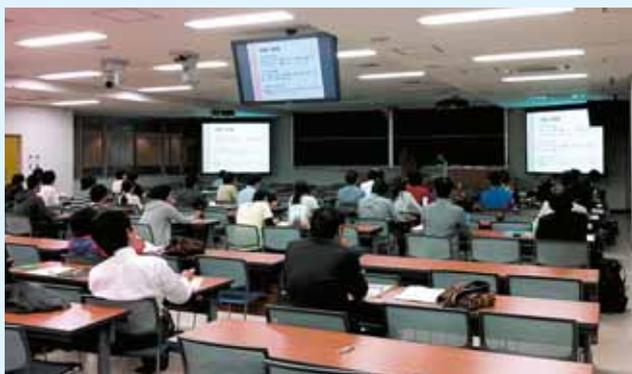
阪大 DMAT、ドクターヘリチームの現地での活動の様子

2. 学生のボランティア活動に関する取組

本学での学生のボランティア活動に関する取組として、災害の発生した当初は、学内において種々の災害復興支援活動に協力頂ける学生ボランティアを募集しました。この募集には200名を超える学生からの協力申込があり、学内の各部局に保管されていた物資の取りまとめ、発送準備作業等に協力を頂きました。

その後、4月13日(水)には、現地での災害ボランティア活動を希望する学生を対象に、被災地の現状を知ること、ボランティア活動に際する一般的な注意事項を知ingことを目的とした説明会を開催しました。被災地での支援活動に携わる教員による現地の報告と説明、活動に際しての注意事項等の説明が行われ、質疑応答、今後の活動についての意見交換等、活発な議論が行われました。5月25日(水)には第2回として、説明会に引き続き、学生支援ステーションの主催で震災ボランティア活動に関わる学生の報告・意見交換会が行われ、学内の有識者や神戸大学学生ボランティア支援室等の教職員を交えて、今後の取り組みについて活発な議論がなされました。

学習成果を活かし、使命感をもったボランティア活動への参加については、将来の社会の担い手となる学生にとって、極めて有意義なものと考えられます。しかしながら、



ボランティア活動に関する報告・意見交換会(2011年5月25日)

現地でのボランティア活動は、引き続き困難な条件の中で活動を行う必要があること、余震等の二次災害の危険を伴うことなどが予想されるため、活動を行うに当たっては周到な計画と慎重な行動が必要となります。本学では引き続き、このような説明会の実施等を継続し、現状を理解しながら、今自分ができることを、教員、職員、学生が共に考え、支援活動を継続していきたいと考えています。

「学生からのメッセージ」震災ボランティア活動に参加して

実際にボランティア活動を行ってきた学生からのメッセージを以下に紹介させていただきます。

災害ボランティアサークル「すずらん」の活動について
すずらん代表 成川隆文さん(工学研究科博士前期課程1年)

3.11の東日本大震災を受け、この4月に阪大生有志により災害ボランティアサークル「すずらん」が結成されました。災害復興のために、個々の学生が出来ることは限られていますが、時間と活力を持った学生が協力・団結すれば成し遂げられることはある。学生としての出来る限りを、被災者のために、という思いで立ち上がったのがこのすずらんです。毎週のミーティングを通して、「被災地から遠く離れた学生にできる支援は何か?」といった調査からスタートし、5月のGWからは、大きな被害を被った岩手県九戸郡野田村でボランティア活動を開始しました。5月は毎週被災地や避難所での活動を行い既に10名のメンバーが被災地で泥かきや仮設住居入居時の引っ越し作業、メンタルケアの活動を行いました。復興の道のりは10年、20年を要します。すずらんは長期に継続して、地域密着・被災者と心の通った復興支援活動を行っていきます。すずらん公式サイトでは、すずらんの詳細や被災地の状況、学生に出来る支援は何か?といった様々な情報を発信しています。また、すずらんMLにご登録頂ければ、どなたでもすずらんと一緒に災害ボランティア活動を行うことができます。阪大生の皆さん、被災地の復興のために共に活動しましょう。

すずらん公式サイト: <http://suzuran.jp.org/index.html>



野田村でのボランティア活動の様子

日本災害救援ボランティアネットワーク(NVNAD)の活動をおして

細田夢乃さん(人間科学研究科博士前期課程2年)

私が行ったボランティア活動は、兵庫県西宮市で行った活動と岩手県九戸郡野田村で行った活動の二種類です。どちらも「日本災害救援ボランティアネットワーク(NVNAD)」を通じて行いました。西宮市では、事務所の手伝い(電話対応・データ打ち込みなど)・街頭募金・救援物資の仕分けをし、野田村では、個別訪問・物資仕分けなどをさせて頂きました。被災地以外での活動と被災地での活動の両方を経験したことから、今後は両者をつなぐ活動をしていきたいです。たとえば関西にいらっしゃる県外避難者の方の支援などを考えています。被災地での活動が災害ボランティアのすべてではありませんし、被災地へ向かうNPOなどの団体を(事務補助や寄付などで)サポートすることも、間接的に被災地を支援することにつながります。さまざまな事情で被災地に向かうことができない阪大生も、各自にあったボランティアのやり方を考えることが大切だと思います。

(東日本大震災復興支援対策会議)

最先端・次世代研究開発支援プログラムに採択された研究者の紹介

阪大 NOW4 月号でお知らせしたとおり、「最先端・次世代研究開発支援プログラム」(内閣府、独立行政法人日本学術振興会)について採択課題が決定し、本学から 25 名が採択されました。

このプログラムは、世界をリードすることが期待される潜在的可能性を持った研究者に対する研究支援制度であり、「新成長戦略(基本方針)」(2009年12月30日閣議決定)において掲げられたグリーン・イノベーション又はライフ・イノベーションの推進を図ることが目的のひとつとなっています。

本号ではライフ・イノベーションで採択された 14 名に

ついて、研究者のプロフィールと研究課題の概略をお知らせします。ライフ・イノベーションでは、生命機能や疾患原因の解明等の基礎研究から医療での応用実践を見据えた研究開発まで、健康社会の実現を目的とした先端的な研究開発を通して、斬新な発想により新たな成長の課題解決に挑戦することが期待されています。

次号では、グリーン・イノベーションで採択された 11 名を紹介し、また、研究課題の概略は、大阪大学ホームページでもご覧いただけます。(トップページ > 教育・研究活動 > 最先端・次世代研究開発支援プログラム)



診断・創薬イノベーションを実現する超高感度振動子バイオセンサーの創成 基礎工学研究科 准教授・荻 博次

血液検査においてガンや認知症の診断を行うには特殊なタンパク質を検出する必要があるが、現状では長時間を要し感度も不十分のため、早期発見が困難な場合が多い。発症初期において、すぐに正確な検査結果を示す装置が存在すれば、予防医学において大きな進歩が成し遂げられ、我が国の膨大な医療費の削減に貢献する。本研究では、血液中の微量なタンパク質を高感度に検出する振動型センサーを開発する。血液採取後すぐに病気の診断が可能となるほどの、迅速性と高感度化の達成を目指す。



鳴り響く振動子表面に標的タンパク質を吸着させ、振動子の見かけの質量を増加させると共振周波数が低下する。この原理を用いて吸着したタンパク質の質量を検出するセンサーが振動子バイオセンサーである。

おぎ・ひろつく

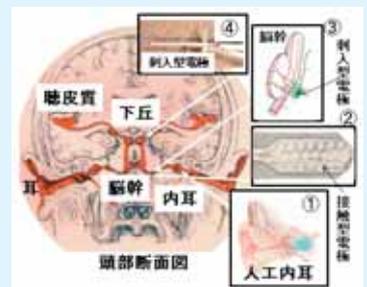
略歴：大阪大学基礎工学研究科物理系専攻博士前期課程修了。大阪大学基礎工学研究科助手、米国国立標準技術研究所客員研究員を経て 2000 年より現職。2007 年 JST さきがけ研究員(兼任)、2010 年 ClampOn Inc・技術顧問(兼任)。

プロフィール



聴覚中枢神経マイクロ・インプラントにおけるシステム・インテグレーションの 基盤形成 / 生命機能研究科 特任准教授・館野 高

先天的な高度難聴児は、国内で毎年 1,200 人程度産まれると推定され、3 歳頃までに人工内耳などの埋め込み型聴覚機器(聴覚インプラント)を装着すれば、話したり聞いたりすることが通常の人と同様にできると言われている。現在の聴覚インプラントは海外製品が多く、音質が劣る場合もあると言われており、さらに高機能で小型の国産製品が望まれている。この研究では、補聴器や人工内耳の利用が困難な人でも聴覚が得られる新たな聴覚インプラントの小型集積化技術を開発する。



生体内の細胞の機能を模擬して音の振動を増幅する微小な機械部品を開発する。

たての・たかし

略歴：大阪大学基礎工学研究科物理系専攻博士前期課程修了。NTT 基礎研究所、大阪大学基礎工学研究科助手、ケンブリッジ大学リサーチアソシエイト、大阪大学基礎工学研究科准教授を経て 2011 年 6 月より現職。2007 年 産業技術総合研究所外来研究員、2007 年 JST さきがけ研究員。

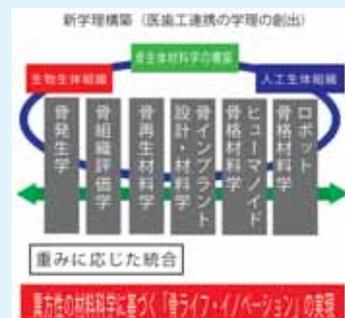
プロフィール

最先端・次世代研究開発支援プログラムに採択された研究者の紹介



骨微細構造から学ぶ骨生体材料学の構築と骨配向化制御
工学研究科 教授・中野貴由

超高齢化社会の日本では、骨疾患の解明や骨再生・治療法の確立が急務である。一方従来型の骨密度を中心とした診断・治療だけでは、骨医療の限界を迎えていることが世界的にも問題視されている。この研究では、骨を構成するアパタイトの配列度合いが、骨の強さを支配することに着目し、骨配向性の立場から骨生体材料学の構築やそれに基づく骨配向性制御に挑戦する。骨配向性制御メカニズムの解明は、新たな骨再生・治療法の実現につながり骨粗鬆症薬開発への応用や新規人工関節の実用化などが期待される。



なかの・たかよし

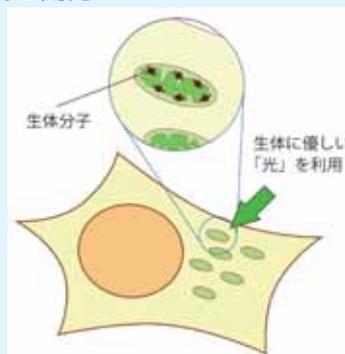
プロフィール

略歴：大阪大学工学研究科金属材料工学専攻博士前期課程修了（1992年）、博士（工学）（1996年）、大阪大学工学部助手（1992年）、大阪大学工学研究科講師（1999年）、大阪大学工学研究科助教授（2001年）を経て2008年より現職。



生体機能可視化のための超解像分子イメージング技術の開発
工学研究科 准教授・藤田克昌

我々が光の中で暮らすように光は生体にやさしく、それを用いる光学顕微鏡は生物を観察するには不可欠なツールである。しかし、光には波の性質があり、その波（大きさ約400ナノメートル。ナノ = 10^{-9} ）に埋もれてしまうような、小さな物体や細胞内での生体機能の観察には、光学顕微鏡の解像力では不十分である。この研究では、光の性質の限界を超えて、より微細な生体構造を観察できる光学顕微鏡技術を開発する。研究の成果は基礎生物学だけでなく、基礎医学、創薬にも役立つ技術となると期待される。



生きた細胞や生体組織内部の分子の動きを、高い解像度で捉える顕微鏡を開発する。

ふじた・かつまさ

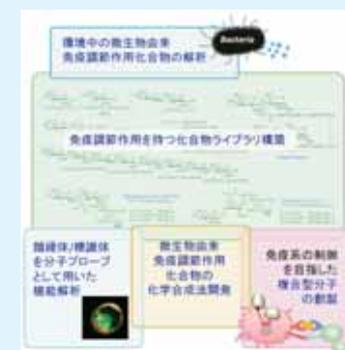
プロフィール

略歴：大阪大学工学研究科博士後期課程修了。博士（工学）。日本学術振興会特別研究員、大阪大学フロンティア研究機構科学技術振興特任教員、大阪大学工学研究科助手、同助教を経て2007年より現職。2008年 JST ERATO 袖岡プロジェクト グループリーダー（兼任）。



免疫機構を制御する微生物由来化合物の 化学合成と機能解析および新規制御分子の創製 / 理学研究科 准教授・藤本ゆかり

近年のアレルギー疾患の増加や癌、および脳・心臓血管疾患につながる慢性炎症などには、免疫機構の発達過程やその機能が深く関わっている。免疫機構の調節には常在菌も含めた細菌、微生物由来分子が大きな役割を果たしているが、詳細はまだ明らかになっていない。この研究では、免疫機構を制御する微生物由来化合物について、化学合成による合成法を確立するとともに、幼少時の免疫機構発達に関わると考えられる微生物由来分子の構造解析、機能解析、および疾患治療につながる新規制御分子の創製を行う。



ふじもと・ゆかり

プロフィール

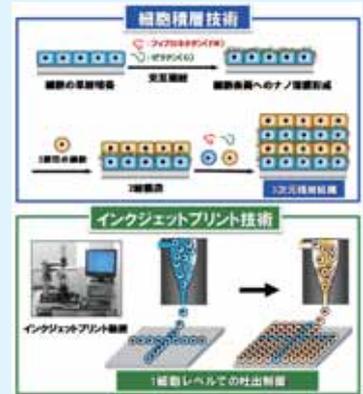
略歴：大阪大学理学部卒業。博士（理学）。住友化学工業株式会社研究員、Columbia University, Research Associate、名古屋大学理学研究科博士研究員、大阪大学理学研究科助手、同講師を経て2008年より現職。

最先端・次世代研究開発支援プログラムに採択された研究者の紹介



1細胞レベルで3次元構造を制御した革新的ヒト正常・疾患組織モデルの創製
工学研究科 助教・松崎典弥

現在、医薬品の毒性・効果判定試験では細胞と実験動物が用いられているが、私達の生体組織は様々な細胞による立体構造であるため、細胞だけで組織の医薬品効果を評価することは困難である。この研究では、様々なヒト細胞を組み合わせた「生体組織に限りなく近い3次元構造のヒト組織モデル」の構築技術を開発する。ヒト細胞だけで構築された組織モデルは、人間への影響をより正確に評価できる医薬品試験に役立つほか、再生医療、新規治療薬の開発研究、動物実験の削減などへの応用も可能である。



まつさき・みちや

プロフィール

略歴：鹿児島大学理工学研究科博士後期課程修了。博士（工学）。日本学術振興会特別研究員、スウェーデン Lund 大学大学院免疫工学専攻客員研究員、大阪大学大学院工学研究科応用化学専攻特任助手、同助手を経て 2007 年より現職。2008 年 JST さきがけ研究者（兼任）。



コンピュータショナルフォトグラフィによる安全な人体内部3次元構造の可視化
産業科学研究所 准教授・向川康博

近年、CG 技術と画像解析技術を統合することで、カメラ単体では撮影できない情報を可視化できる新しい撮影技術が盛んに研究されている。この研究では、情報科学分野で研究されている撮影技術を医療分野に持ち込む異分野融合によって、安全性と鮮明さを両立した人体内部撮影システムの開発に取り組む。この研究で開発するシステムによって安全で小型の、血圧計のように家庭で利用できる簡易診断機器が実現すれば、日常の健康状態把握や疾患の早期発見に役立ち、健康社会の実現に寄与することが期待できる。



人間の指を近赤外光を使って撮影すると静脈などが透けて見える。しかし、内部では光が散乱するため、鮮明化のためには散乱成分除去が必要となる。

むかいがわ・やすひろ

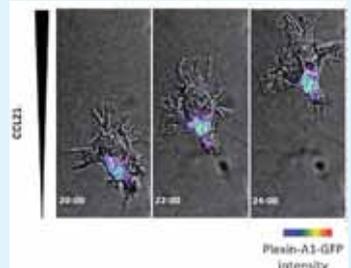
プロフィール

略歴：筑波大学工学研究科博士後期課程修了。博士（工学）。岡山大学工学部情報工学科助手、筑波大学学際領域研究センター講師を経て 2004 年より現職。



セマフォリンによる細胞移動及び小胞輸送ナビゲーション機構の解明
医学系研究科 教授・熊ノ郷淳

生体内タンパク質セマフォリンは、免疫細胞の移動や細胞の中の物質輸送をナビゲーションしており、その破綻が自己免疫疾患などの病気の発症に関わっている。この研究は、セマフォリンによって制御される免疫細胞移動と物質輸送ナビゲーションの仕組みを明らかにして、病気の鍵分子であるセマフォリンを標的にした病気の治療法や診断法の開発につなげることを目的としている。研究成果は免疫疾患、癌等の疾患に対する新しい治療法や診断法の開発につながり、ライフ・イノベーションに貢献できると期待される。



樹状細胞はリンパ管から分泌されるSema3Aを細胞の後端部で感知している。これはケモカイン等との先端部に作用する既知のメカニズムとは異なる新しい細胞移動制御機構である。

くまのこう・あつし

プロフィール

略歴：大阪大学医学研究科第3内科博士課程修了。大阪大学医学部付属病院医師、大阪通信病院医師、大阪大学微生物病研究所助手、同分子免疫制御分野助教授を経て、2006年同感染症分野教授。2011年4月より現職。世界トップレベル研究拠点大阪大学免疫学フロンティア研究センター教授（兼任）。

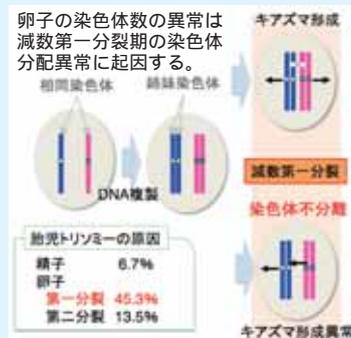
最先端・次世代研究開発支援プログラムに採択された研究者の紹介



流産リスク管理に向けた配偶子異数体形成過程の基礎的研究

蛋白質研究所 准教授・篠原美紀

妊婦の約10%が流産を経験し、原因の多くは先天的な胎児の染色体数の異常にあることがわかってきた。染色体数の異常は卵子・精子を作る過程のうち、染色体数を半分にする過程（減数第一分裂期）で起こる可能性があると考えられているが、まだそのしくみが完全にはわかっていない。この研究では、減数分裂期のしくみがヒトと似ているパン酵母を用いて、減数第一分裂期に染色体数をどのように正確に半分にしてお子に伝えていくのか、染色体DNAの構造とタンパク質の機能からそのしくみを明らかにする。



キアズマ：図中の染色体の交換が起こったX字形の部分

しのはら・みき

プロフィール

略歴：大阪大学理学研究科博士前期課程ならびに大阪大学医学研究科博士課程修了。博士（医学）、日本学術振興会特別研究員、シカゴ大学HFSP博士研究員、大阪大学理学研究科博士研究員、広島大学原爆放射線医科学研究所助教、大阪大学蛋白質研究所助教を経て2007年より現職。



臓器特性を利用した心血管疾患治療標的の探索と臨床応用

医学系研究科 准教授・高島成二

高齢化社会の進行とともに、いわゆる心不全の患者が急速に増加しており深刻な保健医療面の問題となっている。この研究は、心臓を特徴づける特性に注目し、その破綻がいかに疾患と結びつくかを検討する過程で発見される因子あるいは現在までに同定した因子を中心に、体の中での機能を解析し、治療戦略まで結び付けることを目的としている。本研究には、新発見を目指す研究だけでなく、すでに特許取得した物質の臨床応用を目指す研究も含まれており、我が国独自の医薬品開発に発展することが期待される。



心臓を動かす重要な構造の中心にいるATPという分子に注目

細胞のつなぎ目「ミトコリア」
ATP
収容する筋肉の繊維

たかしま・せいじ

プロフィール

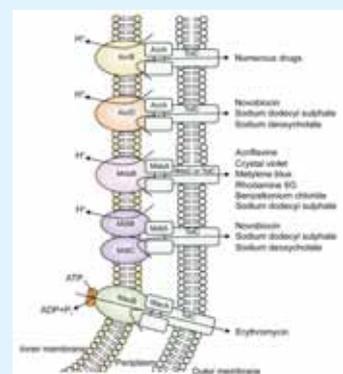
略歴：大阪大学医学研究科博士課程修了。博士（医学）、大阪大学医学部付属病院研修医、ハーバード大学医学部リサーチフェロー、大阪大学医学部研究生、大阪大学医学部付属病院循環器内科医員、大阪大学医学系研究科循環器内科非常勤講師、大阪大学健康体育部助手、大阪大学保健センター助手、同助教を経て2008年より現職。



薬剤排出ポンプによる細菌多剤耐性化・病原性発現制御機構の解明と新規治療法開発 / 産業科学研究所 准教授・西野邦彦

産業科学研究所 准教授・西野邦彦

複数の抗菌薬が効かない多剤耐性菌の出現とその感染症は、医療従事者が直面する重要な問題となっている。この研究では、細菌多剤耐性化における薬剤排出ポンプの役割を明らかにし、薬剤排出ポンプ阻害剤の効果を検証し、多剤耐性菌感染症を克服する新しい治療法確立につなげる。これまでの研究で、薬剤排出ポンプは病原性発現にも関与していることが分かっている。薬剤排出ポンプ阻害剤を検索することは、細菌の多剤耐性化を克服しつつ病原性をも軽減させる、新しい治療法の開発につながると期待される。



薬剤排出ポンプ

にしのみくにひこ

プロフィール

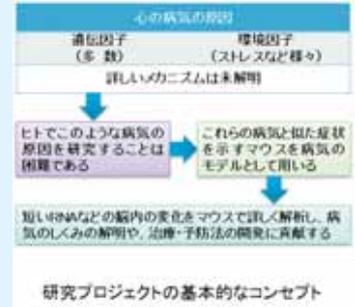
略歴：大阪大学薬学研究科博士後期課程修了。博士（薬学）、日本学術振興会特別研究員、大阪大学産業科学研究所新産業創造技術基盤研究センター特任助手、JST 戦略的創造研究推進事業さきがけ研究員（兼任）、大阪大学産業科学研究所特任助教、同助教を経て2009年より現職。

最先端・次世代研究開発支援プログラムに採択された研究者の紹介



精神疾患の成因に関わる遺伝子×環境相互作用ダイナミクスの解析系の構築
薬学研究科 教授・橋本 均

統合失調症やうつ病などの心の病気について、その発症の仕組みはまだほとんど分かっていない。この研究では、私たちが作製した遺伝子を改変したマウスなど、これらの病気と似た症状を示すものを用いて、心の病気が起こるとききの脳内の変化を調べ、心の病気のメカニズムを探る(右図)。心の病気は深刻な社会問題になっており、すぐれた診断法や薬の開発が必要とされている。このプロジェクトによって、心の病気のメカニズム研究を進め、治療だけでなく予防法の開発にも貢献したいと考えている。



はしもと・ひとし

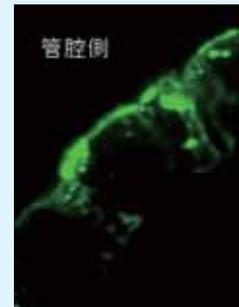
プロフィール

略歴：京都大学薬学研究科修士課程修了。大阪大学薬学研究科助手、同講師、同助教授(准教授)を経て2010年より現職。



ボツリヌス毒素複合体の体内侵入機構の解明と経粘膜ワクチンデリバリーとしての応用 / 微生物病研究所 特任准教授・藤永由佳子

ボツリヌス毒素が引き起こすボツリヌス食中毒症は、死亡率が高く、我が国では『辛子レンコン』事件などがある。またバイオテロ兵器となりうることから、欧米においてはその対策と研究が進んでいる。この研究では、まだ明らかになっていない、ボツリヌス毒素が消化管粘膜のバリアを突破して体内へ侵入する仕組みを明らかにする。さらに、この仕組みを、様々な感染症に対するワクチンを注射によらずに粘膜から体内に入れる方法に応用して、有効・安全・簡便なワクチンの開発に道を開く。



毒素複合体(16S毒素、緑色)が腸管腔側から腸管上皮バリアを通過して体内へ侵入する様子。

ふじなが・ゆかこ

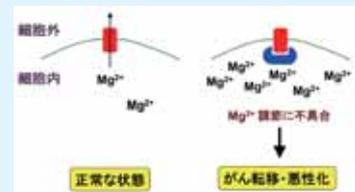
プロフィール

略歴：北海道大学薬学研究科修士課程修了。札幌医科大学医学研究科博士課程修了。岡山大学医学部助手、ハーバード大学医学部 Children's Hospitalへの留学などを経て、2005年より現職。



細胞内Mg²⁺制御の分子実体解明とがん悪性化シグナル
蛋白質研究所 教授・三木裕明

マグネシウムは必須ミネラルの一つとして広く知られながら、体内でのバランス調節の仕組みは未解明の部分が多い。この研究では、がん転移との関連で私が発見したマグネシウム制御タンパク質に関して、分子構造、細胞での機能、線虫やマウスなど生物個体レベルでの機能について解析し、マグネシウム吸収や排出の仕組みを明らかにする。がん転移におけるマグネシウム制御タンパク質の働きを解明することで、日本人の死因の第一位を占め続けているがんの転移を防ぐ薬の開発などへの貢献が期待できる。



悪性度の高いがん細胞に大量に存在し、他臓器への転移を促す働きをしている蛋白質(図中に青色で示す)が、マグネシウムイオンを細胞の外側に出す膜蛋白質(図中に赤色で示す)に結合して、その働きを止めてしまうことを発見した。このために細胞内マグネシウムイオン量をつまく調節できなくなることが、がん転移を引き起こしている可能性が想定される。また、このようなマグネシウム量調節の仕組みは、全身的なマグネシウムバランスの調節にも重要である可能性が高い。

みき・ひろあき

プロフィール

略歴：東京大学理学系研究科生物化学専攻博士課程修了。博士(理学)。東京大学医科学研究所・助手、同助教授を経て2007年より現職。

次期総長候補者の選考

5月16日(月)と6月10日(金)に鷲田清一総長の任期満了(平成23年8月25日)に伴う総長選考が行われ、平野俊夫生命機能研究科教授が総長候補者に選出されました。

5月16日の第1次意向投票では、各部局において投票が行われた後、総長選考会議において右の7名が第1次候補者として選出されました。

また、6月10日にコンベンションセンターにおいて、第1次候補者について第2次意向投票が行われ、3回目の投票で、平野教授が過半数得ました。続いて開催された総長選考会議において同人を総長候補者に決定しました。

第1次候補者(五十音順)

- 河崎 善一郎(工学研究科教授)
- 遠山 正 彌(大阪大学・金沢大学・
浜松医科大学連合小児発達学研究所長)
- 西尾 章治郎(理事・副学長)
- 馬場 章 夫(工学研究科長)
- 東島 清(理学研究科長)
- 平野 俊 夫(生命機能研究科教授)
- 鷲田 清 一(総長)

記念講義

私の商法遍歴

法学研究科教授 末 永 敏 和

一 対象の変遷：大学院での研究テーマは、「西ドイツにおける株主の解説請求権」(株主総会における株主の質問権)であり、同権利は、ドイツでは19世紀から判例や学説上、議論となり、立法化されていた。日本でも、同権利を根付けさせる必要性を感じ、ドイツ法を参考に立法論を展開した(昭和56年商法改正において同権利は「取締役等の説明義務」として明文化)。その後は、株主総会に関する他の問題についても関心が広がった。さらに、世界的に議論されていた「コーポレート・ガバナンス」論について、会社機関のあり方をドイツやアメリカの会社法を参考に議論を展開した。この議論の中で、会社をめぐる様々の利害関係者の会社法上の位置づけ、つまり「企業の社会的責任」論へと発展した。

二 理念の変遷：最初、ドイツ法の影響を受け、「法人論」と「所有権」論を中心に少数派保護の立場から会社の情報開示とそれによる経営者コントロールを考えた(「株主民主主義」)。その後、英米法の会社法理論に影響され、少数派というよりは株主(個人)を中心に据え、その観点から会社の利益、そのための経営者のコントロールを考える。究極的には、「企業の社会的責任(会社の公共性)」と「会社の利益(営利性)」は一致するはずと考えた。



すえなが・としかず

プロフィール

略歴：昭和50年3月京都大学院法学研究科博士課程中退。同年4月香川大学経済学部助手に採用となり昭和51年12月同講師、昭和54年2月同助教授、昭和55年4月岡山大学法学部助教授、昭和61年4月同教授を経て平成8年4月大阪大学法学部教授、平成16年4月大学院高等司法研究科教授、平成22年1月大学院法学研究科教授(平成22年2月大阪大学上海教育研究センター長を兼任)を歴任し平成23年3月31日退職。同年4月1日より龍谷大学法科大学院教授。平成12年～17年、司法試験審査委員(商法)、平成16年1月から弁護士法人淀屋橋・山上合同顧問、弁護士登録。平成3年11月博士(法律学)。現在までに、九州大学、長岡技術科学大学等で非常勤講師を歴任。中国では、清華大学、北京大学、復旦大学、人民大学等で講演・授業。華東政法大日本法センター特別顧問。主要業績は、『会社役員の説明義務』、『株主総会の法理論』、『コーポレート・ガバナンスと会社法』、『会社法 - 基礎と展開』等。

岸本忠三教授と平野俊夫教授「2011年(第27回)日本国際賞」受賞

2011年(第27回)日本国際賞(The Japan Prize)を、“生命科学・医学”の分野から、生命機能研究科寄附講座教授の岸本忠三博士(元総長)と生命機能研究科/医学系研究科教授の平野俊夫博士(前医学系研究科長、元生命機能研究科長)が、“情報・通信”分野からは、ベル研究所特別名誉技師のデニス・リッチー博士とグーグル社特別技師のケネス・トンプソン博士が受賞しました。

日本政府の国際社会への恩返しの意味で、日本にノーベル賞並みの世界的な賞を作ってはどうか、との構想に、松下幸之助氏が“學生(ひっせい)の志”のもとに寄付をもって応え、日本国際賞が創設されました。本賞は、全世界の科学技術者を対象とし、独創的で飛躍的な成果を挙げ、科学技術の進歩に大きく寄与し、人類の平和と繁栄に著しく貢献したと認められる者に授与されます。また、対象となる分野は、科学技術の全分野を対象とし、科学技術の動向等を助産して、毎年2つの分野を授賞対象分野として指定しています。1985年以来13カ国、74名が受賞しました。日本人の受賞は今回の2人含めて15名です。

岸本教授と平野教授は免疫に関する細胞どうしが情報を伝達する際に分泌される物質「インターロイキン6(IL-6)」を発見し、その多彩な機能を解明することによりこの分子が関節リウマチ等の免疫難病の発症に深くかかわっていることを明らかにしました。それらの成果をもとに我が国初



となる抗体医薬「トシリズマブ」を開発し、現在世界70カ国以上で関節リウマチ等の治療に使用され多くの人を病苦から救うことに貢献していることが評価され、今回の受賞につながりました。

4月20日に予定されていた日本国際賞授賞式並びに祝宴は、東日本大震災により中止となりました。また、日本国際賞週間行事(18日～23日)も全て中止となりました。なお、授賞式に代わり、4月20日、ホテルニューオータニ大阪にて、日本国際賞贈呈式が開催され、岸本教授と平野教授に、賞状、賞牌と賞金が贈られました。岸本教授と平野教授は、賞金から1000万円を、東日本大震災義援金として、日本赤十字社に寄付されました。

(医学系研究科・医学部、生命機能研究科)

大阪大学共通教育賞表彰式挙行

大学教育実践センターでは、5月19日(木)に当センター大会議室において平成22年度第2学期大阪大学共通教育賞の表彰式を行いました。

この大阪大学共通教育賞は、全学共通教育の授業を担当する本学教員及び非常勤講師を対象として、優れた授業を実践した教員、優れた教科書等を著した教員、全学共通教育の実践について優れた著述を行った教員、並びに全学共通教育の実施運営に顕著な功労のあった教員を表彰することによって、共通教育の質的向上を図ることを目的に平成14年度に制定されたもので、今回が18度目の表彰となりました。この顕彰制度が本学の教育のさらなる発展に寄与できることを願うものです。

大阪大学共通教育賞の選考は、全学の教員及び学生を対象に行ったアンケート結果に基づき、選考委員会において、教育上の多大な努力や優秀な教育技術等を総合的に評価され、今回は10名の教員が選出されました。



表彰式では、鷲田総長から表彰状と記念品の授与が行われ、小泉理事・副学長、工藤大学教育実践センター長、眞鍋副センター長、小田事務長も出席し、受賞者を祝福しました。

平成22年度第2学期 大阪大学共通教育賞受賞者及び受賞理由一覧

【受賞対象カテゴリー】

カテゴリー1：優れた授業を实践した教員 カテゴリー3：共通教育実践のための優れた著述を行った教員
 カテゴリー2：優れた教科書等を著した教員 カテゴリー4：共通教育の運営に顕著な功労のあった教員

【初受賞】

氏名	所属名	受賞カテゴリー	受賞理由
福本 能也	工学研究科 准教授	1	専門基礎教育科目「分子化学A」において、分子集合体の形状と性質、高分子の構造と性質、社会における化学等の内容を、社会で使われているような例をあげながら説明し、学生の理解を促す授業を実施した。学生から「授業がわかりやすく、板書が丁寧だった」「内容が難しい分野だったがわかりやすく丁寧だった」等の推薦を受けた。
松村 浩由	工学研究科 准教授	1	専門基礎教育科目「分子化学A」において、整理した内容の板書やプリントを用いて分子化学の内容をわかりやすく説明する授業を行った。「教科書を使わない授業だったが、ポイントが押さえられていて、わかりやすかった」「内容が理解しやすく、向上心を刺激した」等の学生推薦を受けた。
日比 孝之	情報科学研究科 教授	1	専門基礎教育科目「解析学B」において、解析学の難しい部分はプリントを配るなどの工夫を行い、演習の時間を多くとってわかりやすい授業を实践した。学生から「わかりやすかったので、勉強する意欲がわいた」「演習の時間が多くて良かった」等の推薦を受けた。
中谷 和彦	産業科学研究所 教授	1	専門基礎教育科目「基礎有機化学」において、難しい内容をわかりやすく教え、復習のプリントを配布し、毎回の小テストで内容の理解を深める授業を行った。学生からは「学生の分からないところをピックアップして、しっかり説明してもらえた」「板書がきれいにまとめられていた」「難しい内容だったが、説明が良かった」等の多数の推薦を受けた。

【再受賞】

氏名	所属名	受賞カテゴリー	受賞理由
日野 信行	言語文化研究科 教授	1	言語情報教育科目「英語(Reading)」や「専門基礎英語」において、インターネットを使い最新の英語ニュース教材を用いて、リーディングだけでなくリスニングやスピーキングなど総合的な英語力を高め、学生のモチベーションを鼓舞する授業を实践した。学生から「世界中のニュースを見るという内容の授業で、大変興味深かった」「世界情勢や最新技術のニュースを見聞きすることによって、関心のなかった新たな分野にも興味を見いだせた」等、多数の推薦を受けた。
竹蓋 順子	サイバー メディアセンター 准教授	1	言語情報教育科目「実践英語」において、充実した教材を用いて向学心を刺激し、楽しく学ぶ喜びを学生に伝える授業を实践した。学生からは、「毎回のテストで英語の理解は深まった」「3STEP方式が役立った」「内容が多かったが、かなり充実していた」等の学生推薦を受けた。
大前 智美	サイバー メディアセンター 特任准教授(常勤)	1	言語情報教育科目「ドイツ語初級II」において、CALL教室のパソコンを使い学習者のペースにあわせたわかりやすい授業を实践した。また、毎回小テストを行い、わかりやすい資料を配付して予習復習を促した。「会話や読解練習を取り入れて、楽しくドイツ語を学習することができた」「授業がわかりやすく、小テストなどで力がついた」等の学生推薦を受けた。
大久保範彦	非常勤講師	1	専門基礎教育科目「線形代数B」において、毎回詳しい配付資料を用いて質の高いわかりやすい授業を実施した。この配付資料は、学生の自主学習を促した。「授業は丁寧に進むスピードもちょうど良く、毎回のプリントが復習にとっても役立った」「とにかくわかりやすく指導してくれて、数学が好きになった」等の多くの学生推薦を受けた。
長岡 昇勇	非常勤講師	1	専門基礎教育科目「解析学B」において、学生の理解度を確認しながら細かいところまで丁寧に解説する授業を実施した。授業では復習を重視し、問題演習も詳しく解説した。「教科書や問題演習の解説がわかりやすかった」「質問にはシッカリと答えてくれて、分からない問題の解説が抜群に良かった」等の多くの学生推薦を受けた。
保田 時男	非常勤講師	1	専門基礎教育科目「統計学A-II」において、統計学の授業内容をまとめたレジュメを用意し、学生の理解を助けるように工夫した授業を行った。また、授業の最後に問題を解く・意見を述べるなどの紙を提出させて、学生が授業の内容を振り返る機会を持てるようにした。「やりがいを感じられ、わかりやすく、素晴らしい授業でした」「楽しく学べる授業だった」等の学生推薦を受けた。

(大学教育実践センター)

掛下知行教授「日本金属学会第12回学術功労賞」受賞

工学研究科マテリアル生産科学専攻の掛下知行教授が、「日本金属学会 第12回学術功労賞」を受賞しました。

この賞は、金属の研究、工業の進歩発展ならびに日本金属学会の学術事業の推進に多年に亘って貢献した研究者に授与されるものです。昨年同学会の谷川・ハリス賞を受賞した「高温を含む環境下における材料の相変態ならびにそれに伴う組織形成に及ぼす磁場効果」や功績賞（金属物性部門、平成9年）論文賞（昭和60年、平成6年、平成16年）等の研究業績に加え、金属学会本部理事、評議員、分科会委員会委員、会報編集委員会委員、欧文誌編集委員会委員、関西支部支部長、等さまざまな役職を担い、これまで多方面から同学会の運営に大きく貢献してきたことが評価されたものです。



（工学研究科・工学部）

免疫学フロンティア研究センターの審良静男拠点長がガードナー国際賞を受賞

カナダにあるガードナー財団は、2011年のガードナー国際賞（Canada Gairdner International Award）を大阪大学免疫学フロンティア研究センター（IFReC）の審良静男教授・拠点長とジュール・ホフマン教授（フランス国立科学研究センター、ストラスブール大学）他3名に授与すると発表しました。授賞式と晩餐会は10月後半にカナダのトロントで行われます

ガードナー国際賞は、ラスカー賞と並んで、医学・生命科学の分野で最も権威のある賞の一つです。基礎医学および臨床医学分野で卓越した貢献を行った個人に授与され、同賞受賞者には多くのノーベル賞受賞者が含まれていることでも知られています。

審良教授の受賞理由は「数々のトル様受容体（Toll-like receptors; TLRs）の病原体認識機能の解析から、自然免疫による動物の感染防御システムにおける画期的な発見を行ったこと」です。

さらに審良教授は、予防接種の原理のもとになっている獲得免疫に対しても、TLRsが必須であることを示しました。そこで、TLRsの活性化を制御することがワクチン開発、

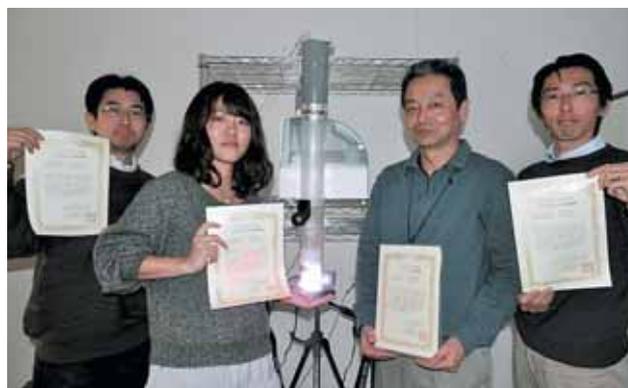


ガン治療、アレルギー、自己免疫疾患など数々の免疫疾患の治療開発に繋がると考えられ、日々研究されています。

（免疫学フロンティア研究センター）

八木明日華さん、井村誠孝准教授、黒田嘉宏助教、大城理教授 インタラクシオン2011『インタラクティブ発表賞』受賞

基礎工学部 システム科学科 生物工学コース4年（現・基礎工学研究科 機能創成専攻 生体工学領域1年）八木明日華さん、井村誠孝准教授、黒田嘉宏助教、大城理教授が3月10日（木）にインタラクシオン2011 インタラクティブ発表賞を受賞しました。インタラクティブ発表はシステムのデモを中心とした発表であり、賞は参加者による投票に基づいて授与されました。受賞の対象となった『多視点観察可能なフォグディスプレイ』は霧（フォグ）による光の散乱の指向性を利用し、ユーザの位置に応じた映像が観察可能なディスプレイであり、ユーザが霧に手を挿入することで表示物体とのインタラクシオンが可能な新しい立体ディスプレイの方向性を示すものです。



（基礎工学研究科・基礎工学部）

高田卓馬君「2010年度電子情報通信学会エレクトロニクスソサイエティ学生奨励賞」受賞

基礎工学研究科システム創成専攻電子光科学領域、博士前期課程2年の高田卓馬君が、電子情報通信学会エレクトロニクスソサイエティ学生奨励賞（第7回）を受賞しました。

本賞は、2010年電子情報通信学会ソサイエティ大会（大阪府立大学9月開催）から、エレクトロニクス分野に関する優秀な発表（一般講演、シンポジウム講演）を行った学生員に対して贈られるもので、対象となった論文は、「300GHz帯無線システムを用いた14Gbps伝送実験」です。4月11日（月）、賞状、表彰盾および賞金が贈られました。



（基礎工学研究科・基礎工学部）

加藤雄樹君「平成22年電気関係学会関西連合大会奨励賞」受賞

基礎工学研究科機能創成専攻生体工学領域の博士前期課程2年加藤雄樹君が平成23年4月15日(金)に平成22年電気関係学会関西連合大会奨励賞を受賞しました。

奨励賞は、連合大会において優秀な講演発表をした新進の研究者または技術者に贈られる賞です。受賞の対象となった「マット型生体計測システムの構築」は、マットに足を乗せるだけで心電図や脈波伝播速度などの生理情報を取得でき、日常生活における簡易な生体計測を可能にするため、予防医学への応用が期待されます。



(基礎工学研究科・基礎工学部)

島内寿徳助教「日本膜学会H23年度研究奨励賞」受賞

基礎工学研究科物質創成専攻化学工学領域の島内寿徳助教が、日本膜学会の平成23年度研究奨励賞を受賞いたしました。研究奨励賞は40歳未満の若手研究者に贈られる賞であり、日本の膜学・膜工学の次代を担う研究成果を上げている研究者に対して授与されるものです。今年度は3名に授与されました。

島内助教が受賞対象になった研究課題は、「生体膜晶析工学の創成に関する基礎工学的研究」です。リポソーム固定化技術を活用する新規なバイオセンサーにより、タンパク質の結晶化/秩序構造形成に関連する表面特性を明らかにして、これまで難しかったタンパク質の結晶化をシステムチックに展開できる基盤を整備しました。さらに、アルツハイマー病などのタンパク質の構造異常性疾患に対しても新しい視点を与えました。これらの研究成果が評価され、同賞の受賞となりました。なお、表彰式並びに記念講演は、日本膜学会第33年会(5月13日、産総研臨海副都心センター〔東京〕)において執り行われました。



(基礎工学研究科・基礎工学部)

森田 靖准教授「2010年度有機合成化学協会DIC機能性材料賞」受賞

理学研究科化学専攻の森田 靖准教授が、「2010年度有機合成化学協会DIC機能性材料賞」を受賞しました。この賞は、有機合成化学に基礎をおき、機能性材料に関連した技術・産業に寄与する独創的かつ優れた研究業績を挙げた研究者個人に授与される賞です。2008年度より開始された表彰制度であり、今回が3年目です。賛同企業の寄付を基にしていることから、賛同企業名が冠されています。

DIC株式会社（大日本インキ化学工業株式会社から2008年4月に社名変更）は、印刷インキから有機顔料、合成樹脂・有機エレクトロニクスへとファインケミカルをベースに製品を展開している我が国を代表とする化学企業です。採択研究課題は、「空気中でも安定なスピノン非局在型中性ラジカルの創成と電子機能材料への展開」です。森田 靖准教授は、空気中でも安定に取り扱うことができる“電子スピノンが分子骨格全体に広く非局在化した”有機中性ラジカルの有機合成と基礎物性の解明に長年取り組んできました。そして、従来の範疇に入らない新しい分子骨格/電子スピノン構造を有する一群の炭素中心型中性ラジカルの合成を達成し、特異な電子スピノン構造に起因した基礎物性や電子機能材料への展開にも成功しました。一連の研究にお

いて特筆すべきは、独自に開発した有機中性ラジカルの基礎研究を深化・発展させることで従来の化合物では実現が困難な機構的にも新しい電子機能材料の基礎学術を展開している点であり、有機化学の新領域を開拓しつつあります。詳細は、森田 靖准教授のホームページ（<http://www.chem.sci.osaka-u.ac.jp/lab/nakasuji/morita/index.html>）や最近の総説論文（Nature Chemistry, <http://www.nature.com/nchem/journal/v3/n3/abs/nchem.985.html>）を参照してください。

2011年2月に東京 如水会館スターホールで受賞式が開催され、福山 透 有機合成化学協会会長から賞状と副賞を授与されました。

（理学研究科・理学部）



森田 靖准教授「平成23年度長瀬研究振興賞」受賞

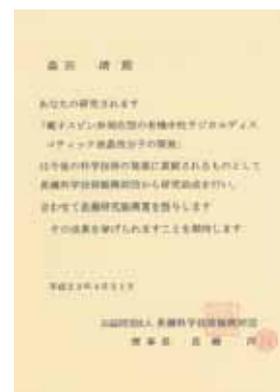
理学研究科化学専攻の森田 靖准教授が、公益財団法人長瀬科学技術振興財団（Nagase Science and Technology Foundation）から「平成23年度長瀬研究振興賞」（Nagase Foundation Award 2011）を受賞しました。また、この受賞に合わせて、研究助成金も授与されました。長瀬科学技術振興財団は、主体的に研究を進めている大学・研究所等の常勤の研究者が行う研究開発に対する助成等に関する事業を平成元年より行っており、科学技術の振興と社会経済の発展に寄与することを目的としております。受賞対象分野は、生化学及び有機化学等の分野に限定されており、世界的にも著名な多くの専門家の審査を経て受賞対象が決定されております。今回の競争率は、過去最高となる23倍でした。

受賞研究課題は、「電子スピノン非局在型の有機中性ラジカルディスコティック液晶性分子の開発」です。森田 靖准教授は、空気中でも安定に取り扱うことができる“電子スピノンが分子骨格全体に広く非局在化した”有機中性ラジカルを創成され、その有機合成と基礎物性の解明に長年取り組んできました。森田 靖准教授が設計・合成した一群の炭素中心型中性ラジカルは、従来の範疇に入らない新しい分子骨

格/電子スピノン構造を有しており、その特異な電子状態に起因した電子機能材料への展開にも成功しています。一連の研究において特筆すべきは、独自に開発した有機中性ラジカルの基礎研究を深化・発展させることで従来の化合物では実現が困難な機構的にも新しい電子機能材料の基礎学術を展開している点であり、有機化学の新領域を開拓しつつあります。詳細は、森田 靖准教授のホームページ（<http://www.chem.sci.osaka-u.ac.jp/lab/nakasuji/morita/index.html>）や最近の総説論文（Nature Chemistry, <http://www.nature.com/nchem/journal/v3/n3/abs/nchem.985.html>）を参照してください。

2011年4月に大阪科学技術センター 大ホールで受賞式が開催され、長瀬 洋 財団理事長から賞状・目録と副賞の楯を授与されました。

（理学研究科・理学部）



田中博和助教「キャリア・デベロップメント・アワード(HFSP)」受賞

理学研究科生物科学専攻（植物生長生理研究室）の田中博和助教が、ヒューマン・フロンティア・サイエンス・プログラム（HFSP）より、キャリア・デベロップメント・アワードを受賞しました。

HFSP は、1987 年のヴェネチア・サミットにおいて、中曽根首相（当時）より提唱した国際プロジェクトであり、生体を持つ精妙かつ複雑なメカニズムの解明を中心とする基礎研究を国際的に共同して推進し、その成果を広く人類全体の利益に供することを目的としています。

田中助教の研究は、高等植物の細胞の非対称性に関わる新規の因子を同定し、それらの因子の機能を解析することを通して植物細胞の非対称性の制御機構とその生物学的役割を明らかにすることを目標としています。これまでの研究により、細胞内輸送経路の阻害剤処理による蛍光タンパク質の細胞内局在変化を指標とした遺伝学的スクリーニングが、細胞内のタンパク質局在の制御因子を探索するのに非常に有効であることが分かって来ています。



このような研究成果と今後の研究計画が高く評価され今回の受賞となりました。

なお 2011 年度における同賞の受賞者一覧は、HFSP のホームページを参照してください。 <http://www.hfsp.org/>
(理学研究科・理学部)

日置彩那さん「第22回日本心エコー図学会学術集会Young Investigator 's Award最優秀賞」受賞

医学系研究科保健学専攻機能診断科学講座博士前期課程 2 年の日置彩那さん（超音波医学研究室）が、平成 23 年 4 月に開催された第 22 回日本心エコー図学会学術集会において約 300 題の発表演題の中から栄えある Young Investigator's Award 最優秀賞を受賞しました。

日本心エコー図学会は心エコー図学に携わる医師、技師、研究者を中心としたこの分野では国内最大の学会です。Young Investigator's Award は第 8 回学術集会から設立されました。当研究室からは昨年岩崎真梨子さんが優秀賞を受け、そして今年の日置さんが最優秀賞と 2 年連続で受賞したことになります。

受賞対象となった研究は「3D スペックルトラッキング法を用いた局所心筋機能の検討：壁張力ミ面積ループによる局所仕事量の評価」で、とかく視覚的興味に終始しがちな三次元心エコー法を局所心機能評価に用いた点が高く評価されたものです。日本心エコー図学会 YIA 最優秀賞受賞者は同年のアメリカ心エコー図学会に招待されることにな



左：日置彩那さん 右：中谷 敏教授

っており、日置さんも 6 月にモンリオールで開かれる同学会で成果を披露することになっています。

(医学系研究科・医学部)

平成23年度科学技術分野の文部科学大臣表彰

平成23年度科学技術分野の文部科学大臣表彰の受賞者が決定しました。この表彰は、科学技術に関する研究開発、理解増進等において顕著な成果を収めた者について、その功績を讃えることにより、科学技術に携わる者の意欲の向上を図り、もって我が国の科学技術水準の向上に寄与することを目的としています。

今回受賞されたのは、科学技術賞（研究部門）の熊ノ郷



淳教授（医）、永妻忠夫教授（基）、同賞（科学技術振興部門）の白川功名誉教授（情）、若手科学者賞の伊藤剛仁准教授（工）、高橋幸生准教授（工）、多田隈建二郎助教（工）、藤岡慎介助教（レ）、古澤力准教授（情）、三間穠治特任准教授（常勤）（蛋）、山本雅裕准教授（医）の計10名です。

東日本大震災の影響等を踏まえ文部科学省主催の表彰式が中止となったため、平成23年5月13日（金）、総長室において伝達式が行われ、表彰状及び副賞が手渡されました。

驚田清一総長からは、今後も研究に邁進するとともに、科学者として後輩のモデルになっていただきたい旨、激励の言葉がありました。

伝達式後の熊ノ郷教授のコメント：「今回の受賞を励みにさらに努力して、医学・医療に貢献していきたいと思えます。また後に続く若い世代に研究の魅力、夢を伝えていきたいと思えます。」

永妻基礎工学研究科教授、白川名誉教授については、それぞれ推薦機関から表彰状及び副賞が授与されました。

（総務企画部人事課）

科学技術賞（研究部門）

医学系研究科の熊ノ郷淳教授はこれまでに免疫に関わるセマフォリンを次々と発見しています。現在セマフォリンは種々の病気の「鍵分子」であることが明らかになり、新たな創薬ターゲットとしても注目されています。教授は昨年リンパ管（リンパ球専用の通り道）から分泌されるセマフォリンが、末梢の組織の見張り番である樹状細胞が病原体の侵入を察知してリンパ節へ移動する際のナビゲーター役を果たしていることを発見しました。自己免疫疾患、炎症疾患、がんの転移などは、いずれも細胞が病巣に移動することによって引き起こされます。同氏の発見により、「細胞の動き」を標的とした新しい治療法・薬剤開発に繋がると期待されています。



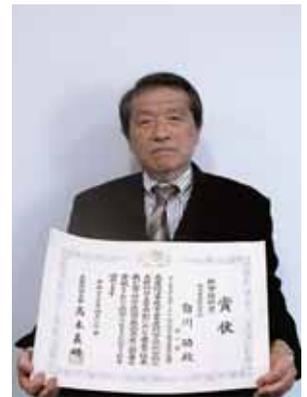
科学技術賞（研究部門）

基礎工学研究科の永妻忠夫教授が、「光技術によるサブテラヘルツ波発生と無線通信応用の研究」で科学技術賞（研究部門）を受賞しました。100GHz～1THzの周波数の電波（サブテラヘルツ波）はこれまで安定に発生することが難しいとされていましたが、永妻教授は、光技術を利用することによりそれを解決し、さらに世界で初めて100GHzを超えるキャリア周波数の無線通信システムに適用して10Gbit/sを超える通信速度を達成し、これまでの無線の通信速度の記録を塗り変えました。この成果は、高精細映像、立体映像を扱う放送、エンタテインメント、医療分野に寄与するだけでなく、超大容量データの流通が日常になりつつある私たちの仕事や生活空間においてその利用が期待されています。



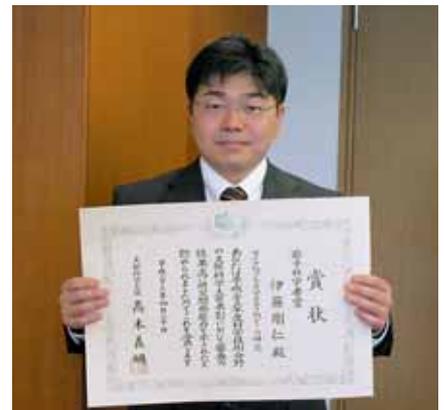
科学技術賞（科学技術振興部門）

白川功本学名誉教授（筆頭受賞者、元情報科学研究科教授、現兵庫県立大学教授）が、江崎浩氏（東京大学教授）と共に科学技術賞（科学技術振興部門）を受賞しました。業績は「データセンターのグリーンIT化に係わる科学技術の振興」です。白川・江崎両教授は、日本データセンター協会理事長・運営委員長として、データセンター関連の機器・施設・サービス事業社や管理・運営事業社を総合的・横断的に連携し、データセンター評価の標準規格の策定、グリーン化指標の導入、データセンター管理運営を担う人材育成、環境IT立国推進のための政策提言等の活動を通じて、我が国のグリーンIT化にかかわる科学技術の振興に寄与したことが評価されました。



若手科学者賞

工学研究科の伊藤剛仁准教授が、「マイクロプラズマテクノロジーの研究」の業績により、若手科学者賞を受賞しました。伊藤准教授は、低圧気体から高圧気体、超臨界流体雰囲気まで、必要なところに必要なだけ高反応性プラズマ雰囲気を供給するマイクロプラズマテクノロジーの創生に取り組み、従来の気体プラズマテクノロジーからの転換を導く超臨界流体プラズマテクノロジーの開拓、生体物質の結晶化促進、大気開放雰囲気での初のレーザー電界測定、陰極照射の中性粒子エネルギー分布の直接測定による従来までの知見を覆す画期的成果等、多くの研究成果をもたらしてきました。これらの研究成果は、プラズマ応用の新規創出や、継続的・革新的発展に結びつく成果として評価されました。



工学研究科の高橋幸生准教授が、「コヒーレント×線散乱イメージング技術の開発と応用の研究」の業績により、若手科学者賞を受賞しました。本技術は、コヒーレント×線散乱と位相回復計算を組み合わせたレンズレスイメージング法であり、マイクロメートルサイズの試料をナノメートルスケールの空間分解能で三次元観察可能な顕微鏡技術として注目されています。高橋准教授は、本顕微鏡法を物質の高分解能三次元電子密度マッピング法として確立し、析出強化合金、ヒト染色体、金属ナノ粒子のナノ組織解析に応用したことが高く評価されました。本技術は、次世代光源×線自由電子レーザーを用いることで、結晶化困難な膜タンパク質の構造解析に応用が可能であり、創薬開発のスピードアップと効率化に繋がると期待されています。



工学研究科の多田隼建二郎助教が、「革新的全方向移動ロボット機構の研究」での業績が評価され、若手科学者賞を受賞しました。従来の全方向移動機構では、段差・溝などの走破性が低かったのに対し、多田隼建二郎助教は機構全体の球体形状化に着目し、駆動機構全体のサイズを保ちながらも、受動車輪の直径を相対的に大きくすることで、単純な構造ながらも著しく高い走破性を有する全方向移動機構を実現しました。さらには、上記の原理を車輪機構のみならず、クローラ機構への概念にも拡張したことが高く評価されました。

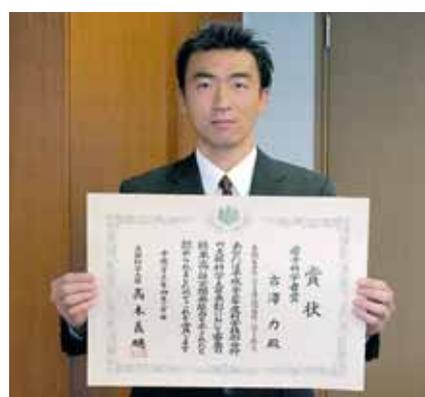
今後は、病院や工場内での全方向搬送車などへの実用化、学術的には把持対象物を全方向駆動させるハンド機構への発展が期待されます。



レーザーエネルギー学研究中心の藤岡慎介助教が「レーザー生成高輝度X線源の幅広い分野における応用研究」の業績により若手科学者賞を受賞しました。本研究成果は、高出力レーザーを利用した新産業、エネルギー開発、基礎科学の発展の基礎になると期待されています。対象となった5編の主要論文のうち3編は激光XII号レーザー装置で得られた成果です。大型レーザー装置の運転・維持、ターゲットの製作・組立、プラズマ計測及び実験遂行に関わられた全ての方々に改めて感謝の意を表すると共に、今後は世界一の強度を誇るLFEXレーザー装置で顕著な成果を一刻も早くあげることを目指し精進を続けていきたいと意気込んでいます。



情報科学研究科の古澤力准教授が、「生物システムにおける普遍的性質に関する研究」により、平成23年度文部科学大臣賞若手科学者賞を受賞しました。古澤准教授は、計算機シミュレーションと実験データ解析の双方を有機的に結合させることにより、生物システムが持つ柔軟性、安定性、進化可能性といった性質を生物システムが有する普遍的な性質として抽出し、その出現機構に関する解析を行いました。その結果、多細胞生物における発生過程の安定性や生物の揺らぎに基づく柔軟な環境適応などについて、新たなメカニズムの提案とその検証に成功しました。この研究成果は、生物システムを理解するにとどまらず、生物システムを用いた物質生産にも応用が可能であり、今後の発展が大いに期待されるものとして評価されました。



蛋白質研究所の三間穰治特任准教授（常勤）が、「細胞内オルガネラ膜融合の試験管内完全再構成の研究」の業績により、若手科学者賞を受賞しました。

オルガネラ膜動態の主要反応である膜融合に焦点を当て、その動作原理の解明を目指しました。従来の細胞や単離オルガネラを用いる手法ではなく、純化した蛋白質と脂質から成る試験管内完全再構成系を駆使し、生理的脂質組成の重要性など、これまでの定説「SNARE仮説」にはない新たな概念を生み出しました。

本研究成果は、試験管内完全再構成系が生命科学研究の新機軸として有用であることを実証し、他の重要な生命現象に対しても、原理解明への起爆剤として貢献すると期待されます。



医学系研究科の山本雅裕准教授が、若手科学者賞を受賞しました。対象となったのは、「自然免疫系のシグナル伝達機構の研究」で、自然免疫系に重要なToll様受容体の細胞内シグナル伝達機構に関するアダプター分子群、核内分子やユビキチン関連分子の生理的役割を遺伝子欠損マウスの作製と解析によって解明し、さらに病原性微生物であるトキソプラズマ原虫のエフェクター分子による宿主自然免疫系の抑制機構を明らかにした点が評価されました。

この研究成果は、学術的には「病原性微生物-宿主の相互作用解析」の新たなプラットフォームを提供し、社会的には自然免疫系に関与する宿主因子を標的とした新たな抗原虫治療薬の開発につながることを期待されています。



新教授紹介

谷 崎 久 志 (たにざき ひさし)

大学院経済学研究科



【略歴】

- 昭60. 3 関西学院大学経済学部 卒業
- 62. 3 神戸大学大学院経済学研究科博士課程前期課程修了
- 平 3.12 米国ペンシルバニア大学大学院経済学研究科修了
- 3.12 Ph.D. (経済学) (ペンシルバニア大学)
- 3.12 米国ペンシルバニア大学経済学部研究員
- 4. 4 神戸学院大学講師経済学部
- 6. 4 神戸学院大学助教授経済学部
- 7. 4 神戸大学助教授経済学部
- 12. 4 神戸大学助教授大学院経済学研究科
- 15. 4 神戸大学教授大学院経済学研究科

所 属：大学院経済学研究科政策専攻応用経済講座

専門分野：計量経済学・統計学

塚 原 聡 (つかはら さとし)

大学院理学研究科



【略歴】

- 昭61. 3 東北大学理学部化学第二学科卒業
- 63. 3 東北大学大学院理学研究科化学専攻博士前期課程修了
- 63. 8 東北大学大学院理学研究科化学専攻博士後期課程退学
- 63. 9 東北大学助手理学部
- 平 5. 1 理学博士 (東北大学)
- 7. 4 東北大学助手大学院理学研究科
- 7. 8 大阪大学助手理学部
- 8. 4 大阪大学助手大学院理学研究科
- 15. 4 大阪大学講師大学院理学研究科
- 15. 7 広島大学助教授大学院理学研究科
- 19. 4 広島大学准教授大学院理学研究科
- 23. 4 大阪大学教授大学院理学研究科

所 属：大学院理学研究科化学専攻無機化学講座

専門分野：分析化学、界面・コロイド化学

花 咲 徳 亮 (はなさき のりあき)

大学院理学研究科



【略歴】

- 平 4. 3 大阪大学理学部物理学科卒業
- 6. 3 東京大学大学院理学系研究科相関理化学専攻修士課程修了
- 9. 3 東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻博士課程修了
- 9. 4 東京大学助手物性研究所
- 15. 7 東京大学専任講師大学院工学系研究科
- 18. 4 岡山大学助教授大学院自然科学研究科
- 19. 4 岡山大学准教授大学院自然科学研究科
- 23. 4 大阪大学教授大学院理学研究科

所 属：大学院理学研究科物理学専攻物性物理学講座

専門分野：固体物理学

新教授紹介

赤井伸郎 (あかい のぶお)

大学院国際公共政策研究科



所 属：大学院国際公共政策研究科比較公共政策専攻現代日本法経システム講座
 専門分野：公共経済学

【略歴】

- 平 3. 3 大阪大学経済学部経済学科卒業
- 5. 3 大阪大学大学院経済学研究科公共経済学専攻前期課程修了
- 6. 5 大阪大学大学院経済学研究科公共経済学専攻後期課程退学
- 6. 6 大阪大学経済学部寄付講座教員
- 7. 4 神戸商科大学助手
- 9. 4 神戸商科大学講師
- 10. 6 博士(経済学)(大阪大学)
- 11. 4 神戸商科大学助教授
- 16. 4 兵庫県立大学助教授
- 19. 4 大阪大学准教授大学院国際公共政策研究科
- 23. 5 大阪大学教授大学院国際公共政策研究科

坂口志文 (さかくち しもん)

免疫学フロンティア研究センター



所 属：免疫学フロンティア研究センター実験免疫学
 専門分野：免疫学(免疫寛容の導入・維持機構)

【略歴】

- 昭51. 3 京都大学医学部医学科卒業
- 51. 4 京都大学大学院医学研究科
- 55. 9 Johns Hopkins大学客員研究員
- 62. 7 Stanford大学客員研究員
- 平成 7. Scripps研究所免疫学部助教授
- 4.10 新技術事業団「さきがけ21研究」研究員
- 7. 4 東京都老人総合研究所免疫病理部門部門長
- 11. 2 京都大学再生医科学研究所教授
- 19.10 京都大学再生医科学研究所所長
- 23. 4 大阪大学免疫学フロンティア研究センター教授

大西好宣 (おおにし よしのぶ)

インターナショナルカレッジ



所 属：インターナショナルカレッジ
 専門分野：高等教育学、国際協力(教育開発)

【略歴】

- 昭61. 3 慶応義塾大学経済学部卒業
- 61. 4 日本放送協会(NHK)営業部職員
- 平 6. 5 米コロンビア大学国際公共問題大学院修士課程修了
- 6. 9 笹川平和財団プログラムオフィサー(主任研究員)
- 15. 7 国際連合大学プログラムオフィサー(学術研究官)
- 16.10 タイ・チュラロンコン大学高等教育大学院博士課程修了(Ph.D.)
- 23. 3 ハワイ東西センター客員研究員
- 23. 4 大阪大学インターナショナルカレッジ教授・副カレッジ長

「節電なう。」ワニ博士からのお知らせ

天気予報によると、今年の夏も暑くなるようです。

2011年は、東日本大震災の影響による全国的な電力供給事情から、例年にも増して『省エネ』『節電』への積極的な取組が求められています。特に今年重要になってくるのが、夏場の電力使用ピーク時の対策です。

ただ、『さあ、省エネだ。節電だ。』と言われて頭では分かっている、暑いものは暑いし、なんとか涼しく過ごしたいのがホンネだと思います。ここはちょっと“ポジティブ”に頭を切り替えて、楽しく節電しませんか？

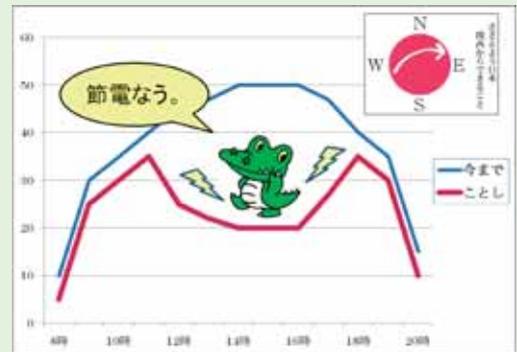
例えば、ショッピングモールに行くと、すでに色々なクールビズ商品がズラッと並んでいます。ただネクタイを外すだけではなく、『ちょっとオシャレ』に目を向けると毎日が楽しくなりますよね。

他にも、『電気代』に目を向けて節電に取り組むと、『パソコンのディスプレイ輝度を40%にすると100%時より毎月40円節約できる』とか、『暖房便座や温水シャワーのOFFで1ヶ月500円節約できる』など、節電行為の1つ1つがお金に見えてわかりやすくなったりします。小さなことでもみんなで毎日続けると大きな効果につながります。

大阪大学でも、電力可視化システムの導入によって効果を見える化するなど、新しい取り組みが始まっています。

さあ、みなさんも、やって楽しい、みんながうれしい、そんな節電始めませんか？

(環境・エネルギー管理部)



天神祭船渡御『阪大船』

船渡御は、日本三大祭の一つである大阪天神祭のクライマックスを彩り、意匠を競った百隻余りの船が大川を行き交います。

大阪大学では、第7回目となる『阪大船』の勇姿を大川の川面に浮べ、訪れる人たち、市民の皆様方に広くアピールします。

ご乗船いただく教職員、学生、同窓生等の阪大ファミリーの皆様方には、大阪の夏の風物詩を心ゆくまでお楽しみいただきたいと思います。

日 時：平成23年7月25日(月) 午後6時～午後9時頃
(集合時間 午後5時30分)

乗 船 料：お一人 30,000円
ご家族でお申し込みの場合、お一人目30,000円、お二人目から20,000円となります。
振込手数料別
飲食代(お弁当・ビール)込み
簡易トイレ有り

定 員：170名



昨年の様子

(広報・社会学連携オフィス広報・社会学連携事務局)

問合せ先

大阪大学天神祭実行委員会
(大阪大学広報・社会学連携オフィス広報・社会学連携事務室内)
〒565-0871 吹田市山田丘1-1
TEL 06-6879-7151 FAX 06-6879-7156
メール ki-kousyagaku-renkei@office.osaka-u.ac.jp

大阪大学基礎工学部 第33回公開講座
「未来を拓く先端科学技術」

公開講座の目的

私たちの生活は科学技術によって支えられており、その進歩と密接な関係をもっています。特に日常生活に直接関係する機器や物質の目覚ましい発展と普及、情報技術の急速な進歩とそれにより得られる膨大な情報、生命の謎の解明と先端医療技術、これらに囲まれた私たちの日常生活を安全で豊かなものにするには、それにふさわしい教育と知識を備えることが必要です。このような環境の中、若い人たちから家庭の主婦ならびに学校教育を離れて久しい中高年の方々にいたる広い範囲で、科学的教養を積む機会を得たいと望む声が高まっています。大阪大学基礎工学部ではこのような声に応えるべく、また、大学と地域社会との連帯を強めるとともに本学部の情報発信の一環として、1979年以來32回にわたり近隣の方々に對して公開講座を開催してきました。

本年度は基礎工学部創立50周年にあたります。そこで、第33回の公開講座を開催するに当たり、私たちの暮らしや社会と密接な関係をもち、明るい未来を拓く最先端の科学技術の成果とその意義を、50周年を記念して改装された新しい会場にて多くの方々に紹介したいとの願いで、今回の企画を行いました。

期 間：平成23年8月3日(水)～5日(金)
会 場：大阪大学基礎工学国際棟(シグマホール)
受講料：無料

8月3日(水)

- 10:20～ 開講式
- 10:30～11:40 最先端の流体機械 - ロケット用ターボポンプと血液ポンプ -
機能デザイン領域 推進工学講座 准教授 堀口 祐憲
- 13:00～14:10 ダウンサイドリスク、アップサイドチャンス - 数理ファイナンスと確率論の接点の話題から -
社会システム数理領域 数理計量ファイナンス講座 教授 関根 順
- 14:30～15:40 バイオマスは未来のエネルギー源になるか - 分散・再生可能エネルギーの課題と可能性 -
生体工学領域 生物工学講座 教授 三宅 淳
- 15:55～16:55 見学コース1 岡野 泰則 教授 見学コース2 堀口 祐憲 准教授

8月4日(木)

- 10:30～11:40 生物に学ぶ新しい情報ネットワーク技術
情報科学研究科 先進ネットワークアーキテクチャ講座 准教授 若宮 直紀
- 13:00～14:10 小さな磁石の不思議な世界
物性物理工学領域 電子相関物理講座 教授 鈴木 義茂
- 14:30～15:40 より人間らしいロボットを造る
システム科学領域 知能システム構成論講座 教授 石黒 浩
- 15:55～16:55 見学コース3 石黒 浩 教授 見学コース4 鈴木 義茂 教授
見学コース5 倉岡 功 准教授

8月6日(金)

- 10:30～11:40 宇宙での流れ、伝熱、物質移動
化学工学領域 環境・エネルギーシステム講座 教授 岡野 泰則
- 13:00～14:10 環境と健康の化学 - DNAは傷つき、そして癒される。 -
機能物質化学領域 機能化学講座 准教授 倉岡 功
- 14:30～15:40 超伝導の魅力とその応用
電子光科学領域 量子機能エレクトロニクス講座 教授 糸崎 秀夫
- 15:40～ 閉講式

受付開始：平成23年7月1日(金)から

問い合わせ先：大阪大学基礎工学研究科庶務係

〒560-8531 豊中市待兼山町1-3 TEL:06(6850)6131 FAX:06(6850)6151

E-mail: ki-syomu@office.osaka-u.ac.jp URL: http://www.es.osaka-u.ac.jp

(基礎工学研究科・基礎工学部)

公開講座「教員のための英語リフレッシュ講座」開催

日程：平成23年8月8日(月) 9日(火) 10日(水) 11日(木) 12日(金)
 会場：大阪大学中之島センター (http://www.onc.osaka-u.ac.jp 地図掲載) (所在地 大阪市北区中之島4-3-53)
 主催：大阪大学大学院言語文化研究科 http://www.lang.osaka-u.ac.jp/lc/
 後援：大阪府教育委員会・兵庫県教育委員会

平成23年度の大学院言語文化研究科主催の公開講座が大阪大学中之島センターにおいて開催されます。本講座は10回目を迎え、例年、中・高の英語教員のほか小学校、大学の教員、大学院生など、英語教育に関心を持つ多くの方が、近畿圏だけではなく全国各地からも参加します。自治体教育委員会の教員研修や免許状更新講習のほか、類似の公開講座がかなり増えているにも関わらず、(パンフレット、研究科HP、『英語教育』などの雑誌や新聞のほかによる広報に加え、これまでの受講者が同僚や知人の先生に薦めることもあり)講義内容の充実が高く評価されて受講希望者が多く、最近では定員を85名に制限してきましたが、今年度は定員を100名に拡大することとしました。

日本の教育改革が無定見に揺れる中、学校の現場においては、教員の研修や態勢が整わない段階で小学校に英語が導入され、高校では「授業は英語で」行うのを基本とするという新学習指導要領の方針にどう対処するかという難題も抱え、戸惑いと混乱が広がっています。本講座では、(理論的な根拠もなく英語教育の失敗の元凶とされた)「文法と訳読」が(適切に指導すれば)「外国語学習環境での英語力の基盤育成」に不可欠であるとの認識の下に、学校教育にも応用可能な現代の文法・語法・辞書研究の成果を紹介するほか、関連研究領域(言語習得論や学習動機・方略研究、脳機能研究など)の最近の理論的な知見を踏まえ、英語力を着実に伸ばし運用能力の育成にもつながる授業のあり方を(ネットやCALLの活用を含め)総合的に考察するだけでなく、小学校英語にいかに対応するかについても実践例を踏まえ論じます。教員それぞれの造詣・技量を適切に活かし、生徒も理解・納得できる魅力的で効果的な教育の実践を期するものです。また最新の音声学的知見(発音生理のMRI動画)を踏まえ「発音の動的な変化の仕組み」「音読の技法」を分かりやすく解説・訓練するとともに、「ネイティブスピーカーによる体験授業」を通じて英語運用力の向上を図るほか、詩や小説、演劇を含む文学作品の意味・語用・文体論的分析も行ない、教員の知的欲求にトータルに応えるような多彩な講義を提供します。全体討論では、今年から正式に始まる「小学校英語」や「授業は英語で」、「社内英語化」など英語教育を巡る旬なテーマを討議し、講師陣が受講者の抱える疑問・質問に専門的知見を踏まえてお答えします。

講師および演題

8月8日(月)	
10:00 ~ 12:30	「日本人に相応しい英語教育 - 言語習得研究を踏まえて」(最初に講座オリエンテーション) 成田一教授
13:10 ~ 15:00	「英語らしい発音の科学 - ダイナミックメカニズムと発音・聴解の秘儀」 成田一教授
15:10 ~ 17:00	「生徒の英語力を伸ばす音読指導 - 留意点と技法」 (京都外国語大学) 鈴木寿一教授
8月9日(火)	
10:00 ~ 12:00	「ICTを活用した新しい英語教育」 (大阪教育大学) 吉田晴世教授
12:50 ~ 14:50	「コーパスと英語辞書と語彙指導」 (京都外国語大学) 赤野一郎教授
*15:00 ~ 17:00	「小学校英語活動の実践をどう中学につなぐか」 (立命館小学校) 田縁真弓先生
*15:00 ~ 17:00	「和英・英和翻訳 - 認識の改变」 アンドリュー・村上スミス准教授
8月10日(水)	
10:00 ~ 12:00	「「国際英語」教育の理論と授業実践」 日野信行教授
*12:50 ~ 14:20	「教室で役立つ英語の歴史」 渡辺秀樹教授
*12:50 ~ 14:20	「英語リーディング方略の学習」 (関西大学・大学院) 池田真生子准教授
*14:30 ~ 17:00	「コミュニケーション基礎」 アンドリュー・ロス特任准教授
*14:30 ~ 17:00	「コミュニケーション中級」 デイミアン・リヴァース特任准教授
*14:30 ~ 17:00	「コミュニケーション上級」 アンドリュー・村上スミス准教授 ジェリー・ヨコタ教授
8月11日(木)	
10:00 ~ 12:00	「大学英文法の内容と指導法」 岡田伸夫教授
12:50 ~ 14:50	「認知的視点から見た英文法」 早瀬尚子准教授
15:00 ~ 17:00	「英語の語感を磨く」 (関西学院大学大学院) 八木克正教授
8月12日(木)	
10:00 ~ 11:00	「シェークスピアのことばと演出」 山田雄三准教授
11:00 ~ 12:00	「アメリカ現代小説の翻訳」 木原善彦准教授
12:40 ~ 13:40	「オセアニアの先住民 / 移民文学と文化」 小杉世准教授
13:40 ~ 14:30	「英文を読む楽しみ」 沖田知子教授
14:40 ~ 15:50	「英語教育の軌跡；社内英語化の愚」(全体討論トピック) (和歌山大学) 江利川春雄教授 / 成田一教授
15:50 ~ 16:50	全体討論「運用英語へ偏向した教育の危機」 講師陣
16:55 ~ 17:15	講座修了証授与式 大学院言語文化研究科長 木村茂雄教授
17:30 ~ 19:00	テーマ討論懇親会(講師陣のミニスピーチと意見交換)

* 8月9日(火)の「小学校英語活動の実践をどう中学につなぐか」と「和英・英和翻訳 - 認識の改变」、10日(水)の「教室で役立つ英語の歴史」と「英語リーディング方略の学習」、「コミュニケーション基礎・中級・上級」は選択です。申し込み時に選んでください。

会場では8日(月)に本講座の講師陣が執筆の『英語リフレッシュ講座』(大阪大学出版会)を著者割引1,900円で頒布いたします

定員100名(先着順；定員に達した時点で大阪大学大学院言語文化研究科HPに掲載します。)

教材作成・連絡郵送費 7,500円 参加申込み(受付期間 7月1日(木)~7月15日(木)期限厳守)

問い合わせ：大阪大学言語文化研究科総務係 (E-mail: genbun-soumu@office.osaka-u.ac.jp、TEL:06-6850-5855)

INTERVIEW

よしかわ だい き

吉川 大樹

マイ和太鼓持ってます！

学生部入試課入試第一係



吉川さんは、中学生の時から和太鼓の演奏を続けています。和太鼓の魅力、楽しみ方などを語っていただきました。

和太鼓の魅力



学生時代から、自身の大学のオープンキャンパスの手伝いに参加するなど、大学の仕事に関心が高かった吉川さんは、現在、入試課で主に帰国子女や私費留学生の特別入試などの業務を担当している。そんな吉川さんが続ける【和太鼓】の魅力について聞いてみた。「幅広い世代の人に喜んでもらえることが魅力ですね。また、和太鼓の迫力ある『音』も魅力的で、演奏がシンクロしたときの気持ちよさは格別ですね。特に鼓動で鼓膜がビリビリする感じがとても気持ちいいです。」

さらに、和太鼓は姿勢・振る舞いがとても重要で、「ぜひその迫力・美しさを直接感じてほしい」と聴くだけでは得られない、観て楽しむ和太鼓の楽しみ方について語ってくれた。

出会い～地元での活動

和太鼓との出会いは中学生のときに遡る。所属していた生徒会で、文化祭の出し物として和太鼓を演奏したのが最初の出会いであった。そのとき、指導してくれたのは地元の近江に伝わる『むかで退治』の伝説を和太鼓で表現する「近江むかで太鼓保存会」の方々であった。「初めて和太鼓に出会い、鼓動に感動したことが忘れられず、高校に入学してから保存会に所属しました。保存会では、地元のイベントや結婚式での公演にも出演していました。」また、活動を重ねるうちに伝統芸能である和太鼓が地域と強くつながっていると感じたとも語ってくれた。

転機～阪大就職を機に再開

地元を離れて大学に通っていたこともあり、活動がペー

スダウンしていたが、大阪大学に就職して北摂に住むことになり、大阪の太鼓事情を調べている中で豊中の和太鼓グループ「八鼓（やっこ）」と出会った。和太鼓の音、鼓動、演奏の躍動感に心揺さぶられ、再び和太鼓にチャレンジする気持ちが芽生えた。

八鼓は、オリジナルの曲を持ち、和太鼓を音楽のように奏でる創作和太鼓グループで、演奏レベル高さや自分に近い世代が活躍していたことに魅力を感じた。練習は豊中市内の中学校で日曜日に実施している。メンバーは男女問わず小学生～大人までの幅広い年代が参加している。

夏場は公演が多いため、土曜日に練習することもある。まさに今がシーズンということになる。多忙な練習をこなしながら、「高校生や大学生は上達が早いのがんばって追いつきたいですね」と語る。

大きな舞台として、「豊中和太鼓まつり」がある。昨年は裏方としての参加であったが、今年（6月5日（日）開催）は締太鼓の他、長胴太鼓、かつぎ桶太鼓（マイ和太鼓）で見事出演を果たした。



和太鼓を通して

和太鼓の活動を通して、吉川さんが感じた成長や今後の目標を聞いてみた。「幅広い世代と一緒に活動を続けてきたことで、色々な世代の人との接し方も自然と身についた気がします。」和太鼓を通じて幅広い年齢の人と接してきた経験が、業務で接する、受験生、保護者、先生といったそれぞれ違う目線を持つ方々への対応に活かしている。

「今練習中の曲のほかに、新曲に挑戦してみたいですね。そして、これからも長く続けていきたいです。和太鼓に興味をお持ちの方はぜひ、ご連絡下さい。」

活躍する卒業生へインタビュー

古事記のタイ語バージョンを出版したスワンラダーさん

大阪大学バンコク教育研究センター長
関 達 治

タイから大阪大学への留学生は、2011年5月1日現在で99名を数えます。タイは、中国、韓国について3番目に多い留学生の派遣国で、本学を卒業したタイの元留学生は、大学の教職から一般企業の重職に至るまで数多くの分野で活躍をしています。去る2月9日の読売新聞アジア版に本学文学研究科大学院卒業でチュラロンコーン大学文学部東洋言語学科日本語講座助教授のアッタヤ・スワンラダーさんの「タイ語版古事記」記事が大きく報道されました。今回は、アッタヤさんに、古事記の翻訳出版や阪大での勉強についてインタビューをしてみました。

(関) こんにちは。古事記の翻訳出版をされたと云うことをお伺いしました。アッタヤ先生は、伝統のあるチュラロンコーン大学で日本語を勉強され、大阪大学の文学研究科へ進学されて博士号(文学)を取得されています。早速ですが、日本語に興味を持たれたのはいつごろからで、動機はどのようなものでしたか。

(アッタヤ) 子供の時から日本のアニメなどが好きで日本語を勉強しようと思いました。一旦歯学部に入りましたが、やっぱり日本語と思って入学試験を受け直してチュラロンコーン大学の文学部に入り、日本語を本格的に勉強しました。

(関) 最初に読んだ漫画はなんですか。

(アッタヤ) ドラえもんです。小学校4年生の時です。大変ユーモアがありますね。

(関) なぜ大阪大学で勉強しようと思われたのですか。

(アッタヤ) 日本のもっとも有名な大学は東京大学、京都大学、大阪大学でしょう。でも、東京のような大きな街には行きたくはありませんでした。そこで、京大と阪大に手紙を書いて受入れをお願いしましたが、阪大から先にお返事をいただいたので阪大を選びました。すぐ後に京大からもお返事をいただきましたが、阪大で勉強して良かったと思っています。阪大では伊井春樹先生に大変お世話になりました。また、先輩にも大変お世話になり感謝しています

(関) 私は理系で古文は高校の時から苦手でした。先生はタイにおられて日本の古代と中世文学に興味をもたれたわけですが、その動機は何だったのでしょうか。また先生は博士論文の対象として「源氏物語における出家」というテーマを選ばれていますが、どのような理由でこのテーマを設定されたのですか。



アッタヤ・スワンラダー先生
チュラロンコーン大学文学部の建物から
バンコク市内を望んで

(アッタヤ) 大学3年生の時に源氏物語の講義を受けました。丁度、日本政府の奨学金を申請する時でしたので、日本留学で源氏物語の研究をしたいと書きました。それが、その後の研究の方向を決めました。

(関) なぜ源氏物語が好きなのですか。

(アッタヤ) ラブストーリーだからです。でも、源氏は好きではありませんがね。プレーボーイだから(笑)。でもストーリーは面白いです。特に貴族の社会の男女の関係のことに興味がありました。また、タイは仏教国ですので仏教に興味を持っていました。タイでは徳を積むため、また父母に感謝して幸せをもたらすために出家するのですが、源氏物語の登場人物では男女関係から逃れるために出家すると、病気を治すためとかで、出家の動機の違いに興味を持ったからです。

(関) その後、土佐日記や竹取物語なども研究対象とされてきましたが、今回の古事記のタイ語翻訳に至った理由はどのようなものですか。

(アッタヤ) 日本文学史を教えているのですが、学生に日本の物語を紹介し、読ませる必要があったので、翻訳をして教科書としました。竹取物語は一番古い物語ものなのでタイの学生に紹介したいと思いました。今回の古事記も一番古い歴史書なので翻訳をして、タイの学生に紹介したい



竹取物語の表紙

と思いました。

(関) 今回は古事記の第1巻を翻訳され、「日本神話を学ぶ - 古事記より」を出版されたのですが、そのご苦労をお教えてください。

(アッタヤ) タイでは日本の神話は殆ど知られていませんので、ただ翻訳をしてもタイの人たちは理解できません。その時の社会や文化の背景も説明する必要がありましたので、写真などの資料もそろえるなど、非常に時間がかかり大変でした。

(関) ここに本をいただいておりますが、出版社は何処ですか。

(アッタヤ) チュラ大の出版社からです。

(関) 是非、阪大の図書館に置きたいですね。さて、今後の抱負をお聞かせくださいませ。

(アッタヤ) いま、百人一首の翻訳をしています。来年の3月ごろに出版できればと思っています。特に和歌の雰囲気や韻の問題がありますので難しいです。今後、奈良時代から江戸時代まで日本の文学の紹介を更に進めたいと思います。

(関) 話は変わりますが、タイの日本語の勉強熱が高いですがそれはなぜでしょうか。

(アッタヤ) それは漫画の人気もあるでしょうが、日本企業への就職が人気と云うこともあるでしょう。日本企業の給与が高いと云うこともありますし。

(関) それでは最後になりますが、大阪大学に希望すること、タイ人学生へのメッセージはありますか。

(アッタヤ) セミナーなども含めて教員や学生の交流を進めるようご支援をいただきたいと思います。最近、4人学生を日本に派遣しましたが、さらに盛んな交流が進むよう希望しています。私は大阪大学では良い思い出ばかりです。大阪大学は良いところです。タイ人の学生さんは、大阪大学で勉強していることに誇りを持ってください。

(関) 今日は、お忙しいところ、ありがとうございました。先生は2児の母親の役割をこなしながら、タイのオープン大学で経営学やタイ文学など勉強を続けられますが、研究の益々のご発展を祈っています。

(アッタヤ) ありがとうございます。今後ともよろしくお願いたします。



タイ語に翻訳された古事記表紙

QS Asian Universities ranking が発表される

QS アジア大学ランキングが、5月23日に発表されました。世界ランキングとは評価項目のウエイトが異なっていますが、香港科技大學、香港大学、シンガポール大学が上位3位を占めています。日本の大学は57校が上位200に入っており、大阪大学は、東京大学(4位)、京都大学(7位)について8位です。バンコクセンターのあるタイでのトップはマヒドン大学の34位でした。中国の大学は上位10位に入っていません。さて、本学と大学間学術交流協定を締結しているアジアの大学のランキング結果を右に示してみました。どの協定締結相手大学も本学にふさわしく、各々の国でトップクラスの大学が殆どです。一つの尺度として本学の協定校をこの一面から見てみるのも面白いのではないのでしょうか。

本学との大学間学術交流協定大学のQSアジアランキング

国名	大学名 ^{注1} (アジア順位 / 当該国内順位)
中国	北京(13/1)、清華(16/2)、復旦(21/3)、浙江(27/5)、南京(29/6)、上海交通(33/7)、北京師範(64/8)、同済(67/9)、西安交通(72/10)、武漢(111/17)
韓国	ソウル国立(6/1)、延世(18/4)、漢陽(44/8)、釜山(66/12)、中央(93/15)、全南(97/16)、忠南(113/21)、慶尚(150-160/27)
台湾	国立台湾(21/1)、国立清華(31/2)、国立成功(32/3)
タイ	マヒドン(34/1)、チュラロンコン(47/2)、チェンマイ(67/3)、タマサート(88/4)、カセサート(120/7)、モンクット王工科大学(181/9)
インドネシア	ガジャマダ(80/2)、バンドン工科大学(98/4)
フィリピン	フィリピン(62/1)、アテネオデマニラ(65/2)、デラサール(107/4)

注1 “大学” もしくは “大学校” は省略。ベトナムの大学は200位までに記載がない。

ルール・ボーfum大学

Ruhr-Universität Bochum, RUB



ルール・ボーfum大学 (Ruhr-Universität Bochum, RUB) は、ドイツの戦後の新制大学として1962年に設立された州立大学です。2010年の統計では、生徒数約34,000、職員数約5000(内、教授数約430)のドイツ有数の大型大学です。アカデミックにも、ドイツのトップクラスの大学で、ドイツ研究振興協会 (DFG: Deutsche Forschungsgemeinschaft,) の一部となっている研究大学・大学院です。



ルール・ボーfum大学は、その名の通り、ボーfumという、ノルトライン=ヴェストファーレン州の西に位置する街にあります。ノルトライン=ヴェストファーレン州がドイツの北西部にありますので、ボーfumは、地図で見ると、かなりオランダに近く見えます。実際に、車や電車でボーfumからオランダまで移動するのは簡単です。ノルトライン=ヴェストファーレン州は、ドイツ国内において、州別人口数が1位で、州都デュッセルドルフのほか、ケルン、ドルトムント、エッセン、デュイスブルク等の大きな都市を抱える、ドイツ経済の一大中心地となっています。また、



ルール・ボーfum大学のあるルール地方は、その中でも、古くから、ヨーロッパ有数の大工業地帯として有名です。

こうした環境から、ルール・ボーfum大学は、自然科学や工学に非常に強い大学であることが想像されますし、実際、その通りですが、他にも、医学部のほか、神学、哲学、法学等の人文科学・社会科学等、併せて、20の学部をもち、幅広い分野で、学術・研究活動を行っています。もちろん日本語学科もあります。

ルール・ボーfum大学は、医学部を除いて大半の学部がボーfum市内の、ルール渓谷の高台にある一つのキャンパスに集まっています。そこから眺めるルール渓谷の景色は美しく、ここがかつてのドイツ有数の炭鉱地帯であったことは、木々に覆われた遠景を眺める限り、全く想像できません。渓谷の下には、ケンナーダー湖があり、ここは市民の安らぎの場ともなっています。

ルール・ボーfum大学と大阪大学は、2010年に大学間交流協定を結んでいます。筆者の関係では、プラズマ物理学の分野において共同研究等盛んな交流活動を行っていますが、今後は、他の分野でも、交流活動が広がっていくことが期待されます。(写真提供: RUB, Press Office)

(コンタクトパーソン・浜口智志 工学研究科教授)

編集後記

みなさんは新しくなった、大阪大学会館をご覧になりましたでしょうか。長い歴史の積み重なった雰囲気大切にしながら、きれいに生まれ変わりました。大阪大学の顔として、これからますます活躍が期待されます。

また、今年は省エネとどのように向き合うかが問われる

夏となりそうです。エアコンを控えたり、昼休みの消灯、エレベータの一部停止のほか、各自の取り組みも大切になってくると思います。みなさんもエコ阪大はじめてますか?

(柿木)

劇団ちゅうかちゃん

膨張！ヤングなのがいい！！



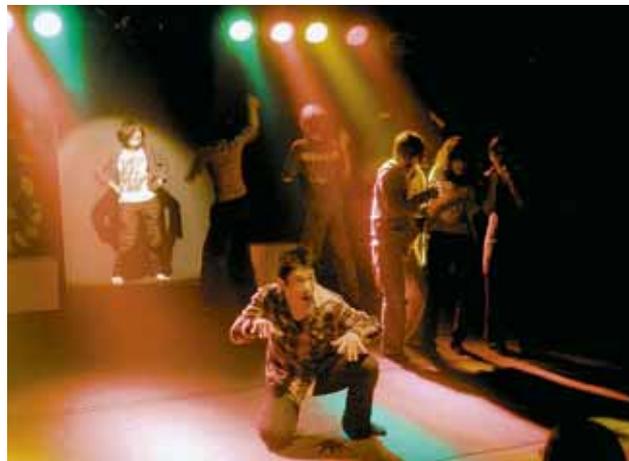
春のうらかな日も夏きにけらし白妙の今日この頃をみなさまいかがお過ごしでしょうか？

劇団ちゅうかちゃんです。大阪大学を中心に幅広く演劇活動に励んでおります。そして現在我々は団内お茶利き大会を控えている所存でございます。しのぎを削る仁義なき戦いです。どうやったら目隠した状態でお～お茶と伊右衛の味を利き分けられるのでしょうか。

それでは、劇団ちゅうかちゃんの紹介をさせていただきます！

当然劇団と名乗るからには我々は演劇の公演を行います。4月に新入生歓迎公演、6月には新入生参加型オムニバス公演、9月には学外公演、11月にはまちなか祭公演を必ず行っております。そのどれもが無料公演でやらせていただいております。無料でお芝居を見てもらうというのがちゅうかの大事な要素でもあるんですね。

演劇というものは私が体感してきた限りでは、恥ずかしいとか、なじみにくいというイメージをもっているようで、やっぱり私たちにとってそのことは少し辛いことで



あります。劇団ちゅうかちゃんはそのような演劇のもつ垣根を少しでも下げ、より多くの人に会場に足を運んでもらい、お芝居を楽しんでもらえたらいいなと思っております。

ああ、団員たちに何を真面目に語っているんだとかわれそうです。もっと楽しいことを書かなくては...本当はちゅうかちゃんにはけいおん！！をしたり、蟻を退治したり、進撃の巨人を追い払ったり、王蟲をなだめたり、概念になったりしています...いい人たちがばかりです。ちゅうかちゃんを今後ともよろしくお願いたします。



団長 長佐古哲也(工3年)

コメント

笑いが取れば何でもいい！感動してくればなおいい！心を動かしてくれば世界を敵に回してもいい！



練習場所：学生交流棟 3F4F 練習室 1,2,3,4
学生会館 2F 大集会室

練習日時：月曜～金曜:16時30分～20時 土曜:10時～18時

団員数：71人(1回生31人2回生21人3回生19人)

連絡先：団長 長佐古哲也(工3回生)

hinoki-no-kai@live.jp

ホームページ：

<http://www.geocities.jp/chaukachawan/index.htm>

トピックス

大阪大学【緊急】シンポジウム 『震災の今とこれから』- 私たちに何ができるのか - 開催

さる4月29日(金)、大阪大学中之島センターにおいて「大阪大学【緊急】シンポジウム『震災の今とこれから』- 私たちに何ができるのか - 」を開催しました。

本シンポジウムでは、甚大な被害の「東日本大震災」に対し、大阪大学の各分野の専門家からの緊急提言として、私たちは、阪神大震災の被災体験をどのように活かし、いま、一人の市民として何ができるのかを、そして、大阪大学人がどのような「英知」を差し出せるのかを市民の方々と一緒に考え、発信することを目指しました。

第1部では「いま」をテーマに、「地震はなぜ起きたか」(廣野哲朗：理学研究科准教授)、「福島第一原発で起きていること」(山口彰：工学研究科教授)、「今後の原子力」(片岡勲：工学研究科教授)と題し、何が起これ「いま」どのようになっているのかについて講演の後、望月正人教授(工学研究科)の司会のもとホール・ディスカッションが行われ、専門家の見地から最新情報が述べられました。

第2部では、「これから」をテーマに、「我々にできること」(瀧美公秀：人間科学研究科教授)、「こころのケア・まるごとのケア」(稲場圭信：人間科学研究科准教授)、「放射能汚染調査」(藤原守：核物理研究セン

ター准教授)、「暮らし・コミュニティ再生...我々がなすべきこと」(森栗茂一：コミュニケーションデザイン・センター教授)、「まちの再生・復興」(加賀有津子：工学研究科教授)

と題し、門村幸夜准教授(産学連携本部)の司会のもと、具体的なボランティア活動をはじめ、これから何を考えるべきか、すべきであるかなど、震災後の復興に向けた取り組みについて、各専門家からの講演がありました。ホール・ディスカッションでは、高校生をはじめ様々な年代から幅広い、そして率直なご質問・ご意見があり、活発な意見交換の場となりました。

多くの参加者からは、大阪、そして大阪大学から日本を元気にしてほしいとの声も寄せられました。当日は約300名の方にご参加いただき、第1部、第2部を通じて、専門家と市民の方がともに考える大変意義深いシンポジウムとなりました。



鷲田総長による挨拶



ホール・ディスカッションの様子

東日本大震災義援金募金のお礼

大阪大学では、東日本大震災の被災者の方々、被災地域への支援活動の一環として、学内で義援金の募金活動を行ってきました。教職員、学生をはじめ多くの大学関係者の方々から1,500万円を超える募金をいただき、大変ありがとうございました。大学としての募金活動は6月をもって終了させていただきます。みなさまの厚いご支援、ご協力に感謝申し上げます。

大阪大学総長 鷲田 清一

阪大NOW No.125 2011 6月号 2011年6月20日発行

編集 大阪大学広報・社会学連携室
発行 大阪大学広報・社会学連携オフィス広報・社会学連携事務室 〒565-0871 大阪府吹田市山田丘1-1
TEL: 06(6879)7017 FAX: 06(6879)7156
ホームページアドレス <http://www.osaka-u.ac.jp/>

「阪大NOW」へのご意見、お問い合わせにつきましては、下記までお寄せ下さい。
E-mail: ki-kousyagaku-kouhou@office.osaka-u.ac.jp